

寄付する人と使う貨幣

——清代後期の貨幣使用と格差社会

村 上 衛

は じ め に	1
I 碑刻史料の利用	3
II 都市の会館・公所への寄付	10
III 華南における寺廟への寄付	28
IV 貨幣使用と格差社会	41
お わ り に	48

は じ め に _____

19世紀前半の中国貨幣史は中国经济史の一つの焦点である。通説では、インド・アヘンの代価としての中国からの銀が流出したとされ、それが19世紀前半の道光不況と関連付けられてきた。

これに対して林満紅は、19世紀初頭のラテンアメリカ諸国の独立による銀鉱山の採掘停止によって世界で銀流通量が減少したうえ、1820年代のヨーロッパの不況で中国産品が売れなかったために、銀不足にともなう不況、ひいては19世紀半ばの混乱につながったとし⁽¹⁾、グローバルな視点から新たな見方を呈示した。

一方、ラテンアメリカ研究者のイリゴインは、ラテンアメリカ諸国の独立によるカルロス銀貨の供給杜絶と、独立した諸国が鑄造した品質の悪いメキシコ・ペソの流通によって信頼できる交換手段を失った江南経済の混乱がもたらされたとみなした⁽²⁾。

また、中国经济史家のフォン・グランは、貨幣の需要は全体的ストックに左右されるとし、17世紀について、対外貿易収支の影響を過大視すべきでないと主張してきたが⁽³⁾、19世紀前半についても同様の見方を示した。フォン・グランによれば、ラテンアメリカ銀貨に対するプレミアムゆえに、広州で銀塊を売ってカルロス銀貨を購入したため、銀塊が海

外に流出したが、その影響は小さいとする。むしろ、19世紀初頭の銅錢改鑄による含有量低下が錢需要の減少と価格低下を招き、銀価格を相対的に上昇させたとみなした⁽⁴⁾。

以上の議論に対して、岸本美緒は各地域における貨幣の使用例を示して反論を行った。カルロス銀貨を利用する地域は福建・広東などに限られ、利用している地域においても銅錢や銀塊が重要な役割を果たしており、カルロス銀貨の銀含有量の変動は清朝経済全体に影響を及ぼさないとした。さらに、カルロス銀貨に対するプレミアムは通常は10%以下であり、外国銀貨の選好が、清朝経済全体に銀不足をもたらすことはないとしている⁽⁵⁾。そのうえで岸本は市場構造モデルとして「貯水池連鎖モデル」をあらためて提起し、貨幣流通を市場論から考えることの重要性を示す⁽⁶⁾。

この市場論に深く関連するのが、黒田明伸の貨幣論である。黒田は18世紀後半の乾隆期における現地穀物備蓄と結びついた銅錢大量供給によって、現地通貨（銅錢）と地域間決済通貨（銀両）が分離したとみなし⁽⁷⁾、銀を利用する上層市場と銅錢を利用する下層市場の間で貨幣が流れすぎないようにしていたとする⁽⁸⁾。そして、アヘン貿易にともなう銀流出の時期、銀の価格は上がったが、銅錢建ての米価が安定していたことから、下層市場の農民への影響が少なかったとする⁽⁹⁾。これに対して岸本は、下層市場が上層市場に対して独立的であるかどうかは、使用する貨幣の種類よりも取引関係の構造いかんによるとしている⁽¹⁰⁾。

以上のように、貨幣史に関する活発な議論がなされているが、都市や農村における貨幣使用状況も、事例研究が不足し、不明な点も多い。上記の議論でも、19世紀中期以降の変動との関連は林満紅の研究を除き、具体的に論じられていないし、林の研究も地域差はあまり考慮されていない。

そこで本論では、都市部（蘇州・上海・北京）と都市近郊（泉州・広州）の会館・公所や寺院に残された碑刻から寄付事例のデータを抽出することによって、各地域における貨幣使用状況を類型化するとともに、銀の出流入のそれぞれの地域における影響を考えてみたい。

寄付事例は中国における収入や資産のありかた、ひいては格差問題にも示唆を与える。中国における社会的分配における均分化の傾向はよく知られている⁽¹¹⁾。農民についてみれば、人口増大と土地希少化にともなう一人あたりの耕地面積および大規模経営の減少と小規模土地所有の増大は周知の事実である⁽¹²⁾。しかし、都市の多くの人々は農業以外から収入を得ていたから、耕地面積だけでは、中国全体の人々の収入の中に農民を位置づけることはできない。商人についてみても、明清時代の客商は零細で、坐賈の経営も分散的とされている⁽¹³⁾。しかしながら、商人の収入や資産が具体的にどのような分布になっていたのかについては計量的に示されることは少ない。

収入という点では、士大夫・官僚らの収入の問題も外すことはできない⁽¹⁴⁾。近年の都市史研究は、江南を中心とする都市における消費や奢侈といった側面に焦点をあてるようになって⁽¹⁵⁾、その消費を支えていたのは士大夫らの膨大な支出である。こうした士大夫らの消費に関連しては、清末に蘇州の陶煦が『租覈』のなかで紳富の奢侈的な消費と勤労大衆の消費性向の相違を指摘し、紳富への余剰の集中が経済的に不利益であることを示したことの斬新性が指摘されている⁽¹⁶⁾。しかしながら、士大夫達の富が相対的にどのような位置づけられるのかは、士大夫階級の巨額な総収入を推計した張仲礼の古典的研究以来、大きく進展していないし⁽¹⁷⁾、張の研究も士大夫以外を含んだ富の分布は十分に示せていない。

そこで本論では、碑刻史料の寄付額別の寄付者数分布から、商人をはじめとする寄付者達の収入の分布を推定してみたい。会館・公所への商人の定期的な寄付金が、商人の資本額・取引額・商界での地位に比例して定められて徴収されたとされるように⁽¹⁸⁾、寄付額は寄付者の収入や財産規模や経営規模、社会的地位を一定程度反映していると考えられる。寺廟への寄付についても同じ傾向はあるだろう。寄付者のデータは、会館・公所はそのメンバー、寺廟は祭祀圏の集団を一定程度捕捉すると思われる。その結果、建碑時期における寄付者の背後にある集団の収入分布を、会館・公所や寺廟に関連する部分に限定されるとはいえ、推測することができる。中国の会館・公所のメンバーが比較的開放的であったことは、幅広い寄付者のデータを得られるという利点にもなるだろう。

以上の寄付者のデータから士大夫・官僚・商人や農民の収入分布を考えてみたい。ただし、商人らが会館の運営のために定期的な寄付を支払っていたのに対して、官僚を中心とする士大夫たちは目立つような寄付を行う傾向にあるから注意が必要であるし⁽¹⁹⁾、寄付者の性格を考慮して、それぞれの碑刻を全体の中に位置づけていく必要がある。また、生員・監生まで含む士大夫層は太平天国前で109万人、太平天国後で144万人と推計されていて⁽²⁰⁾、人口比では人口の0.4%にも満たず、非常に少ないが、総数は多い。こうした士大夫層の収入の多様性にも注目していきたい。

以下、本論では碑刻史料から、貨幣使用状況と寄付額別の寄付者分布を検討していくことにする。そこでまず、使用する碑刻史料とその利用方法について述べておきたい。

I 碑刻史料の利用

1 碑刻史料を使用することの問題点

貨幣史研究を含めた経済史研究において碑刻史料の利用がこれまで断片的にとどまって

きたのには、様々な理由がある。第一に個々の碑刻の性格は異なり、多様な事例を示すものの、個々の碑刻から得られたデータの代表性が問題となる。

また、碑刻のデータが完全でない事例も少なくない。碑刻は長年にわたる摩滅や意図的な破壊によって判読できない文字は多い。碑刻の後半の毀損しているケースが多く、記載されている単位もたとえば「銀□□両」と記載されているものが大半である。当時の銀両は地域や集団などで一致しておらず、この表記ではどの種類の「両」か不明である。さらに、実際にどの通貨で寄付したのか不明な場合もある。後述するように華南では外国銀貨（以下洋銀）が秤量貨幣化していたため、両建てで表記されていても、洋銀ないし洋銀の碎銀の可能性が大きい。銀元建てであっても、「大元」・「中元」といった区別はあるものの、当時流通していた偽造を含む多様な銀貨の細かい種別についてはほとんど記載がない。

碑刻史料を収めた資料集を用いる場合、編纂の際に、紙幅の制約により、碑刻の大きな部分を占める寄付者の部分が省略されてしまうことがある。また、碑刻の配列をそのまま記載できないために、寄付額が分からなくなる場合もある。さらに、碑刻の摩滅などによる誤記も回避しがたい。

もちろん、寄付額は日常的な取引の額よりも高額になり、実際に日常的に使用している貨幣でない事例が多くなる。また広範に使用されていた銭票や非正規の銅銭である小銭が記載されることはないから、貨幣の使用状況をすべて反映するわけではない。

以上のようなデメリットが多いため、経済史研究において、碑刻史料は十分に利用されてこなかった。しかしながら、これまで貨幣の使用状況の事例として使用されてきた契約文書や刑科題本も網羅的なものではないうえ、代表性や記載内容では共通の問題をかかえる。多数の碑刻を検討すれば、一定の傾向性を示すことができ、断片的な記述史料を用いるよりも有意な結果を導くことができるだろう。

また、寄付が会館・公所、廟などの建造・再建に充当される場合、寄付された貨幣はそのまま器物・建材の購入や労働者の賃金など幅広い費目の支出に充当されるため、その地域で広く流通している、あるいは兌換できる貨幣でなければならない⁽²¹⁾。したがって、日常的な零細な取引で使用される貨幣を反映しないかもしれないが、ある一定規模以上の取引で使用している貨幣の状況を反映している。

そして、個々の碑刻から得られるデータは豊富であるから、上記の問題点に十分配慮すれば、有意な結果を導くことも可能である。さらに、本論のもう一つの目的である、寄付額別の寄付者分布という貴重なデータをあわせて検討することができるというメリットもあるから、やはり分析の価値はあるだろう。

2 選択した地域と史料

本論では、都市の蘇州・上海・北京の同郷・同業団体の設立した会館・公所に対する寄付を中心とする碑刻と、福建南部の泉州府と広東の広州府の寺廟の碑刻を取り上げることにする。蘇州・上海・北京をとりあげるのは、清代におけるその重要性による。いうまでもなく、蘇州は清代中期の江南最大の経済都市であり、開港後は上海がそれを引き継いでいく。北京は政治的中心であり、後述するように銅銭供給の中心であった。人口でみると、北京は18世紀初頭以来20世紀初頭にいたるまで、内城・外城をあわせた人口は76～78万人程度と推計されており⁽²²⁾、少なくとも19世紀末までは中国最大の都市であった。蘇州も太平天国までの人口は50万人以上であり、北京に次ぐ規模であったと考えられる⁽²³⁾。上海は、開港前は上海県全体の人口が52.8万人、そのうち都市部が12万人前後であったと考えられているが⁽²⁴⁾、開港後に租界の発展もあって急増し、世紀転換期には100万人を超え⁽²⁵⁾、中国最大の都市になった。

これらの都市において同郷・同業団体の設立した会館・公所も多く、碑刻も一定程度残されている。ただし、蘇州と上海の会館・公所は商工業者が主要な担い手であって士大夫が創設した会館がほとんどなかったのに対して⁽²⁶⁾、北京の場合は約400ヶ所にのぼる会館のうち、86%が科挙試験のために上京してきた士大夫たちのために設立されたものとされている⁽²⁷⁾。したがって、同郷・同業団体の設立した会館・公所とその関係の廟の碑刻を取り上げる本論の事例是北京の会館全体を代表するものではない。

福建南部・広州周辺は歴史的に、中国の対外貿易の中心であり、貨幣の出入りでも大きな役割を果たしてきた。福建南部の漳州・泉州は明代末期からマニラ経由で大量のラテンアメリカ産スペイン銀貨が流入した地域である⁽²⁸⁾。このほか、日本銀も福建南部・広州周辺には大量に流入している。清代においてもこれらの地域への銀流入は続き、広州は18世紀半ば以降の対欧米貿易の発展によって中国の銀の流入口となり⁽²⁹⁾、広東の中でも広州府周辺が最も洋銀が流通していた⁽³⁰⁾。そして、福建・広東では広範な碑刻調査が行われている。なお、泉州府の晋江県の人口は道光9（1829）年に約79万人、広州府の南海県・番禺県の嘉慶23（1818）年の人口数はそれぞれ約83万人、40万人と推定されており⁽³¹⁾、本論で取り上げる地域の人口は、広州周辺が泉州周辺の約1.5倍となっている。

本論では以上の5つの都市・地域について以下の史料を利用した。

(1) 蘇州

本論で使用した『江蘇省明清以来碑刻資料選集』は、江蘇省博物館が1956年冬から蘇州で収集した543通の碑刻に加えて、近隣の常熟・呉江（盛澤鎮）・無錫・南京・上海・南通で収集した碑刻のうち、370通を選択して出版したものであり、そのうち蘇州の碑刻が253

通になる⁽³²⁾。また、『明清蘇州工商業碑刻集』は、蘇州歴史博物館・江蘇師範大学歴史系・南京大学明清史研究室の三者が調査・収集・整理した明清時代の蘇州府を対象とした碑刻258通を含んでいる⁽³³⁾。本論ではこの2冊から清代の40通を利用し、両者が重複して採録している碑刻は『明清蘇州工商業碑刻集』を利用した。さらに、この2冊に含まれない碑刻を収録する『明清以来蘇州社会史碑刻集』⁽³⁴⁾より、10通を利用し、合計50通からデータを抽出した（附表A参照）。

(2) 上海

本論で使用した『上海碑刻資料選輯』は1959年・1962年前後の2度にわたる文物の一斉調査によって、当時の上海市区と郊外の県において発見された碑刻を上海博物館図書資料室が編集して刊行したもので、全体では245通となる⁽³⁵⁾。本論ではそのうち碑刻47通から59種のデータを抽出した（附表B参照）。ただし、上海の件数が他地域と比べて少ないため『上海碑刻資料選輯』に掲載され、寄付額が判明しているものについては、会館・公所以外に寺廟も対象とし、郊外の碑刻も含めたが、それらの碑刻は貨幣使用に関する限り、会館・公所の碑刻と大きく異なる傾向を示していない。

(3) 北京

本論では『仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集（一～六）』⁽³⁶⁾と『明清以来北京工商会館碑刻選編』⁽³⁷⁾を用いた。前者は1942・1943年夏、1944年秋に行われた東京大学東洋文化研究所の仁井田陞らによる調査⁽³⁸⁾の際に収集された拓本を中心とし、加藤繁から仁井田陞に引き継がれた拓本を含み、60館の会館・公所別に、聞き取り調査の成果もあわせて整理されている⁽³⁹⁾。後者は、1961年に李華が北京の工商業行会を1年にわたって46館の会館などを調査した際に収集した200余通の碑刻のうち、95通を選んで刊行したものである⁽⁴⁰⁾。両者には重複が存在するが⁽⁴¹⁾、本論では主として前者を用い、寄付者が省略されるなどデータが欠落していたり、収録されていない碑刻は後者を用い、清代の48通からデータを抽出した（附表C参照）⁽⁴²⁾。

(4) 泉州

本論では『福建宗教碑銘彙編』泉州府分冊⁽⁴³⁾を使用した。該書は編者である廈門大学の鄭振滿らが1987年以来福建各地で収集してきた宗教活動に関連した碑記・銘文1,363通を採録して出版したものである⁽⁴⁴⁾。本論ではそのうち、巻1の泉州府城、晋江県の部分562通のうち、明末の16世紀から清代にかけての48の寺廟などに関わる56通の碑刻から57種のデータを抽出した（附表D参照）。

(5) 広州

本論では『広州府道教廟宇碑刻集積』⁽⁴⁵⁾を使用した⁽⁴⁶⁾。該書は編者である香港中文大学

の黎志添らが2006年以来収集してきた、広州府の13の県内にある121座の道教の廟宇に関する282通の碑刻を集めて出版したものである⁽⁴⁷⁾。本論ではこのうち広州府属の29座の廟に関わる碑刻を中心として、明末の17世紀から清代にかけての70通からデータを抽出した（附表E参照）。

3 データの抽出方法

碑刻名は原則として収録している資料集の碑刻名に従った。北京の事例については、碑陰（碑の裏面）の区別がある場合はそれを記入した。所在は建碑の場所が不明の場合は収蔵機関を記した。碑刻の多くは、碑刻を建てた年を記載しているため、実際に寄付した時期が不明であることが多く、寄付時期と建碑の時期にずれが生じることもある。建碑と寄付の時期が異なる場合は寄付時期を附表の配列の基準とした。また、西暦の正確な年が判明しない場合もあるが、便宜的に可能性が高い西暦年を使用した。

碑刻により、寄付金額の正確さは異なる。計算上の便宜のため、金額については「銀一兩正」と表記されていないものも1兩とみなし、「欠壹中員」などと表記されているものも、中元1元とみなしてカウントした。銀兩建ての場合、同一の碑において「銀壹錢正」・「銀壹錢」という表記が混在している場合もあるが、区別せず1錢として入力した。

銀兩についてみると、両の種類についての記載は非常に少ない。上海では1857年に導入されて以降、広く用いられていた規元（上海両）建てによる記載が、光緒3（1877）年の「靛業公所縁起及釐捐収支碑（B-32）」に18件あるが⁽⁴⁸⁾、規元建ての表記はこの1通にとどまる。北京では宣統元年（1909）年の（「京師商務總會公廨落成記（C-47）」）に京足銀と松江銀の記載があった⁽⁴⁹⁾。しかし、それぞれの品位は一定していないうえ、京足銀は京公砵平という秤量の十足紋銀であるとしても、十足銀よりも品位が劣る松江銀についてはどの秤量で計測されたかは不明であるうえ⁽⁵⁰⁾、記載もこの1通にとどまり、かつ他に類するものがない。これらはいずれも、他の銀兩建てのデータと区別せずにデータを処理した。

洋銀についてみると、また「元」と「大元」は区別して表記されていても、合計額では区別せずに合計されていることが多く、基本的に同一とみなし、中元は0.5元として計算した⁽⁵¹⁾。19世紀後半になれば、多種類の洋銀が流通していたはずであり、1890年以降の各省鑄造の銀貨の流通も始まるが、洋銀の種類についての記載は極めて少ない。英洋（メキシコドル）も洋銀の一種であり、区別して記載していない碑刻も多いと思われるが、上海と蘇州では複数の碑において区別して記載されているため、他と分けてデータを取った。「仏銀（仏頭銀＝カルロス銀貨）」の記載のある碑は1通のみであったため⁽⁵²⁾、データの処理の際には他の元建てのデータと区別していない。なお、洋銀の単位である「圓」・「員」・「元」

という表記があるが、すべて「元」で統一した。また、銅銭であるものの「七折錢一兩二錢」などと表記される両建ての折錢については⁽⁵³⁾、寄付事例が多いために、折錢の分類をもうけて処理した。

碑刻の欠損などで正確なデータが不明の場合は、推定できる最小の金額を入力した。例えば三兩□□の場合は3兩、六兩□錢六分は6.16兩とみなして入力した。碑刻は全体的に寄付額が大きい順に記載されているため、小口の寄付についての欠損が多い傾向にあるが、金額が判明しない限り、寄付者名や寄付者数が分かってもデータには入れていない。それゆえ、欠落がある場合、実際よりも寄付額の平均が高くなってしまふことになる。一方で、廟に供える器物をはじめとして高額な現物の寄付も多々見られ、現金による寄付額を上回る可能性もあるが、金額に換算することはできないため、これをデータとして処理しなかった。

碑刻には複数の寄付者の合計や合計額のみ記載がある場合もあるが、1件あたりの寄付額が不明な場合は、集団であっても1件とみなしてデータを入力した。一方で、寄付者名が不明でも寄付者数と寄付額の総額が判明し、寄付者が同額を寄付したことが明記されていて1件あたりの寄付額が判明する場合は、寄付者名が不明であっても寄付者数を寄付件数とみなしてデータを入力した。また、基本的に寄付額が判明するデータを集計したため、欠落がある場合や両建てで錢・分の記載がなく、正確な重量が記載されていない事例が多い場合は、碑刻にある寄付額の総額と本論のデータの総額にずれが生じる事例もあり、その場合は附表の備考欄に碑刻に記載された総額を記入した。

4 データの概要

表1より本論で取り上げた碑刻の建碑ないし寄付時期をみると、基本的に18世紀以降で、北京・広州以外は開港後が過半を占め、北京・広州も19世紀以降が大半を占めている。17世紀以前が非常に少ないのは、碑刻の摩滅や破壊が影響している。なお、動乱期の咸豊時期の対象となる碑刻は、蘇州1通、上海3通、北京1通、泉州2通、広州3通と少ない。咸豊期は銀票・錢票・大錢（額面の大きな銅錢）・鉄錢などの発行で貨幣制度は混乱したが、これらの貨幣は信任を受けず⁽⁵⁴⁾、碑刻に記されることもなかったであろうから、貨幣の動向を把握するのに大きな影響はないと思われる。

入力した寄付件数は、蘇州5,314件、上海4,842件、北京6,929件、泉州1万188件、広州4万5,742件となり、人口比からしても広州が圧倒的に多く、泉州がそれに次ぐ。附表D・Eが示すように、広州については近郊農村の廟、泉州については泉州周辺の鎮の寺廟が大半を占め、都市周辺の幅広い状況を反映している。広州の件数が多いのは、表2にみられるように、各碑刻に記載されている銀元建て・銀両建ての寄付件数が著しく多いことが原

表1 建碑・寄付時期

	蘇州	上海	北京	泉州	広州
16世紀	0	0	0	3	0
17世紀	0	2	0	3	6
18世紀前半	2	1	3	1	8
18世紀後半	7	4	9	9	16
19世紀：開港前	8	8	15	9	13
開港後（1843～1911）	33	42	20	32	28
不明	0	2	1	0	0
合計	50	59	48	57	71

出典：附表A～E

表2 碑刻1通あたりの寄付件数

	銀元	銀両	銅銭	折銭
蘇州	63.3	48.4	80.9	81.8
上海	85.9	33.0	33.1	18.0
北京	2.0	165.9	68.8	
泉州	102.7	31.5	26.4	
広州	311.3	237.6	25.0	

出典：附表A～E

表3 碑刻1通あたりの寄付金額

	銀元（元・大元）	英洋（元）	銀両（両）	銅銭（文）	銅銭（吊）	折銭（両）
蘇州	908.9		3,004.8	1,052,202		374.9
上海	2,752.5	1,275.1	6,522.2	1,481,419		362.7
北京	80.0		1,453.0	780,192	1,271.3	
泉州	1,497.0		869.0	28,656		
広州	877.4		277.7	2,500		

出典：附表A～E

因である。

表3は碑刻1通あたりの寄付金額を示す。都市部では蘇州・上海と比較して、北京の寄付金額の規模は小さいが、大半が同業団体であることによる。また広州は泉州と比較した場合、寄付額の規模は小さいが、これは銀元建てと銀両建ての両方の記載がみられる碑が多い。え、農村部の小規模な廟宇の碑刻が多いからである。表2とあわせてみれば、広州周辺については、農村部における貨幣の使用状況と収入の分布状況の一端を示していると考えられる。以下、各地域に分けて検討していきたい。

Ⅱ 都市の会館・公所への寄付

1 蘇州の会館・公所

(1) 蘇州の会館・公所と碑刻

蘇州の会館48館のうち、乾隆年間（1736～1795年）に14館が設立されたように、33館は乾隆年間までに設立されており、以後に設立されたのは嘉慶年間（1796～1820年）1館、道光年間（1821～1850年）2館、同治年間（1862～1874年）4館、光緒年間（1875～1908年）5館で、嘉慶年間以降の再建も8館にすぎないので、蘇州の会館の全盛期は乾隆年間までで、嘉慶年間以降に衰退したとされる⁽⁵⁵⁾。一方で公所は設立時期が判明している134館のうち、清代以前の設立が2館、順治年間（1644～1661年）が1館、康熙年間（1662～1722年）が5館、乾隆年間が16館、嘉慶年間が15館、道光年間が26館、咸豊年間（1851～1861年）が8館、同治年間が20館、光緒年間が26館、宣統年間（1909～1911年）が2館、民国期が13館であり、嘉慶・道光以降に盛んになったとされる⁽⁵⁶⁾。

本論で取り上げる碑刻でみると、附表Aにあるように、大規模な銀両建ての寄付は乾隆年間に集中している。ただし、1820年代末以降にも公所を中心に多数の建碑が集中しており、ここから長期的な道光不況をみてとることはできない。1850年代初頭から1860年代半ばまでの事例がないのは、開港にともなって商業の中心が上海に移転しつつあったことと、太平天国戦争時の蘇州の荒廃が、会館・公所の設立・再建に影響したといえる。

(2) 貨幣の使用状況

附表Aより全碑刻のデータの総数をみると、蘇州は件数では銀元建て2,277件、銅銭建て2,022件、銀両建て603件、折銭建て409件、英洋建て3件となる。一方、全時期の総額は銀両建て4万4,530両、銀元建て3万2,721元、銅銭建て約2,420万文、折銭建て1,874両、英洋建て200元の順となる。洋銀の種類は不明であり、銀両は単位がバラバラなうえ、時期ごとの価値が大きく異なるためにそのまま比較することはできないが、特定の貨幣に偏らないという一定の傾向を示しているといえる。

清代を通じた1件あたりの金額の平均をみると、銀元建ては約24元、銀両建ては約121両、銅銭建ては約4万文、折銭が約5両となり、銀両の金額の多さが顕著であるが、これは乾隆年間の2通、同治年間の1通の寄付額が多額で、かつ全て銀両建てだったことによる。

貨幣使用の時期的変化をみると、18世紀後半は主に銀両建てと折銭建てであったのが、18世紀末に銀両から銀元建てへの転換がみられ、その後は銀両建ての例はほとんどなくなってしまふ。蘇州市街地の契約使用貨幣において銀両が19世紀後半まで重要な役割を果たし、19世紀後半になるまで洋銀が使用されていないのと比較すると⁽⁵⁷⁾、洋銀への転換が

表4 蘇州「翼宿神祠碑記 (A-7)」の貨幣表記

	種類	件数	金額	単位
銀	銀両	50	904.39	両
	洋銭	1	2	個
銅銭	記載なし	16	176,429	文
	串銭	30	365,703	文
	足銭	20	161,540	文
	九九銭	1	3,000	文
	六折銭	1	6.00	両
	六銭	1	1.00	両
	六二銭	3	15.00	両
	六三銭	220	1,068.46	両
	六五銭	2	6.00	両
	六七銭	1	8.00	両
	六九銭	1	69.30	両
	七折銭	5	8.80	両
	七十銭	5	37.00	両
	七十串銭	1	90.34	両
	記載なし	2	18.00	両

出典：『江蘇省明清以来碑刻資料選集』282-294 頁

より早い時期にみられるのが特徴である。

銅銭建ては折銭を除くと1830年代頃から増大、金額的には銀元建てを圧倒する事例も増え、清末まで使用されている。ただし、銅銭建てが増大するのは、会館と比較して寄付額が少ない公所の事例が増えることが影響している可能性があり、貨幣使用の変化をそのまま反映しているわけではない。

折銭の事例として代表的なのは、梨園公所にある乾隆48（1783）年の「翼宿神祠碑記（A-7）」であり、寄付者の貨幣表記を示したのが表4である。630文で1両とみなす六三銭が大多数を占めるとはいえ、六折銭（1両＝600文）から九九銭（1両＝990文）にいたる多様なレートで銅銭による寄付が行われている。串銭・足銭のなかにも700文・1,400文・2,100文で支払われたものが散見され、これは両建てになっていないだけで七折銭であろう。梨園公所は崑曲・弋腔の戯曲関係者によって建造された公所であり⁽⁵⁸⁾、団体の性格が銅銭払いに影響した可能性がある。梨園公所の寄付者は南京・無錫・嘉興・清江浦・上海や安慶や浙江といった近隣都市・地域のみならず、湖広・山東・河南・福建や北京・天津・保定・膠州など多様な地域の劇団に広がっている。しかしながら、遠方の寄付者の多くは六三銭で支払っており、遠方の寄付者が折銭の多様性をもたらししているわけではなく、

むしろ蘇州内部において多様性がみられたと考えられる⁽⁵⁹⁾。

乾隆年間には折銭建ての寄付が多い。乾隆41（1776）年の銭行商人らによる「山西会館銭行衆商捐款人姓名碑（A-4）」が全て折銭で寄付されているのは、業種が背景にあると思われる⁽⁶⁰⁾、乾隆38（1773）年の「修建徽郡会館捐款人姓名及建館公議合同碑（A-3）」は湧油幫・蜜棗幫・皮紙幫の商人達の寄付であるが、全て「大佛潘霞城捐錢十三両」といった形式で記載されており、折銭であろう⁽⁶¹⁾。表5に示す乾隆42（1777）年の「全晋会館応墊捐輸碑記（A-5）」では高額の寄付は銀両建てであるが、52両以下で多くの商店が両建てで銅銭を寄付しており、これも折銭である⁽⁶²⁾。その後の時期の碑刻で折銭が明記されているのは先述の「翼宿神祠碑記（A-7）」の後は道光12（1832）年に1件認められるのみである。

しかし、岸本が指摘するように、木器製造業者が設立した小木公所にある道光24年の「小木公所公議常規並捐戸姓名碑（A-18）」には1,400文、700文、350文など、700の倍数ないし分数であるものが多く、折銭で納入された可能性が高い⁽⁶³⁾。同様に漆器製造業者の公所である性善公所は、道光17年の「漆作業創建性善公所夥友捐助姓名碑（A-16）」では銅銭寄付者512名のうち、500名が350文を寄付している⁽⁶⁴⁾。さらに道光25年の「漆作業捐助修理性善公所碑（A-20）」は銅銭寄付13件のうち3件が700文、咸豐元（1851）年の「漆作業捐助修理性善公所碑（A-22）」では銅銭寄付153件のうち17件が700文であり⁽⁶⁵⁾、折銭慣行が影響している可能性が高い。太平天国戦争後の再建時期でも、同治9（1870）年の「重建小木公所同業捐款数目碑記（A-27）」では銅銭寄付者17件のうち12件が700文であり⁽⁶⁶⁾、小木公所の折銭慣行が続いていることがうかがえる。同治11年の「重建浙南公所碑記（A-29）」において、各商店が7,000文を寄付しているのも折銭であろう⁽⁶⁷⁾。また、光緒7（1881）年の「重修老郎廟捐資碑記（A-32）」は寄付額を七折銭10両とし、洋銀4元と銅銭2,520文、洋銀6元と銅銭280文という形で支払っているが、これも梨園公所の廟であり、折銭慣行が続いていたことを示す⁽⁶⁸⁾。以上のように、黒田が指摘する折銭が乾隆22年から乾隆55年に集中的に出現したとする傾向は⁽⁶⁹⁾、折銭が明記されているものについては当てはまるが、実際にはその後も折銭は継続して使用され⁽⁷⁰⁾、それは梨園公所や小木公所、性善公所といった特定の集団において顕著であった。

以上のように、寄付から見る限り、貨幣の使用は全体的な動向は銀両から洋銀への転換が顕著であり、折銭を含めば、銅銭は一貫して使用され続けている。そして、折銭使用にみられるように、同業集団ごとに貨幣の使用状況や慣習は大きく異なっていた。

（3）寄付額別の寄付者分布

商人たちの寄付額をみると、最大の11,022両に達する寄付者たちを記す「銭江会館各綢緞莊捐輸釐費碑（A-2）」のある銭江会館は、杭州の絹商人らにより乾隆23（1758）年に資

表5 蘇州「全晋会館応塾捐輸碑記（A-5）」の寄付額

店名	種類	金額	単位
日章号	銀	1,510.63	両
三立号	銀	1,280.82	両
遷興号	銀	944.86	両
大順号	銀	804.23	両
裕生号	銀	777.68	両
万盛号	銀	767.54	両
乾裕号	銀	—	両
益興号	銀	40.60	両
大順号	銅錢	52.00	両
合益公店	銅錢	26.00	両
瑞利号	銅錢	20.00	両
永寿号	銅錢	20.00	両
裕生号	銅錢	10.00	両
遷興号	銅錢	10.00	両
万□号	銅錢	10.00	両
□□号	銅錢	10.00	両
三立号	銅錢	10.00	両
隆興号	銅錢	10.00	両
豊泰老店	銅錢	10.00	両
瑞利号	銅錢	10.00	両
双和号	銅錢	10.00	両
馮字号	銅錢	10.00	両
永茂号	銅錢	10.00	両
環盛正号	銅錢	10.00	両
公興店	銅錢	10.00	両
乾裕号	銅錢	5.00	両
九元号	銅錢	5.00	両
豊泰号	銅錢	5.00	両
□□号	銅錢	5.00	両
大裕号	銅錢	5.00	両
洪億号	銅錢	5.00	両
□□号	銅錢	2.00	両
□□号	銅錢	1.00	両

出典：『明清蘇州工商業碑刻集』333-335頁

註1) 万盛号の釐頭金は「二百四十両□□□□」と記載されているが、240両とみなした。

註2) 乾裕号は「捐応塾銀□百□□両」と記載され、寄付額は100両以上と考えられる。なお、同号は銅錢建てでも寄付を行っている。

金を集め、乾隆37（1776）年に他の杭州商人から独立して設立されたものである⁽⁷¹⁾。寄付額は、碑刻の冒頭に「乾隆二十三年起至四十一年止、各莊捐輸釐費列左」とあるように乾隆23～41年の19年間に絹織物に附加された「釐費」の総額である。したがって、寄付の実際の負担者は商品購入者になり、寄付額は取引量を示し、商人の富裕そのものを示しているわけではない。なお、最大の寄付者である源発号も1,780両余りで、1年あたりに直してしまうと100両に満たないことになる⁽⁷²⁾。

同様に、金額の多い乾隆42（1777）年の「全晋会館応塾捐輸碑記（A-5）」・「全晋会館衆商捐釐碑（A-6）」のある全晋会館は、山西会館ともよばれ、康熙60年に山西の錢莊によって設立され、乾隆30年に閭門外に移転した⁽⁷³⁾。このうち、前述の「全晋会館応塾捐輸碑記」は全晋会館の建造にあたり、乾隆31～41年にかけて、捐釐・樂輸の不足額を立て替えた商店を記している⁽⁷⁴⁾。判別した寄付額を表5からみると700両以上の寄付者も6店ほどみられるが、その他は銅錢建てで52両以下であり、10両以下が大半を占めている。判別した部分で最大の寄付者は合計1,510.63両を立て替えた日章号である⁽⁷⁵⁾。日章号の時期毎の寄付額の変遷は不明だが、1年あたりでは150両程度ということになる。

「全晋会館衆商捐釐碑」は全晋会館建造にあたり、商品に附加する形の捐釐による寄付であり、商人が直接負担した訳ではなく、寄付額は取引規模を示している。寄付期間は16年間におよび、100両以上の寄付者は7件のみであり、最大の寄付者の興隆祥記の寄付額は450両であるが、次に高額の寄付者は250両以下になる。分布を図1からみても2両未満の寄付者が最多で、10両以下が大半を占めており、取引規模の小さな商人が多数を占めていたことが分かる。

以上のように、江南最大の経済都市であった蘇州の商人の寄付額は、高額の場合は商品価格に上乘せして徴収した額から寄付する「捐釐」の場合があり、その場合は自らの資産から寄付していないため、その金額から商人の富裕が示されるわけではない。

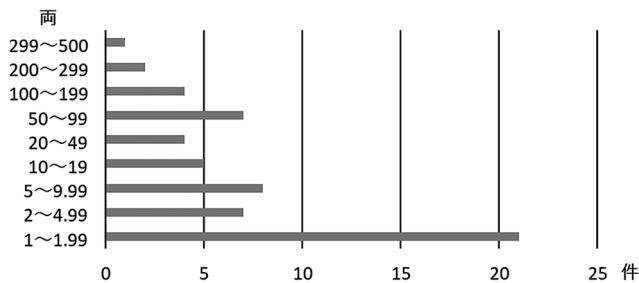


図1 蘇州「全晋会館衆商捐釐碑（A-6）」の寄付額分布

出典：『明清蘇州工商業碑刻集』335-337頁

それでは、商人と官僚を比較するとどうなるのだろうか。明清時期の江南においても、地方の官府の庇護を受ける必要があるため、会館と官府の関係は密接であり⁽⁷⁶⁾、先述したように官僚たちの寄付額は多い。そこで、比較的寄付金額の多い嘉慶元（1796）年の「重修江西会館樂輸芳名碑（A-9）」の金額をみってみる。江西会館は江西商人によって康熙22（1683）年に設立された会館である⁽⁷⁷⁾。この碑刻の銀両建てのデータをみると、図2にみられるように大半が10両以下、中央値は6両である一方、50～99両の部分が少ない。表6から主要な寄付者をみると、江西省建昌府の「南城県衆商」が1,600両、「麻貨衆商」が1,200両、蘇州西郊にある楓橋鎮の「餅行衆商」が700両、南昌府の「紙貨衆商」が700両といった形で、商人が共同で寄付しているのが目立つが、個々の商人の寄付額については江西省南昌府豊城県の熊立興号が100両の寄付を行うのみで、商人の寄付者で次に多いのは40両を寄付した恒裕号になってしまう。銅銭による寄付は銀両建てよりも金額は低いし、多額の寄付はいずれも商人が集団で寄付している。

一方で目立つのが江西を籍貫とする官僚であり、江寧布政使陳奉茲（江西德化人）、雲南布政使熊枚（江西鉛山人）、山西布政使謝啓昆（江西南康人）、兩淮都轉塩運使司曾煥（江

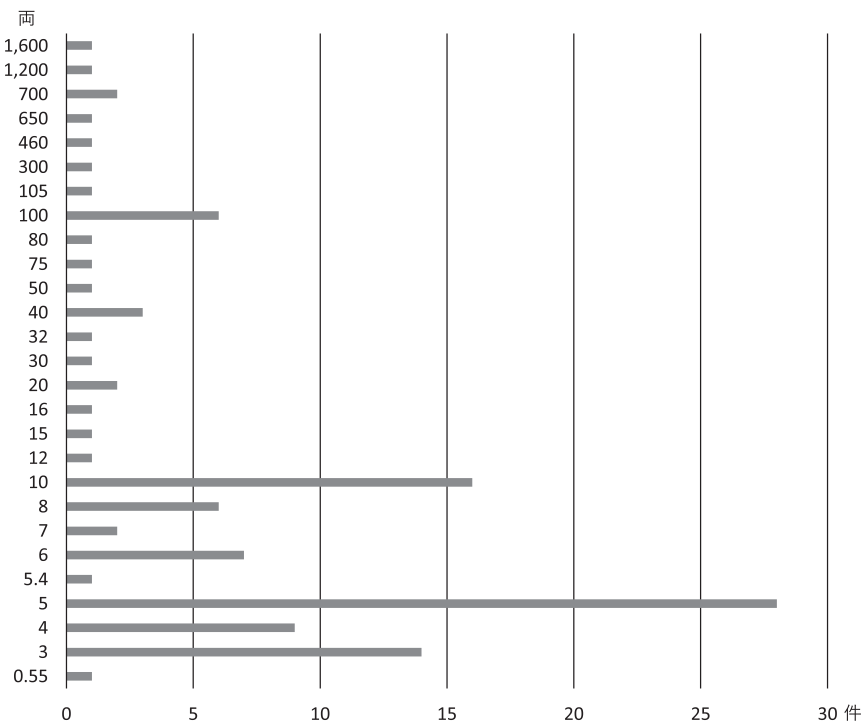


図2 蘇州「重修江西会館樂輸芳名碑（A-9）」の銀両建て寄付額分布

出典：『明清蘇州工商業碑刻集』345-349頁

表6 蘇州「重修江西会馆樂輸芳名碑（A-9）」主要寄付者

寄付者	種類	寄付額	単位
江寧布政使司陳奉茲	銀	100	両
雲南布政使司前任江蘇按察司熊枚	銀	100	両
山西布政使司前任江南河庫道謝啓昆	銀	100	両
兩淮都轉運使司曾煥	銀	100	両
江蘇常鎮通道查淳	銀	100	両
江蘇安徽寧池太廬鳳淮楊十府糧道趙由坤	銀	50	両
原任松太兵備道張銘	銀	30	両
戸部員外郎李	銀	40	両
江蘇太倉州知州魏	銀	40	両
原任長洲縣楊	銀	8	両
元和縣分縣黃廷綬	銀	10	両
江蘇督糧道庫戸	銀	10	両
丹徒縣丹徒巡庁楊青	銀	10	両
南匯縣三林巡庁陳惠	銀	10	両
江蘇候補州李	銅錢	4,000	文
崑山縣正堂魏	銀	4	両
麻貨衆商	銀	1,200	両
南城縣衆商	銀	1,600	両
楓橋鎮餅行衆商	銀	700	両
南昌府紙貨衆商	銀	700	両
炭貨衆商	銀	650	両
豐城縣漆器衆商	銀	460	両
山塘花箋紙衆商	銀	300	両
磁器衆商	銀	150	両
德興縣紙貨衆商	銀	105	両
豐城縣熊立興号	銀	100	両
桐城縣紙商	銀	80	両
烟箱幫衆商	銀	75	両
永福衆烟商	銅錢	85,000	文
管城幫衆商	銅錢	64,000	文
錫桐山布商	銅錢	50,000	文
李雲衍	銀	40	両
漆貨衆商	銀	32	両
恒裕号	銀	20	両
王占芳	銀	20	両

出典：『明清蘇州工商業碑刻集』345-349頁

表7 蘇州「重修三山会館勸助姓名碑（A-12）」の各幫寄付額

幫名	寄付者数	寄付額（元）	1件あたり寄付額（元）
洋幫	32	853	26.66
干果幫	14	300	23.08
青果幫	16	119	7.44
絲幫	29	507	17.48
花幫	20	157	7.85
紫竹幫	3	40	13.33
合計	114	1,976	17.49

出典：『明清蘇州工商業碑刻集』352-354頁

注）干果幫は寄付額が1件不明。

西南城人）、江蘇常鎮通道查淳（順天宛平人）らがいずれも100両を寄付している。その他の官僚たちも4～50両の寄付がみられ、1件あたりの金額は大半の商人を上回っている。そして、40両の寄付者の次に高額な寄付は10両となり、やはり上層と下層の間の中間層の寄付者の部分が薄い。

道光10（1830）年の「重修三山会館勸助姓名碑（A-12）」も官僚の寄付が目立つ。三山会館は明の万暦41（1613）年に福州を中心とする商人によって蘇州の胥江西岸に建造され、康熙年間に再建されている⁽⁷⁸⁾。寄付者は福州府などを籍貫とする官僚ら7人のほか、商人が多数を占める。表7にみるように、商人の1件あたりの寄付額の平均は20元を下回り、最多の洋幫も30元を下回る。全体の寄付額の分布は図3に示すとおりである。5元の件数が最多で、10元がそれに次ぐ。多額の寄付者は洋幫の林建誠が200元を寄付している。これに対して官僚は、江蘇布政使梁章鉅（福建長樂人）・海門州分府陳経（福建人）がそれぞれ200元、常州陽湖県知県廖鴻苞（福建侯官人）が150元などを寄付している。欠落があるために全体は不明であるが総額2,599元中、少なくとも官僚が590元を寄付していることになる⁽⁷⁹⁾。多額の寄付者が目立ち、小額の寄付者が多数を占める中で、その中間の金額の寄付者数が少ないのは図1・2と共通する。

表8に示す光緒8（1882）年の「蘇州新建兩広会館記（A-33）」は広東省出身者の寄付が列挙されているが、津海関道鄭藻如（広東香山人）の1,275元を筆頭として⁽⁸⁰⁾、陳蘭彬（広東呉川人）・丁日昌（広東豊順人）・何如璋（広東大埔人）といった有力官僚の寄付が圧倒的に多い。ただ、南匯知県顧思賢（広東新興人）が鄭藻如に次ぐ700元を寄付している一方で京官の何如璋が50元であるなど、寄付額の多寡は官職の序列と完全に一致するわけではなく、その時点での財力を反映していると考えられる。商人については、上海の惠潮幫紳商が500元、上海広肇公所が405.4元など、上海の商人団体の寄付が目立つほか、シンガポール領事であった胡璇澤（広東番禺人）⁽⁸¹⁾や輪船招商局から資金募集のためにシンガ

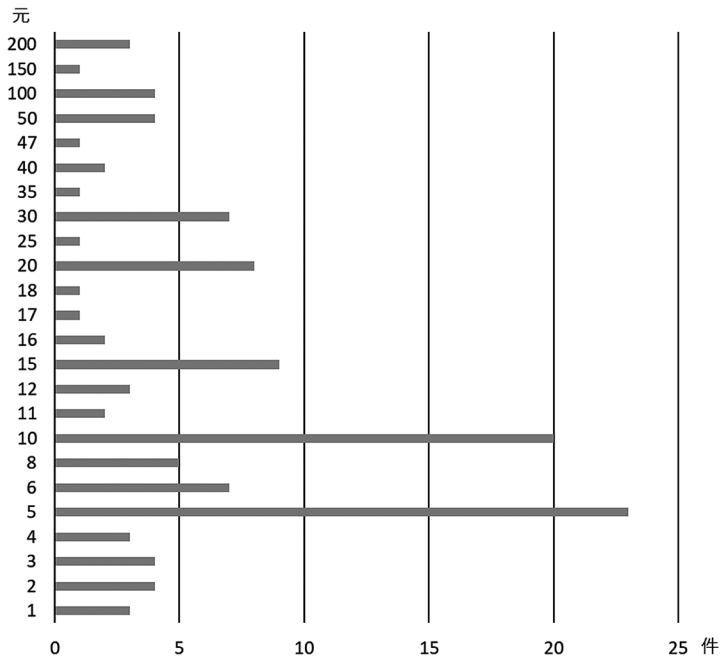


図3 蘇州「重修三山会館勸助姓名碑 (A-12)」の寄付額分布

出典：『明清蘇州工商業碑刻集』352-354頁

ポールに派遣された温宗彦⁽⁸²⁾を通じてシンガポールの商人たちが合計305元を寄付しているなど、集団の寄付が中心となる⁽⁸³⁾。商人個人の寄付は唐廷枢（広東香山人）・徐潤（広東香山人）といった上海を拠点とする買辦をはじめとして、捐納により候補官の肩書きを得た者が目立つが、官職をもたないものは100両に満たない。

会館の経常的経費のために商人が月ごとに寄付していた金額が判明しないと官僚と商人の寄付金額の比は判明しないが、多額であっても商人自身が負担しない「捐釐」である場合は実質的に商人の寄付ではないから、少なくとも江南最大の経済都市において官僚が時として圧倒的な寄付を行っていることは注目されるべきだろう。

なお、特殊な事例としては湘軍系統の寄付が列挙される同治9（1870）年の「湖南会館修建表忠祠捐款收支清冊碑（A-28）」がある。太平天国鎮圧後、彭玉麟（湖南衡陽人）を筆頭に湘軍系統の武官は各地で湖南会館の再建・創建に励んでおり⁽⁸⁴⁾、蘇州の湖南会館表忠祠もその一つである。主要な寄付者を碑刻の掲載順に示した表9のように、彭玉麟が銀4,000両寄付したのをはじめとして、長江水師提督黄翼升（湖南長沙人）、江南全省提督李朝斌（湖南善化人）、湖北提督郭松林（湖南湘潭人）、浙江巡撫楊昌浚（湖南湘鄉人）といったような楚勇を含む湘軍系統の武官が寄付者の多数を占めている。水師関係の武官が多い

表8 蘇州「新建両広会館記（A-33）」寄付者

寄付者	貨幣種類	金額	単位	寄付者	貨幣種類	金額	単位
都察院左副都御史陳蘭彬	洋銀	134	元	蘇州衛謝藩	洋銀	100	元
前任江蘇巡撫丁日昌	洋銀	170	元	上海惠潮幫紳商	洋銀	500	元
江寧布政使梁肇煌	洋銀	200	元	上海広肇公所	洋銀	405	元
江蘇布政使譚鈞培	洋銀	147	元	鎮江潮陽幫紳商	洋銀	150	元
江蘇按察使許応鏞	洋銀	500	元	楊州衆塩商	洋銀	200	元
直隸天津海関道鄭藻如	洋銀	1,275	元	海澄饒紳商	洋銀	100	元
翰林院侍読学士何如璋	洋銀	50	元	揭普豊紳商	規銀	100	両
戸部主事梅自新	洋銀	100	元	卓杏村	洋銀	100	元
江蘇候補道蘇元瑞	洋銀	100	元	王恭泰号	洋銀	50	元
江蘇候補道葉廷眷	洋銀	300	元	黄肇麟	洋銀	30	元
江蘇候補道唐廷枢	洋銀	300	元	卓文俊	洋銀	30	元
江蘇候補道徐潤	洋銀	200	元	李瑞邦	洋銀	50	元
江蘇候補府李佑梅	洋銀	100	元	怡和泰	洋銀	30	元
江西候補道陳振緒	洋銀	300	元	煜興隆記号	洋銀	20	元
福建候補道郭熙光	洋銀	100	元	呂熾垣・何澤田	洋銀	10	元
新加坡領事温宗彦寄到衆商	洋銀	205	元	上海南順泰号	洋銀	30	元
新加坡領事胡璇澤寄到衆商	洋銀	100	元	江蘇候補同知梁宝鑑	洋銀	50	元
鎮江府知府李仲良	洋銀	100	元	上海北順泰号	洋銀	15	元
南匯県知県顧思賢	洋銀	700	元	陳源盛号	洋銀	15	元
陽湖県知県梁鵬	洋銀	300	元	鎮江嘉応幫紳商	洋銀	30	元
署陽湖県知県唐徳峻	洋銀	100	元	淀山司巡檢李耀光	洋銀	50	元
署常熟県知県龍景曾	洋銀	50	元	署婁県知県陸冠瀛	洋銀	120	元
如皋県知県劉廷鏡	洋銀	100	元	茶陽公所	洋銀	77	元
署興化県知県張振鏞	洋銀	200	元	江蘇候補知県林殷臣	洋銀	20	元
阜寧県知県蘇超才	洋銀	100	元	江蘇候補道莫宴均	洋銀	30	元
江蘇候補知県周相輔	洋銀	100	元	署理南匯県知県王椿蔭	英洋	100	元
元和県知県陽肇先	洋銀	300	元	借補藩庫庁大挑知県梁懷光	英洋	60	元
候補直隸州蘇定祥	洋銀	20	元	江蘇候補知府洪秉均	英洋	40	元

出典：『江蘇省明清以来碑刻資料選集』347-350頁

のは、彭玉麟が湘軍水師を率いていたからであろう⁽⁸⁵⁾。官僚はおおむね官職の序列順に記載されるが、ここでも、寄付額は官職の序列とは無関係である。官僚以外では、楊州湖南会館が銅錢500串とあるが、これは団体での寄付額である⁽⁸⁶⁾。彭玉麟は清官として知られるが⁽⁸⁷⁾、蘇州以外にも同治4(1865)年再建の金陵湖南会館に前後して1万両、同治6(1867)年に南昌湖南会館に2,000両を寄付しており、その資産は決して少なくないと考えられる。その他の湘軍系統の武官の寄付も少ない額ではない⁽⁸⁸⁾。これは太平天国戦争が、急速な富の集積を実現したことを示している。

表9 蘇州「湖南会館修建表忠祠捐款收支清冊碑（A-28）」主要寄付者

寄付者	貨幣種類	金額	単位
太子少保前兵部右侍郎彭玉麟	銀両	4,000	両
兵部侍郎兼都察院右副都御史浙江巡撫部楊昌浚	洋舩	200	元
江南全省提督李朝斌	銀両	650	両
長江水師提督黃翼升	銀両	1,100	両
湖北提督郭松林	銀両	600	両
提督浙江衢嚴總鎮喻俊明	洋舩	100	元
提督江南江北狼山總鎮魯王吉	銀両	200	両
提督江南福山總鎮熊登武	銀両	200	両
提督淮揚總鎮歐陽利見	銀両	200	両
江南蘇松總鎮騰嗣林	銀両	200	両
提督浙江黃岩總鎮李新燕	銀両	200	両
提督江浙太湖協鎮田名魁	銀両	200	両
太湖水師中營頭領李松榮	銀両	170	両
提督太湖水師左營頭領陳維新	銀両	170	両
太湖水師右營頭領歐陽積福	銀両	170	両
借補金陵營都閫府太湖水師新昌營頭領成永祥	銀両	200	両
借補通州營游府楊開大	銀両	200	両
簡放提督羅耀亭	銀両	150	両
欽加運同銜江蘇太倉州鎮洋県正堂劉端凝	銀両	200	両
楊州湖南会館	足錢	500	串文
候補知県方仁萃	銀両	150	両

出典：『江蘇省明清以來碑刻資料選集』394-395頁

2 上海の会館・公所

(1) 上海の会館・公所と碑刻

上海において開港前の同郷・同業団体の総数は30であったとされるが⁽⁸⁹⁾、1843～1911年において新建・改組した会館・公所は124館以上になり、その多くは同業団体であった。上海における公所の成立期をみると、咸豊・同治年間が26館で年平均1.08館、光緒・宣統年間が99館で年平均2.75館であり、特に1901～1911年に55館が成立して年平均5館になる⁽⁹⁰⁾。開港後に会館よりも同業団体が設立した公所が増加しているのは、やや時期は遅れるが蘇州と共通した傾向である。

附表Bにみられるように、事例の大半が1830年代以降の太平天国戦争時期を除く時期に集中している。1830年代の開港直前期に多数の碑刻がみられ、ここからは長期的な道光不況をみてとることはできない。これは19世紀前半において国内流通が維持されていたことや⁽⁹¹⁾、華中と華北を結ぶ沙船貿易が拡大していたことを反映していると考えられる⁽⁹²⁾。ま

た、1860年代以降の増大は、太平天国戦争以降の会館・公所の再編を反映している。

(2) 貨幣の使用状況

附表 B より全期間を通じたデータから大まかな傾向性をみると、件数では銀元建てが大多数を占めて2,920件、これとは別に英洋建てが546件ある。銀元建てに次いで銀両建て694件、銅銭建て628件、折銭建て54件となる。目安にすぎないが、総額は、銀両建て16万3,057両、銀元建て8万2,574元、英洋建て8,926元、銅銭建て約3,259万文、折銭建て1,088両となり、銀両建てが多い。ただし、銀両建てには同治5（1866）年の「潮惠会館衆商捐金碑（B-26）」の巨額の寄付事例7万3,661両が含まれるため、それを除けば銀両建てと銀元建てはほぼ同額となる。

清代を通じた1件あたりの金額をみると、銀元建ての1件あたりの金額はそれほど増大しないが、銀両建ては増大傾向にある。全期間を通じた各碑刻の1件あたりの寄付額の平均の平均を見ると、銀元建ては54元、銀両建ては145両、銅銭建ても約6万9,000文であり、やはり銀両建ての金額が抜きん出て多い。開港後に、1件あたりの寄付の規模が増大していくのは、上海経済の発展を示しているのだろう。

時期的な変化を見ると、銀両（17～18世紀中葉）、銅銭・銀元・銀両（1770年代～1840年代）、銀元・銀両・銅銭（1850年代～1870年代）、銀元・銀両（1880年代～1900年代）ととらえることができる。

上海市内における不動産取引の事例では洋銀の使用がほとんどみられず、19世紀中葉に銅銭が銀塊に取って代わられるとされている⁽⁹³⁾。しかしながら、本論の事例でみてきたように商人層では、開港直前期に銀両の使用が急速に減少し、むしろ洋銀が相当程度流通していた可能性もある。ここで注目されるのは中国から銀が流出したとされる全国的な銀不足の時期（1820～1840年代）にも銀元建てによる寄付事例が多数みられることである。上海は1853年以降、1857年に規元が導入されるまで、カルロス銀貨不足が深刻になっているが⁽⁹⁴⁾、その影響については判断できない。

そこで、洋銀の使用についてより詳しく見ると、洋銀の寄付が目立つのは道光11（1831）年の「浙紹公所捐置義地姓氏碑（B-10）」・道光13（1833）年の「興修泉漳会館碑（B-13）」・道光17（1837）年の「重建上海县城隍神廟戲台碑（B-14）」となる。このうち「浙紹公所捐置義地姓氏碑」は浙紹公所による義塚購入時の寄付者を列挙している。浙紹公所は紹興商人の団体であり、1737年前後に、銭業、炭（石炭）業、豆業を中心とする商人が道光8（1828）年に上海县城北門内に土地を購入して義塚を設立した⁽⁹⁵⁾。寄付の内訳は附表 B に示したように、銀元建ては168件・2,829元、洋銀の両建て表記が1件で600両、銅銭建て12件・203万5千文、折銭建て32件・611両となり、銀元建ての比重が大きい。

「興修泉漳会館碑」では泉漳会館の再建費用の寄付が記されている。泉漳会館は乾隆22年(1757)に竜溪・同安・海澄の三県を中心とする閩南の商人と船戸らによって設置された。附表Bにあるように、不動産収入の700元を除く99件の寄付は全て銀元建てであり963元である⁽⁹⁶⁾。寄付者のうち洋船が7件で176元、その他の船舶が41件で96元を占めているように、沿海貿易関係者が多い。後述するように福建南部は洋銀が広く流通していたから、海上貿易を通じた洋銀の流入が想定される⁽⁹⁷⁾。

「重建上海县城隍神廟戲台碑」は道光16年8月に消失した城隍廟の戲台を翌年再建した際の寄付金が列挙されている⁽⁹⁸⁾。銀元建ては29件、1155.8元(銅錢換算で127万1,380文)で、銅錢建てが11件、332万文となる。1件あたりの金額も銅錢建ての方が大きい。また、銀元建ての寄付は餅豆業者によるものであり、先述のように豆業の商人が有力であった浙紹公所において銀元建ての寄付が多いことから、華北・東北から移入される大豆・大豆粕の取引が関連している可能性がある。

洋銀の使用は上海城内にとどまらなかった。例えば道光11(1831)年嘉定県の「当湖書院經費碑(B-11)」を見ると、知県が制錢(政府鑄造の銅錢)500千文を寄付するなど、銅錢建てが96件、620万9,850文に達し、銀元建ても29件、1,249元あるが、銀兩建ては皆無である。1件あたりの寄付額は銅錢建てが6万4,686文で、銀元建ての43元よりも若干金額が大きい⁽⁹⁹⁾。したがって、上海周辺地域にも、洋銀が広く使用されていたことが分かる。

銅錢についてみると、先述の「浙紹公所捐置義地姓氏碑(B-10)」では銀元建てが大半を占めたが、銅錢寄付者の多くは折錢建てである⁽¹⁰⁰⁾。開港直後の道光23(1843)年の「重修永錫堂助捐姓氏碑(B-16)」では浙商炭業の寄付額が銅錢建てで50千文となっているほか、寄付者の多くは折錢で寄付している⁽¹⁰¹⁾。また、道光28(1848)年の「重建三聖閣捐款碑(B-22)」においては、全体的に銅錢建てが多く、折錢建ても1件みられる⁽¹⁰²⁾。上述の事例で、銀元建てで寄付を行っていた集団である「興泉漳永衆商」・「豆餅業衆行」はここではともに銅錢300千文を寄付しており⁽¹⁰³⁾、他の寄付者が銅錢建てであったのに合わせているのかもしれない。

折錢とは明記されていないが、城隍廟の「上海県為浙紹各店公捐中秋会告示碑(B-8)」では銅錢寄付者34件のうち10件が7,000文、20件が3,500文であり、これらが折錢であることは間違いのない⁽¹⁰⁴⁾。このほか、先述の「当湖書院經費碑(B-11)」では折錢と明記されてはいないが「七十千文」や7,000文・700文などの寄付が散見され⁽¹⁰⁵⁾、「紅衣二班快手重修改造班房碑(B-12)」も2万1,000文や7,000文、2,800文、700文の寄付が少なくない⁽¹⁰⁶⁾、これらも折錢であった可能性が高い。

開港前後の時期に銅錢建て、折錢建てが増大しているのは、銀流出の影響が考えられる。

ただし、同じ「重建三聖閣捐款碑（B-22）」で、興泉衆商船は銀元建てで24元を寄付しており、このほか「広東潮邑衆商」も洋銭44元を寄付したとしているので⁽¹⁰⁷⁾、東南沿海を拠点とする商人が洋銀遣いに変化があったのかどうかは判断しづらい。その後は洋銀の使用が急増して銀元建てが増加する一方で、銀両建ても増加していくが、これは銀流入再開にともなう銀不足の解消が原因だろう。

全体として、銀両建て中心から銅銭建てが増え、開港前後に銀元建て中心へと変化がみられ、集団毎に使用貨幣や慣習に大きな違いがあることは蘇州と共通する。なお、折銭慣行は蘇州と上海のいずれにおいても浙江関係の碑刻で見られるが、その原因については明かではない。

（3）寄付額別の寄付者分布

寄付者の特徴としては商人が多数を占める。先述の「浙紹公所捐置義地姓氏碑（B-10）」洋銀のうち、「浙紹炭業」が950元、「浙紹銭業司友」によるものが568元で金額の半数を占めるが、図4のように寄付者の大半は5元以下になり、中央値は3元である。100元以上の高額寄付者に次ぐ「中間層」ともいべき寄付者が少なく、裾野が広いのは蘇州の事例と共通する。

先述の「興修泉漳会馆碑（B-13）」は、改築費用のうち、会馆の不動産収入から700元が充当されている。これを除く寄付額の分布を示した図5をみると、寄付者の大半は20元以下、中央値は6元となる。圧倒的に2元の寄付者が多く、その大半が船舶ごとの寄付になる一方で、2元を除くと寄付者の分布に偏りはない。

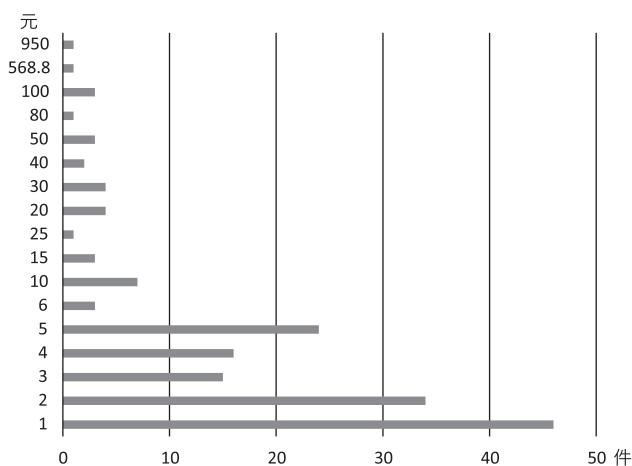


図4 上海「浙紹公所捐置義地姓氏碑（B-10）」洋銭寄付額分布

出典：『上海碑刻資料選輯』211-215頁

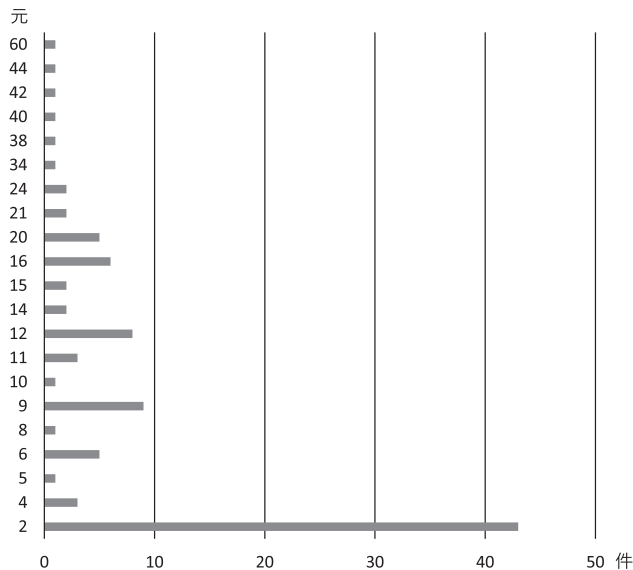


図5 上海「興修泉漳会館碑 (B-13)」寄付額分布

出典：『上海碑刻資料選輯』235-238頁

本論のデータの中で最大となる7万両を超える寄付額が記録されているのが「潮恵会館衆商捐金碑 (B-26)」である。寄付額をみると、図6のように高額寄付者がみられる一方で、低額の寄付者が少ない。この潮恵会館の設立に関しては「創建潮恵会館碑」に太平天国軍に破壊された後、潮州幫がアヘンビジネスで勃興し、砂糖・煙草・外国アヘンのそれぞれの商品から小額の附加金を徴収して、その費用で設立したとある⁽¹⁰⁸⁾。潮州人は開港前から中国沿海のアヘン貿易に関与しており⁽¹⁰⁹⁾、開港初期から上海の外国アヘン貿易を支配し、アヘン貿易の拡大にともなう莫大な利益をあげていた⁽¹¹⁰⁾。外国アヘン・煙草・砂糖の貿易に参加していた商人が商品の価格に附加して集めた金を寄付したために、金額が大きくなっており、商人の資産よりも取引額の大きさを示している。このうち、少なくともアヘンへの附加は、アヘン釐金を徴収とリンクしていた可能性が高い⁽¹¹¹⁾。また、こうした、特権を与えられた取引に参加できない商人たちの寄付が少ないため、裾野が広がらなかったと考えられる⁽¹¹²⁾。表14の数値（平均、分散、標準偏差）が示すように本碑はかなり特殊なケースといえよう。

官僚との比較でみると、開港後ではあるが、例えば先述の「重建三聖閣捐款碑」によれば、蘇松太道宮慕久（山東東平人）は銅錢200千文、松江府海防同知沈炳垣（浙江桐鄉人）は70千文、上海知県藍蔚雯（浙江定海人）は70千文を寄付している⁽¹¹³⁾。さらに光緒15（1889）年の「万寿宮碑 (B-36)」によれば、蘇松太道龔照瑗（安徽合肥人）は年ごとの分割払いで

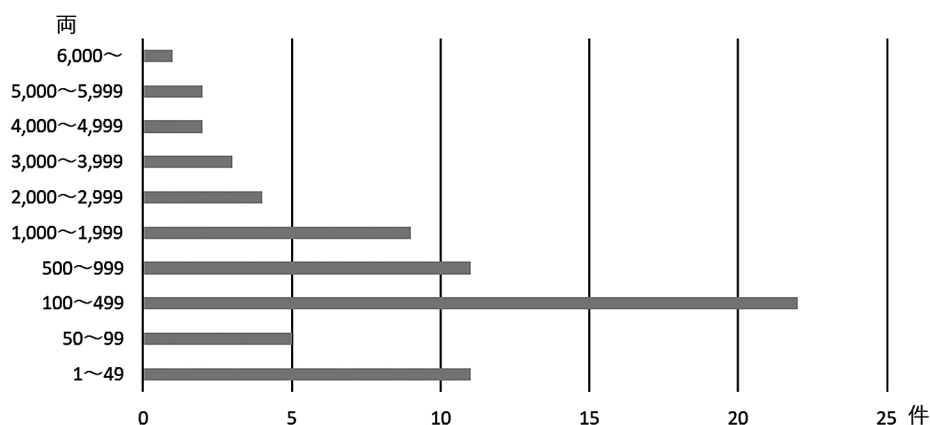


図6 上海「潮恵会館衆商捐金碑 (B-26)」の両建て寄付者分布

出典：『上海碑刻資料選輯』326-330頁

はあるが、2万5,895元3角6分を寄付したとしている。これは土地の購入にあたっての紳民による寄付3,000元や、官僚による寄付544元をはるかに上回る⁽¹¹⁴⁾。これより低いランクの官員としては「浙紹公所捐置義地姓氏碑 (B-10)」で上海県主簿陶が100元を寄付するなどの事例もみられる⁽¹¹⁵⁾。一方で、商人の寄付額も大きく、官僚が目立っていない。

このほか「平江公所購地助款人題名碑 (B-33)」の光緒7 (1881) 年の寄付では「輪船招商局総局同人」の名で1,000両が寄付されている⁽¹¹⁶⁾。また、光緒9年の「重建静安寺記碑 (B-34)」ではアヘン釐金を扱う「洋薬総局」が100両寄付している⁽¹¹⁷⁾。太平天国戦争後の督撫の実権強化や洋務事業における「局」の重要性はよく知られているが⁽¹¹⁸⁾、「局」に関してはこれ以外にはめだった寄付はない。この点からみると19世紀中葉以降については、本論で取り上げた碑刻では把握できない部分が拡大しているとみてよい。

以上のように上海の場合は官僚の寄付は目立っていないが、これは上海が県城であり、上海に駐在する官僚のランクが低く、士大夫層が薄いことが影響しているのだろう。

3 北京の会館・公所

(1) 北京の会館・公所と碑刻

先述のように、北京の会館は士大夫向けに建設されてきた。北京の会館は1949年11月の民政局の統計では登記された会館は391館あり、そのうち341館が清代に設立されたとされる。そして清代でも乾隆・嘉慶年間に会館の設立のスピードが加速し光緒年間に500余館になったとされる⁽¹¹⁹⁾。本論で扱う碑刻の建立時期は大半が1760年代以降になるから、その点から見て、会館・公所の設立の傾向とほぼ一致している。なお、北京の会館の大半が

正陽門・崇文門・宣武門外の外城に位置しており⁽¹²⁰⁾、本論でとりあげた碑刻も通県⁽¹²⁰⁾の2通を除けば、全て外城に位置している。また、1949年の調査では、386館の会館のうち、山西が38館、湖北・広東が36館、安徽が29館を占めている。一方で、家屋の不動産では広東・浙江・安徽・山西の間数が多い⁽¹²¹⁾。これらの省の会館のうち、本論で取り上げるのは寄付に関する碑刻史料が残る山西の会館となる。

(2) 貨幣の使用状況

附表Cより全期間のデータをみると件数では銀両建て5,973件、銅銭建てのうち文建てが619件、串建てが336件、銀元建て2件、金額は銀両建て5万3,762両、銅銭建てのうち文建てが約702万文、串建てが1万3,985串、銀元建て80元となり寄付に関しては洋銀はほとんど使用されていないとみてよい。

清代を通じた1件あたりの寄付金額の平均をみると、銀両建てが約60両、銅銭建てが約1万8,000文ないし80串余りとなる。銅銭の串建てが銀両建てを上回っているが、これは道光29(1849)年の「重修財神廟碑記(C-31)」が西莊乾菓行・估衣行が800吊、皮行が700吊というように集団が寄付していることが影響しており⁽¹²²⁾、銅銭の串建てと銀両建てに大きな差はない。寄付額の多寡で銀両や銅銭の支払いが選択された訳ではなく、北京の不動産取引において銅銭使用の取引規模が銀両を上回っていたこととからも裏付けられる⁽¹²³⁾。

時期的な変化をみると、18世紀を通じて銀両が圧倒的であるが、19世紀に入ると銅銭の使用が始まり、銅銭との併用が1870年代まで続く。その後は再び銀両のみの事例が増える。全体的な傾向としては北京の不動産取引の傾向と類似している⁽¹²⁴⁾。

ただし、本論の寄付事例は北京の不動産売買の事例よりも銀両の比率が高く、金額的にも圧倒的であり、上海や蘇州の銀両の比率を上回る。銅銭増加時期においても銀両の役割は低下しない。北京においては後述するような制銭の大量供給があったが、会館・公所に關係する商工業者が寄付の際に用いる貨幣は銀両にやや偏っていた。

洋銀の記載がみられるのは道光18(1838)年の「重修顔料会館碑記(C-27)」のみである。この碑刻では徳慶公と源和泰義記がそれぞれ40元を寄付したとする。これに対して銀両は60件、それぞれが30両を寄付して合計1,800両に達するから⁽¹²⁵⁾、銀元建ては一部にすぎない。顔料会館は明代中期に山西平遥県出身者を中心とする顔料・桐油商人によって組織された会館であるが⁽¹²⁶⁾、かかる背景が使用貨幣に關係しているのかは不明である。

なお、北京で洋銀が使用されなかったわけではない。例えば同治年間に京官であった浙江会稽人の李慈銘の場合、収入としては贈答や浙江書局の給与で洋銀が使用され、支出としては日用、衣料、交通、使用人の給与など用途は幅広く、同治6(1867)年～同治9年までの判明している支出の大半が洋銀で支払われていた⁽¹²⁷⁾。1860年代という時期と李慈銘

が浙江人ということも考慮する必要があるが⁽¹²⁸⁾、一定程度の規模の取引においても本論で取り上げた会館・公所では全く捕捉できない洋銀の流れがあった。

(3) 寄付額別の寄付者分布

1件あたりの寄付額が顕著に多く385両に達するのは宣武門外椿樹上二条にあった孟県会館⁽¹²⁹⁾の嘉慶2(1797)年「新置孟県氈氊行六字号公局碑記(C-12)」になる。この碑刻の記載によれば、義興号は536両5銭、永興号は529両3銭を提供している。これは氈氊(チベット産の羊毛を使用した毛織物)を扱う6人の商人が協議し、乾隆54(1789)年に氈氊1枚を販売するごとに1銭をとりわけることにし、足かけ9年にわたって集めたものだという⁽¹³⁰⁾。したがって先述の蘇州の銭江会館や上海の潮惠会館の事例と同様、商品に附加された金額を寄付したとみなしてよく、商人の資産を反映しているわけではない。この碑刻を除くと、特定の商人のみが高額を寄付するという事例はほとんどない。

比較的高額寄付者が多く記録されているのは顔料会館にある嘉慶24(1820)年の「重修仙翁廟碑記(C-23)」である。先述したように山西商人の団体であるから、寄付額が多いのは理解できる。寄付額は図7のような分布となる。ただし、最大の寄付額である300両は湖北の漢口で寄付を募って集めた金額の総計であり、これと江西呉城で募った130両を除くと、個別の商店による100両以上の寄付は10件となる⁽¹³¹⁾。なお、120両の寄付をしている西裕成は最初の山西票号で、規模も最大となった日昇昌の前身となる平遥の顔料店である⁽¹³²⁾。ここでもやはり100両以下の募金が減少し、12両以下の件数が多くなり、中間層が薄いという、他地域と同様の傾向がみられるものの、10両以下が減少していることから、商人層の寄付のため、極端に裾野が広がらないという特徴をもつ。

全体として官僚の寄付が少ないのは、本論で取り上げた商工業者を中心とする同郷・同業団体の設立した会館・公所と士大夫たちの関係が希薄であったことが影響しているだろう。会館の設立単位が県レベルで、官僚の影響力が強い省レベルでないことも影響している可能性もある⁽¹³³⁾。京官は地方官と比較して収入が少なかったとはいえ、官僚同士の応酬(金銭の贈与)や宴会などの社交に莫大な出費を行っており⁽¹³⁴⁾、本論で取り上げた程度の額の寄付は容易であったはずである。士大夫向けの会館などへの寄付額が判明しなければ全貌を示すことはできないが、碑刻の残存状況からみて厳しい状況にある。

以上のように、各都市においては同郷・同業集団はほぼ同じような傾向で貨幣を使用しており、その地域別の違いは大きかった。また、都市の寄付の規模は大きな格差がみられ、官僚が大きな役割を果たし、また寄付額からみて中間層にあたる部分に膨らみがみられないことが分かった。以下では華南の都市とその近郊の寺廟に対する寄付をみていくこととする。

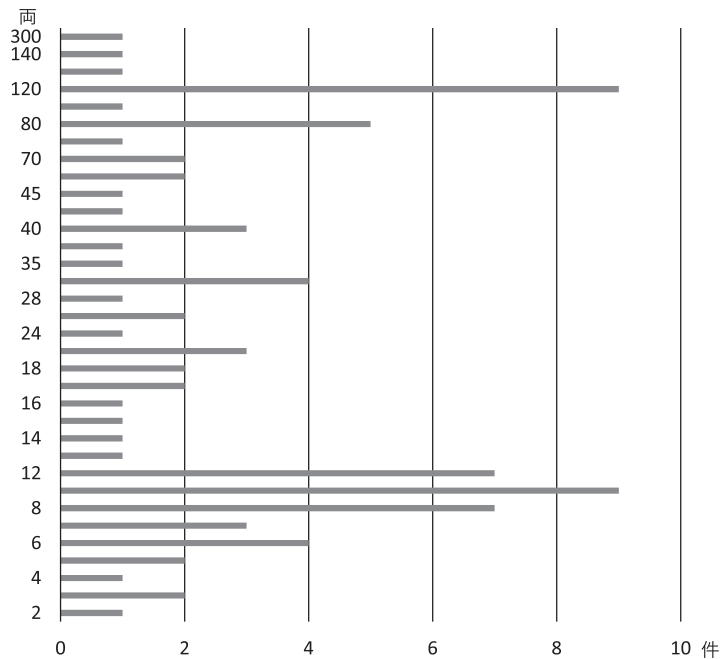


図7 北京「重修仙翁廟碑記 (C-23)」寄付額分布

出典：『明清以来北京工商会館碑刻選編』4-7頁

Ⅲ 華南における寺廟への寄付

1 泉州の寺廟

(1) 泉州の寺廟と碑刻

泉州の寺廟の碑刻は、本論で取り上げる『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』に収録されているものでは、16世紀が54通、17世紀が55通、18世紀前半が37通、18世紀後半が46通、19世紀の開港前が46通、開港後から清末までが86通である。17世紀は大半が崇禎年間までであり、後代の碑刻の方が残存しやすいことを考えると、寺廟の建立・修築は明末が一つのピークとなっており、泉州の安海を拠点とした鄭氏をはじめとする活発な海上貿易活動がそれを支えていたのだろう。その後は時期的には動乱期の康熙年間初期や咸豊年間などの低迷期を除けば、それほど時期的な偏りはない。

一方、本論で取り上げた寄付額のデータが残されている碑刻の建碑時期は、表1にも示したように弘治17年（1504）といった明末を含むが、大半は18世紀後半以降になり、開港後が過半を占める。したがって、寺廟の建立のピークとはずれがある。碑刻は大半が東石・衙口・安海・石獅・金井といった泉州周辺の鎮に所在する廟の碑刻となる。

(2) 貨幣の使用状況

附表 D に示すように全期間を通じた件数は銀元建てが中元建ても含めて5,066件、銀両建て410件、銅銭建て398件であり、銀元建てが大多数を占め、銀両建てと銅銭建てはほぼ同数になる。金額は銀元建てが中元を0.5元と計算すると7万255元になり、このほか銀両建て約2,630両、銅銭建て約344文の順となり銀元建てが圧倒的な割合を占めている。銀元建てが多いのは、16世紀以来の長期にわたる洋銀の使用に加え、19世紀後半以降は海外移民の多い地域でもあり、本論で扱った寄付にもみられるように⁽¹³⁵⁾、移民が大量の洋銀を帰国時に携帯して持ち込んでいたことも背景にあるのだろう⁽¹³⁶⁾。

全期間を通じた1件あたりの金額は、銀元建ては元・大元建てが27元、中元建てが1.5元、銀両建てが12両、銅銭建てが3,750文となり、銀元建ての金額が大きい。

時期的には銀両建て表記が多いのは18世紀半ばまでとなる。18世紀半ば以降は銀元建てが圧倒的に増加していく。それ以前の銀両表記は銀元建てがないために、実際に銀錠で寄付されたかどうかは分からない。18世紀半ばまでの泉州の事例では、後述する広州付近の事例とは異なり3銭6分、7銭2分といった寄付額は皆無であるため、洋銀1枚をそのまま定価で銀両に換算して、銀両建てのみで記載することは少なかったと思われる。廈門においては低質の銀貨が流通したため、道光10(1830)年に廈平(廈門の秤)で7銭2分を1元と定め、秤量的に流通させている⁽¹³⁷⁾。広州の銀両換算の事例も18世紀半ば以降であるから、18世紀半ばで銀両表記がなくなった本論の事例では、そういった銀両換算や秤量による表記の可能性もなくなったのかもしれない⁽¹³⁸⁾。1820年代から1850年代半ばまでの中国からの銀流出時期についても特に銀元建ての寄付が減少することはない。1850年代後半以降の銀流入期以降の寄付額は増大していくが、この背景には台湾貿易の拡大があるだろう⁽¹³⁹⁾。

全期間を通じて銅銭建ての占める割合は低い。16世紀前半に使用例が2件みられるのは、漳州における私鑄銭鑄造の盛行という⁽¹⁴⁰⁾、この時期特有の事情が背景にある可能性がある。清代については岸本の取り上げた龍溪・海澄県の事例と比較すると、ほぼ同様の変化を示しているが、銅銭建ての割合は低い⁽¹⁴¹⁾。なお、折銭慣行についてみると、同治12(1873)年の「重修福慧亭碑記(D-36)」において、銀184元が折銭で192千(文)に換算されるという一例がみられ⁽¹⁴²⁾、福建南部ではまれな事例といえる。

1大元の両建て重量は道光23(1843)年「重修永寧城隍廟碑記(D-26)」の碑刻に記載された主要寄付者の元建ての寄付額と銀両換算額から銀元と銀両の換算率を示すと表10のようになる。換算率が多様であるため一見秤量にみえるが、「1.44928」のように元と両の換算率が同じものがあるので、状態の良い洋銀の個数から機械的に換算しているものも存在すると考えられる⁽¹⁴³⁾。光緒3(1877)年の「重修西資岩題捐碑(D-39)」でも「磁頭澳

表10 泉州「重修永寧城隍廟碑記（D-26）」主要寄付者（寄付額100大元以上）

寄付者	大元	銀兩換算	元／両
金長順商船対乍浦公塢	3,387	2,337.00	1.44929
郷飲賓蔡名標※	800	552.00	1.44928
監生高希顕	650	448.50	1.44928
郷耆龔大鼎※	620	427.49	1.45033
郷飲賓龔希攀※	550	379.16	1.45057
監生陳嘉謨※	505	348.45	1.44928
刑部主事欽加員外郎陳大勳	500	345.00	1.44928
郷飲賓李椿元※	395	272.53	1.44938
施振美号	367	253.20	1.44945
軍功議叙職銜高鍾竹※	350	241.50	1.44928
監生高日升※	327	225.59	1.44953
監生蔡振陞	320	220.79	1.44934
職員高毓俊※	272	188.02	1.44665
監生陳清藻	203	140.00	1.45000
訓導陳盈科	200	138.00	1.44928
陳豐茂号	200	138.00	1.44928
蔡鴻樞	200	138.00	1.44928
監生陳東陽	200	137.38	1.45582
高沛打	180	124.18	1.44951
鄭圓良	167	115.20	1.44965
同知林世亮	165	113.85	1.44928
施明坊	156	107.75	1.44780
吳泉興	125	86.33	1.44793
監生高毓奇	123	84.87	1.44928
郷飲賓黃仁美※	120	82.91	1.44735
蔡名清※	116	80.38	1.44315
監生施雲祥	112	77.34	1.44815
高領興	108	74.57	1.44830
振裕号	105	72.44	1.44948
職員陳濟時	104	72.00	1.44444
監生陳学起	104	72.00	1.44444
監生陳学詩	100	69.00	1.44928
監生陳演卿	100	69.00	1.44928
監生陳貽書	100	69.00	1.44928
高揚泰	100	68.98	1.44970
劉堯蘇	100	68.97	1.44991
監生陳奕軒	100	68.87	1.45201
邱合茂	100	68.78	1.45391

出典：『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、359-366頁

注）※は董事

諸漁船戸収実捐銀一百五十二圓、扯六七（折）一百零一兩八錢四分」として機械的に換算していることが示され⁽¹⁴⁴⁾、先行研究の指摘を確認できる⁽¹⁴⁵⁾。

寄付金の大半は銀元建てであっても、支出からは大量の銅銭による支払いがうかがえる。例えば泉州府城内にある古刹の開元寺に嘉慶20（1815）年に建てられた「重修開元寺前進及香積□廊記（D-17）」では収入は493.5大元、銅銭9,375文、申銀11大7角2格であり、大半が洋銀で納入されていると思われる。一方で工事の際に「木三百五十八工、去錢四萬二千九百六十文、塗大工四百零七、去錢四萬八千八百四十文、小工五百五十、去錢四萬四千文」と一日あたりの労賃として120文ないし80文の支払いが行われたとされており、人件費は銅銭建てであった。その他の什器も16大元と14,565文、木材も183大元と18,441文といった形で洋銀払いと銅銭払いが併用され、支出は270.5大元、109万3,767文、申銀242.21大元とあるため、相当額が銅銭に換算されて支払われたと思われる⁽¹⁴⁶⁾。

もっとも、洋銀に匹敵するだけの銅銭が潤沢に供給され、常に使用できたのかは疑わしい。例えば泉州南門にあった富美宮の道光元（1820）年5月建碑の「重建富美宮題捐碑（D-19）」の場合は収入が862大元、17万4,229文に対して、支出については明細が刻まれているが、洋銀と銅銭を組み合わせで支払っている事例も多く、合計額をみると仏銀862大元、銅銭18万680文で不足分は6,451文としている⁽¹⁴⁷⁾。ここからは、できる限り銅銭に兌換しない工夫がうかがえる。

（3）寄付額別の寄付者分布

まず泉州府城内からみると、先述の「重修開元寺前進及香積□廊記（D-17）」は知府盛安が100大元を寄付しているものの、その他は捐納の可能性があるが、官職保持者の寄付が目立つ⁽¹⁴⁸⁾。

先述の「泉州重建富美宮題捐碑（D-19）」の大元建て寄付者を示した図8にみられるように1元と2元をはじめとする小額の寄付者が多数を占めている。最大の36元の寄付を行った「本境碗郊」は泉州の陶磁器を扱う商人の団体である。海関希老爺・文老爺・王五爺が3人で仏銀27大元、彩銀2大元を寄付しているのが官僚による寄付としても、他に11～19大元の寄付が13件あり、官僚が圧倒的ということはない⁽¹⁴⁹⁾。

鎮レベルでみると、道光5（1825）年の安海の「重修龍山寺碑記（D-22）」では、晉江知県王蘭佩・晉江県左堂（県丞）黄大杰がそれぞれ10大元を寄付したのに対して、東石の周益興行は106大元を寄付している。周益興は東石の天后宮に対する道光6年の「重興天上聖母廟碑記（D-23）」では寄付の提唱者となっており、周益興の名義で740元、「周益興 商船」の名義で30元を寄付している⁽¹⁵⁰⁾。この周益興は台湾との貿易で財をなした商号で開港直前期に最盛期を迎え、道光10（1830）年の保生大帝廟の修築の寄付金1,118元のうち、

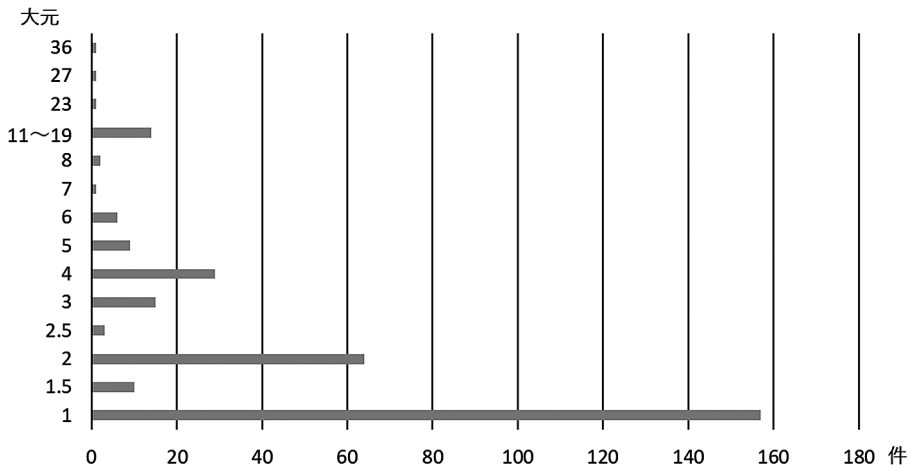


図8 泉州「重建富美宮題捐碑 (D-19)」寄付額分布

出典：『福建宗教碑銘彙編泉州府分冊』上、324-332頁

注) 11～19元は拾〇大元という表記で1桁の数値が不明のため

周家が8～9割を支出している。しかし、宗族集団としては弱体であつたうえ、道光16年に塩商を割り当てられて官僚の徴求にあい、咸豊年間に没落している⁽¹⁵¹⁾。なお、同じ東石の蔡氏は長期にわたり台湾貿易で活躍した⁽¹⁵²⁾。「重興天上聖母廟碑記 (D-23)」では蔡氏やその船舶と思われる寄付があるものの、それほど目立つ額ではないが、「龍山寺重興碑記 (D-41)」では200元を寄付しており、蔡氏の経済活動の持続性がうかがえる⁽¹⁵³⁾。

安海では道光18 (1838) 年の「龍山寺重興碑記 (D-24)」の主要な寄付者を示した表11にあるように、晋江知県朱が204元の寄付を行っているのに対して安海と官橋の捐納による監生と思われる商人がそれぞれ300大元と250大元を寄付している。ここからも寄付額は地位よりも財力を示しており、商人の財力が知県レベルの官僚に匹敵することもあったと考えられる。

郷飲賓・郷耆あるいは職員といった地域のエリートおよび捐納監生らの寄付額の多さは、先述の表10に示した道光23 (1843) 年の「重修永寧城隍廟碑記 (D-26)」において顕著にみられる⁽¹⁵⁴⁾。この碑刻の寄付額の分布を示すと図9のようになるが、高額寄付者に偏りがある。ただし、表10で最多の「金長順商船対乍浦公鳩」は3,387大元は乍浦との貿易のための共同出資金からであろう。いずれにしても50～100元の寄付者の層が薄い状況は明らかである。

武官の例としては、泉州城内の武廟にある乾隆37 (1772) 年の「増修武廟碑記 (D-13)」に福建陸路提督甘国宝が20両のほか、福建南部に駐屯する部隊ごとの共同の寄付金が列挙

表11 泉州「龍山寺重興碑記（D-24）」主要寄付者

寄付者名	金額	単位
晋江県正堂朱	204	元
安海分県方	16	大元
安海新成号・監生張鍾溪	300	大元
官橋順源号・監生郭煥文	250	元
安平侯□塩大使施鉦	150	大元
里人九世科第顔君仕	140	大元
安平晋徳境高然	120	大元
永□刑部主事陳大勳	100	大元
錦垂堂施府高信女偕男信	100	元
泉城溪亭舖監生王心誠	100	大元
安平張応蓐	76	大元
東石監生黃聞達	64	元
泉城登賢舖徐銓	60	元
深滬陳光荣	60	大元
安平王梅	60	大元
錦江紀朝耀	60	元
錦江紀汝溟	60	元

出典：『福建宗教碑銘彙編泉州府分冊』上、352-354頁

されている。そして、その後の補修費用として、副将から総兵は20両、参将から副将は10両、遊撃から参将が4両といった形で武官の昇進に応じた額を定めているが⁸⁽¹⁵⁵⁾、蘇州の表9の事例と比較した場合、目立って大きい額ではなく、平時における武官の収入の水準を示している。

全体としては府レベルということもあり、知府以上の高官が不在のため、官職や資格をもっているも捐納などで入手したケースが多く、商人らの寄付額は多い。また、高額寄付者が一定の数存在するなかで、中間のレベルの寄付者の層が薄いのは他地域と共通する。また、銀両建てが極端に少なく、最小の寄付額が「中元」「五角」などと表記される4リアル銀貨であり、広州周辺のように小額の寄付がみられないのは、銀の細片が使用されていなかったことと関連している可能性が高いが、これが原因で広範な低所得層を捕捉できなくなっていると思われる。

2 広州周辺の道教廟宇

(1) 広州の廟宇と碑刻

『広州府道教廟宇碑刻集釈』に収録された道教廟宇のうち、明代にすでに成立していた

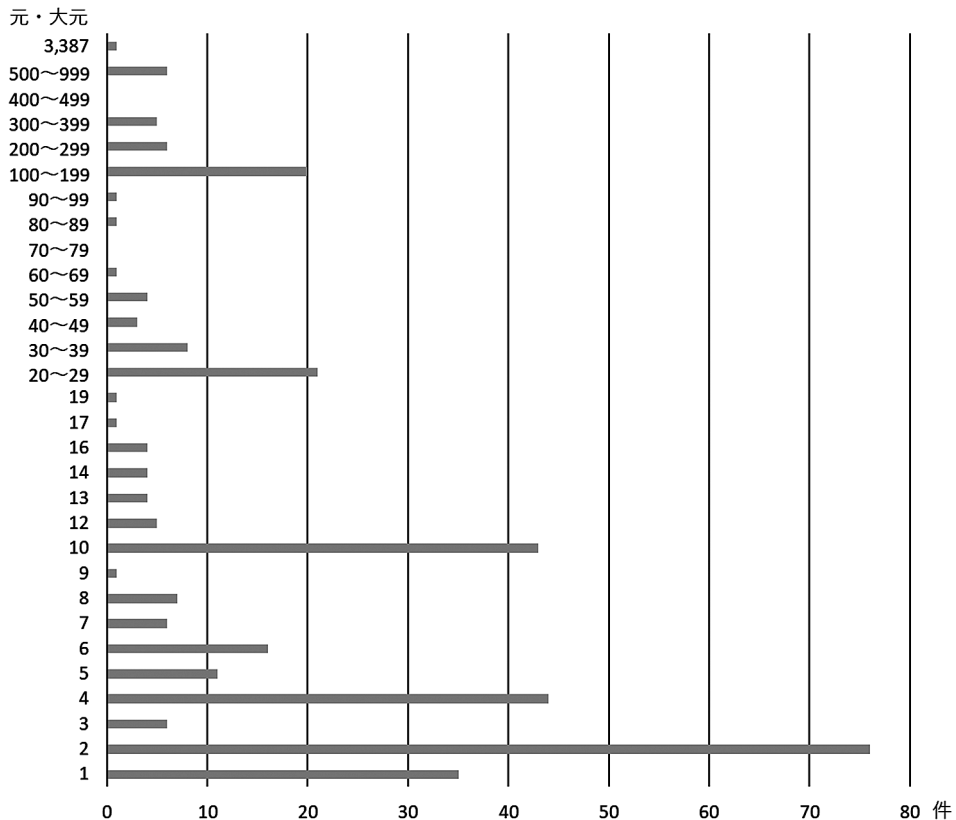


図9 泉州「重修永寧城隍廟碑記 (D-26)」寄付額分布

出典：『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、359-366頁

廟宇は39座でそのうち広州府属は14座である。明代の嘉靖年間初期に広東提学であった魏校が広州城と番禺・南海の両県の農村における寺廟を「淫祠」を破壊した政策が廟宇に影響を与えているが、その後廟宇は復興し、清代に継続して存在、あるいは再建、新建された廟は103座で、うち広州府属は67座である。103座のうち、玄天上帝を祀る北帝廟が28座、媽祖を祀る天后廟が12座、関帝廟が9座、城隍廟7座となる⁽¹⁵⁶⁾。

本論で扱った碑刻の建碑時期は、表1に示したように大半が18世紀後半以降、広州貿易の発展期以降になる。取り上げた29座の廟宇のうち、北帝廟が6座、天后廟が2座、関帝廟1座となり、北帝廟が多い。

(2) 貨幣の使用状況

附表Eに示すように、全期間を通じた件数は銀元建てが中元・大元建てを含めて1万5,254件、銀両建て1万5,208件、銅銭建て25件であり、金額は銀元建てが、中元を0.5元と計算すると4万2,994元、銀両建て1万7,754両、銅銭建て2,500文である。泉州の事例と比

較しても銅錢建てによる寄付は極めて少ない。

清代を通じた1件あたりの寄付金は、銀元建ては元・大元建てが3元、中元建てが1元、銀両建てが5.3両と、本論で取り上げた他の地域と比較して圧倒的に小額である。一部の碑刻に銀両建ての1件あたりの寄付金の額が高い事例がみられるが、全体的にはむしろ銀元建てよりも小額寄付が多い。

時期的にみると、1750年代までは銀両建てのみの碑刻があり、それ以後は銀元建てと銀両建ての寄付の双方がみられるものが大半であるが、18世紀末については銀両建てのみのものがある。また、20世紀以降に銀両建てがほとんどなくなっている。

周知のように、広東においては銀貨の秤量貨幣化が進んでいたから、表記の際に銀両建てになっていても、銀錠を使用しているとは限らない。本論で取り上げた碑刻のデータのうち、銀両建ての寄付で数値が判明しているものは15,205件あるが、そのうちスペイン銀貨の1ペソ（ドル）に相当すると考えられる7銭2分が254件、4リアルに相当する3銭6分は641件、2リアル相当の1銭8分は1,777件、これ以外にも、1ペソ2枚に相当する1.44両が50件など、洋銀で支払われて定価で両建てに換算したと思われる事例が多い。

以上の3種類の金額について、時期別の変化をみてみると、図10-1が示すように1銭8分は初出は1700年だが、1780年以降に頻出し、19世紀に入って急増し、19世紀末まで存在する。3銭6分（図10-2）は18世紀半ばに増加し始め、1800年頃になくなる。7銭2分（図10-3）についてみると、同じように18世紀半ばに増加し、1790年頃にみられなくなる。19世紀初頭になると、広州周辺では刻印などによって毀損した銀貨（chopped dollar）や偽造銀貨の横行の中で、秤量貨幣化が進展したことはよく知られているが⁽¹⁵⁷⁾、この図は1ペソ銀貨で秤量貨幣化がみられ、4リアル銀貨と2リアル銀貨は自動換算が続いたことを示している。したがって銀両建ての多くは洋銀であった可能性が高い。

毀損された銀貨から切り出した小片となった銀の使用も広まっていた。すでに明末からスペイン銀貨が細かく切りさかれて取引が行われていたとされるが⁽¹⁵⁸⁾、清代においても広州付近ではスペイン銀貨の細片の使用が多くみられ⁽¹⁵⁹⁾、本論の寄付においても広州近郊の農村地域における、両建ての零細な寄付が非常に多い。銀両建ての寄付全体で見ると、15,205件中、1両未満が13,572件、5銭未満が12,123件、1銭未満が452件になり、5銭未満が大半を占めている。明末においても、広州南郊の石碁鎮にある官涌古廟の崇禎13（1640）年の「官涌通鄉伍顯関帝禾華等神廟堂碑記（E-2）」では、191件中、1両未満が177件、1銭未満が24件になり、最小は銀3分で5件ある⁽¹⁶⁰⁾。清初の南明隆武2（1645）年の筆村玄帝廟の「鼎建玄帝廟碑記（E-3）」は297件中、1両未満が290件、1銭未満が65件で、そのうち銀2分の寄付者が53名みられるなど、零細な寄付者が多数存在する⁽¹⁶¹⁾。

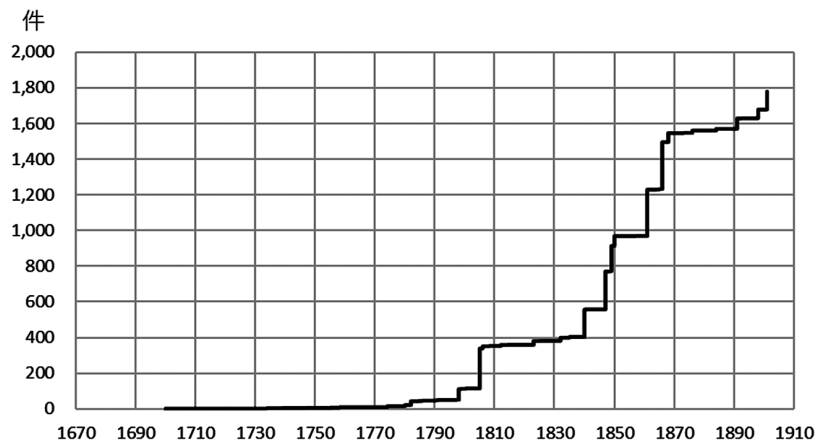


図 10-1 広州における銀両1銭8分の寄付件数

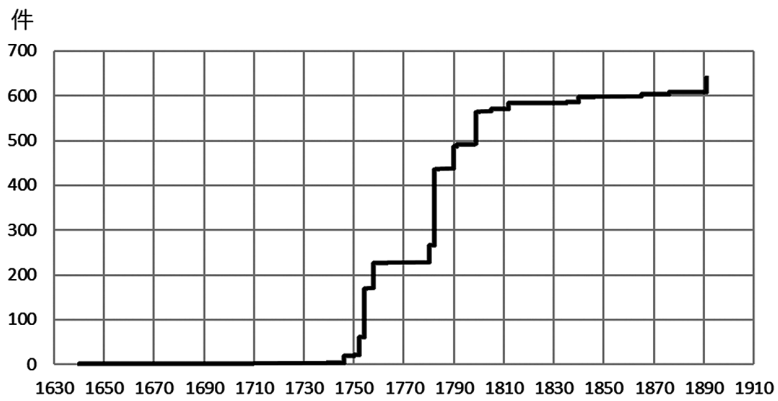


図 10-2 広州における銀両3銭6分の寄付件数

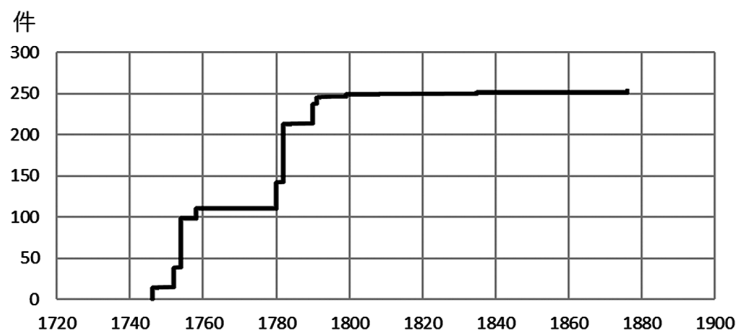


図 10-3 広州における銀両7銭2分の寄付件数

出典：図10-1、10-2、10-3とも『広州府道教廟宇碑刻集釈』

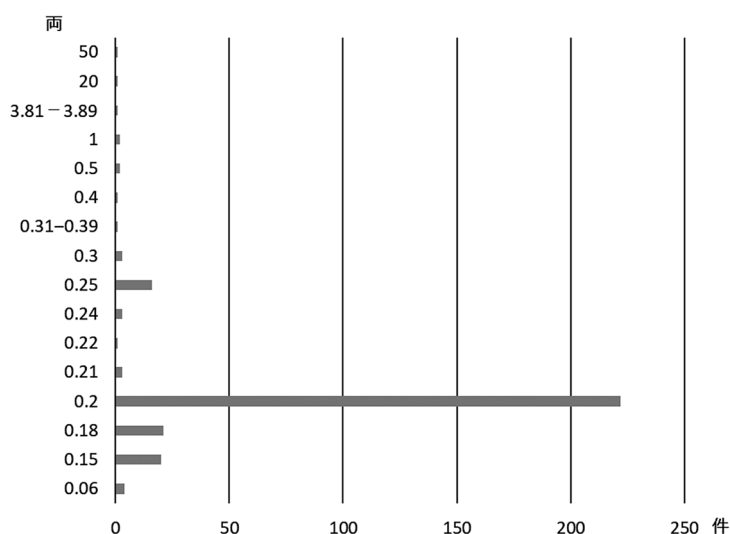


図 11 広州「武帝古廟無第碑 (E-39)」両建て寄付額分布

3.81-3.89は「参両八錢□分」、0.31-0.39は「参錢□分」。

出典：『広州府道教廟宇碑刻集積』：681-687頁

開港直前期においても零細な事例は多い。図 11 は広州南郊の沙湾鎮にある武帝古廟の道光 3 (1823) 年の「武帝古廟無第碑 (E-39)」の両建てのデータである。武帝古廟は明末に建てられ、乾隆 47 (1782) 年に修築されていたが、これはそれに次ぐ修築時の募金と考えられる⁽¹⁶²⁾。図 11 に示すように、1両に満たない寄付が多い。開港後についてみると、大鎮である仏山⁽¹⁶³⁾ 東郊の柵下舗に位置する天后廟にあった光緒 2 (1876) 年の「大清光緒二年重修天后廟碑 (E-57)」は⁽¹⁶⁴⁾、銀元を中心に 3,570 件と本論で最も多くのデータを提供する。この碑刻の両建ての部分では 220 件中 133 件が 1両未満で、最小は 1錢であり⁽¹⁶⁵⁾、零細とまではいえないが、1錢 8 分といった洋銀と思われる寄付以外にも分単位の記載が多くみられる。

こうした分単位の銀の使用は農村部における銀の浸透を示している。18 世紀半ばの江南 (揚州・通州) では「分釐」まで銀を秤量貨幣として使用されていた⁽¹⁶⁶⁾。同じく 18 世紀半ばの徽州においても銅銭がほとんど使用されず、細かい取引にいたるまで碎銀を使用していたという⁽¹⁶⁷⁾。ただし、江南は 18 世紀後半に銅銭が多用されるようになるが、広州付近ではむしろ 18 世紀以降に碎銀の使用が盛んとなった。

(3) 寄付額別の寄付者分布

寄付者の分布は先述の「武帝古廟無第碑 (E-39)」の両建ての図 11 と元建ての寄付者を示す図 12 が典型的であるという。両建ては最多の 50 両は通郷公所、20 両は何氏留耕堂

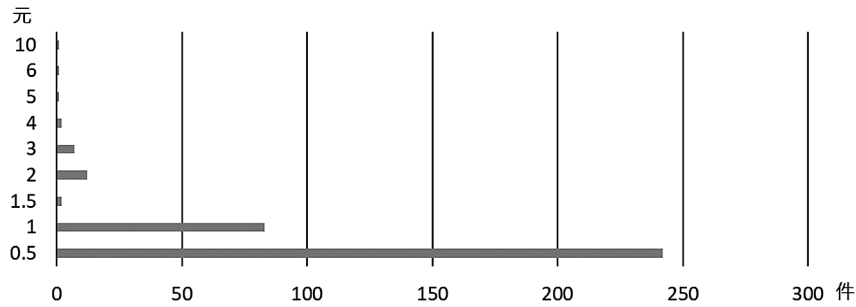


図 12 廣州「武帝古廟無題碑 (E-39)」元建て寄付額分布

出典：『廣州府道教廟宇碑刻集』681-687 頁

であり、「参兩八錢□分」を寄付しているのも「亜中坊衆信女」であって、いずれも団体ないし集団の寄付であり⁽¹⁶⁸⁾、それ以外の個人は全て1両以下になる。元建ても1元以下が大半を占め1中元の0.5元が242件、それに次ぐのが1元の83件になる。

高位の官僚の寄付としては嘉慶17(1812)年の「重修南海五仙觀碑 (E-35)」が好例となる。五仙觀は廣州城内にある主要な道觀であり、清代にも靖南王の耿繼茂(順治12年)、広東提督馮毅(雍正2年)らによる修理を重ねていたが⁽¹⁶⁹⁾、嘉慶17年は広東布政使曾煥の首唱により修理が行われた。図13が示すように、省城内の有力廟宇であるため、通常の碑刻よりも高額寄付者が多いのが特徴である。高額寄付者を金額順に並べた表12に示すように、大口寄付者の多くが両広総督松筠や曾煥、広東巡撫・粵海關監督らの廣州中枢の官僚が最多の200元を納めている。もっとも南韶連道の齋嘉紹も200元を納めているから、寄付額は官職の序列だけが基準ではない。このほか八旗の武官を中心とした寄付者が多い。さらに、粵海關監督の家人や関係者の「粵海關署内門印」が30元、「粵海關総處館」が15元を寄付している。商人で官僚を上回るのは、行商の中でも広利洋行・怡和洋行が420元で、最大の寄付者となっている。怡和行は当時最大の行商であり、当時は伍秉鑑(Howqua)が経営していた。もっとも彼の資産が1834年に2,600万元以上になっていたというのは大幅な誇張であると思われ⁽¹⁷⁰⁾、それはこの寄付額からもうかがえる。広利行も怡和行に次ぐ行商である⁽¹⁷¹⁾。この2行は翌嘉慶18年、行商制度再編のなかで、総商に任じられている⁽¹⁷²⁾。その他の6洋行も90～150元を寄付している。しかし、その他の商店の寄付額は2元以下であり、文武官の寄付額にはるかに及ばず、行商とその他の商人の差が大きいことが分かる⁽¹⁷³⁾。

同じ五仙觀の同治11(1872)年の「重修五仙觀碑記 (E-56)」においても、両広総督、粵海關監督など5名が100両を寄付しているが、こちらは商人などの寄付がなくなり、旗人の占める割合が高くなる。また、八旗兵丁の集団での寄付が行われ、「鑲黃旗滿洲官兵」が

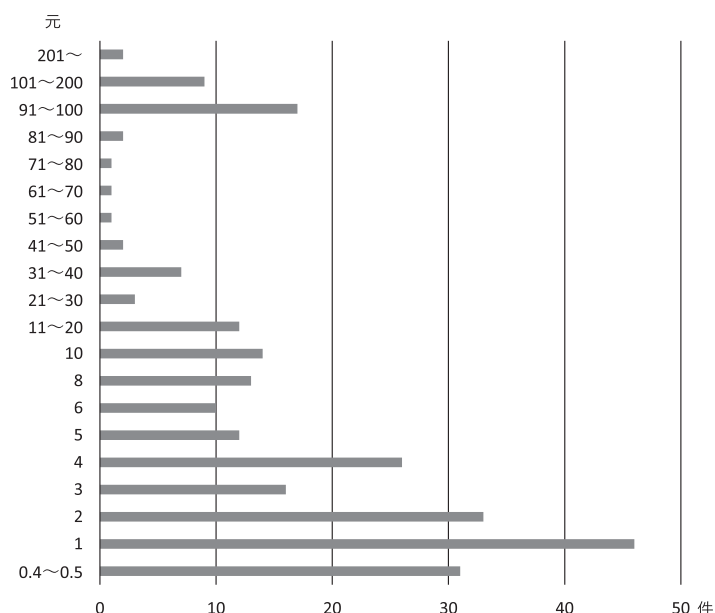


図13 広州「重修南海五仙觀碑 (E-35)」寄付額分布

出典：『広州府道教廟宇碑刻集釈』上、219-230頁

372両2銭を寄付するなどの記録がみられ⁽¹⁷⁴⁾、寄付者の性格が変化している。

このほか、乾隆50（1785）年のE-23「重修仁威古廟碑記（E-23）」では瓊州府知府が70両、南海知県が30両など、官僚の寄付は目立つが、一方で鄒興炎が100両、鄒門金氏が72両、「信紳」の馮成椅が50両など、官僚以外の紳士らによる寄付額は文武官を上回る⁽¹⁷⁵⁾。仁威廟は明末の万暦年間に創設された廟で⁽¹⁷⁶⁾、広州城には近接しているが城外西郊であり、城内の大規模な廟とは異なるパターンを示している。

先述の「大清光緒二年重修天后廟碑（E-57）」であるが、図14で銀元建ての寄付者を見ると、最大の寄付者は55元にすぎないが、1中元は1,615件、1元は1,026件で8割を占め、裾野が広い状況は農村部でも同様である。

寄付者の裾野の広さは、小額ではあるが、女性や僕の小額寄付が記録されていることでも分かる。乾隆56（1791）年の「重建上帝祖廟碑記（E-25）」では「信婦」40人の6分～1両4銭4分の寄付に加えて、「妾」ら14人の6分～3銭6分、「僕」ら10人による1銭～9銭2分の寄付を記録している⁽¹⁷⁷⁾。さらに、娼婦である花女の寄付も1通に1件程度ではあるが少なくとも7通の碑刻にみられ、こちらは最大で1元の寄付もみられる⁽¹⁷⁸⁾。こうした一部女性を含む裾野の広さは、農村部の廟宇のデータが、社会の末端の一部をカバーしている事を示しており、銀の細片の使用が、それを可能にしたともいえる。こうした寄付

表 12 広州「重修南海五仙觀碑（E-35）」主要寄付者（50元以上）

寄付者	寄付額（元）
広利洋行	420
怡和洋行	420
協辦大学士兩広部堂松筠	200
広東巡撫部院韓崧	200
鎮守広東左翼都統邵麟泰	200
粵海関監督德慶	200
広東布政使司曾煥	200
原任兩広塩運使司趙三元	200
広東南韶連道齋嘉紹	200
東生洋行	150
麗泉洋行	130
鎮守広東等處將軍福会	100
鎮守広東右翼都統張秉枢	100
提督広東学院程国仁	100
前任広東按察使司湖北按察使司陳若霖	100
広東按察使司温承志	100
署兩広塩運使楊煒	100
広東惠潮嘉道智凝	100
広東高廉道和舜武	100
護理雷瓊道事務広州府知府陳鎮	100
署南海県知県馬德表	100
順徳県知県周祚熙	100
東莞県知県鍾祥	100
署香山県知県鄭承雯	100
新会県知県沈宝善	100
萬源洋行	100
東裕洋行	100
福隆洋行	100
天寶洋行	90
同泰洋行	90
惠州府知府和琿額	80
番禺県知県姚祖恩	70
理事同知舒綸	60
広東督糧道富綸	50
署番禺県知県姚庭訓	50

出典：『広州府道教廟宇碑刻集刊』上、219-230頁

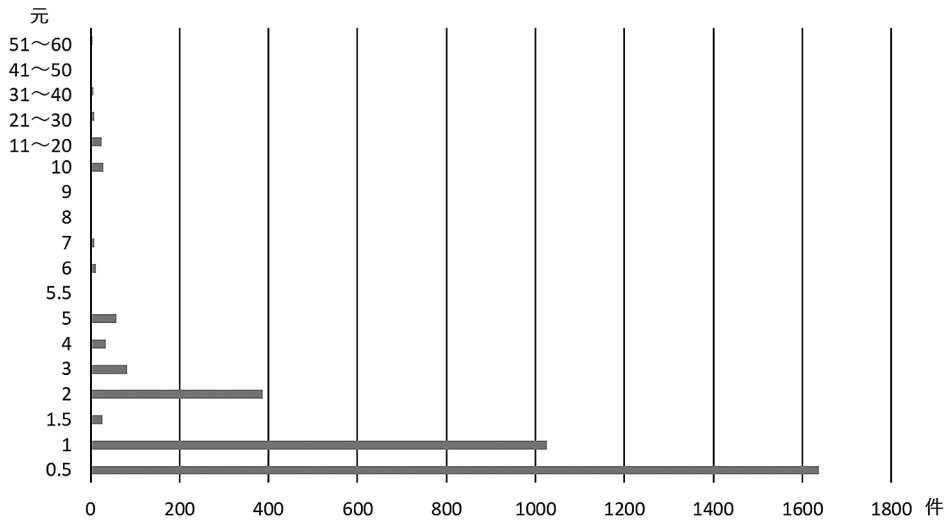


図14 広州「大清光緒二年重修天后廟碑寄付者（E-57）」寄付額分布

出典：『広州府道教廟宇碑刻集刊』117-184頁

者の裾野が広がっているのは、廟の祭祀圏における有力宗族集団による集団的な寄付が多数みられることにもよるだろう。本論で取り上げた碑刻でも、少数の姓の寄付者が大半を占めているケースが多い。宗族集団の凝集力が高い地域と言うことが、データの質に大きな影響を与えたといえる。

IV 貨幣使用と格差社会

1 貨幣の使用状況と開港の衝撃

本論で取り上げてきた寄付事例における貨幣使用を一覧にすると表13のようになる。多様な蘇州・上海と、銀両建てを含む洋銀にはほぼ一元化していく広州・泉州には大きな差があり、中国全体が一方向に動いていたわけではない。銀の流出期である19世紀の開港前の時期についても福建・広東はもとより江南の中心都市である蘇州・上海でも銀錠よりも洋銀が使用されており、寄付に関する限り、銀不足の大きな影響はない。いずれの地域においても金額に応じて銀錠、洋銀、銅銭を使い分けた訳ではない。

地域ごとの違いについては、制銭供給の偏りも一因と考えられるかもしれない。銅銭鑄造には北京の八旗兵丁の生計保護重視という目的もあったため、乾隆元年～40年に大量鑄造された銅銭の約半分にあたる46%は北京で鑄造され、銅産地である雲南で16%、四川で8%、貴州で5%が鑄造されたが、本論で扱う江蘇は3%、福建・広東は1%に過ぎず、各省

表 13 寄付事例にみる貨幣の使用状況

	蘇州	上海	北京	泉州	広州
16世紀				銀両・銅銭	
17世紀				銀両・銅銭	銀両
18世紀前半				洋銀	銀両
18世紀後半	銀両・折銭	銀両	銀両	洋銀	洋銀・銀両
19世紀開港前	洋銀・銀両・銅銭	銅銭・洋銀・折銭	銅銭・銅銭	洋銀・銅銭	洋銀・銀両
開港後～1870年代	洋銀・銅銭	洋銀・銀両・銅銭	銀両・銅銭	洋銀	洋銀・銀両
1880年代～20世紀初頭	洋銀・銅銭	洋銀・銀両	銀両	洋銀	洋銀・銀両

出典：附表 A～E

の推定人口1人あたりの制銭鑄造額は雲南5,630文、北京を含む直隸が2,419文に対して、福建138文、江蘇112文、広東67文にすぎなかった⁽¹⁷⁹⁾。こうした格差が広州・泉州の銅銭使用状況に影響していただろうが、銅銭供給ではさほど差がない泉州と蘇州・上海の使用状況が大きく異なる背景には、銀供給だけではなく、慣習と取引関係があっただろう。

以上の状況を踏まえて、開港前について本論で扱った地域の開港前の貨幣使用状況を分類すると以下の3タイプになるだろう。

①蘇州・上海：経済の中心であり、貨幣需要が大きい地域。上層市場において、洋銀・銀錠・銅銭が併用されている。銅銭も洋銀も大量供給されないなかで、それぞれの集団の選択・取引関係によって使用貨幣、折銭などの慣習は決まる。基本的に碎銀の習慣がなくなっているため、少なくとも下層市場は主に銅銭で取引が行われる。

②広州・泉州：銀が潤沢に供給され、また外国貿易による銀需要が大きい地域。農村部にまで洋銀が浸透し、17世紀中葉までの江南と同様に、地域通貨になる。少なくとも広州付近では碎銀が広範に使用され、下層市場にまで銀が浸透する一方で、銅銭の供給は不十分である。

③北京：制銭が潤沢に供給されるうえ、政府の供給および官僚の活動によって洋銀を含む銀が大量に流通する。

開港前の状況についてみれば、広東・福建など東南沿海を中心として洋銀が循環していたとみてよい。アヘン貿易を含む対外貿易が広州とその周辺に集中していたことを考慮すれば、広州周辺で多くの洋銀が環流し、その一部は碎銀として農村部の下層市場にまで浸透し、銅銭と同様の機能を果たしていた。経済の中心地である江南においても一定程度の洋銀あるいは銀錠が環流していた可能性が高い。東南沿海、江南を中心として銀が環流している状況でアヘン貿易などが原因で銀が沿海部から流出した場合、「周縁」部から次第に銀が吸い上げられ、周縁部から徐々に干上がっていったであろう。しかし、少なくとも19

世紀半ば以前は、外来の銀錠は、当地の銀爐で改鑄される、あるいは少なくとも当地の銀匠（shroff）の鑑定を受けなければ当地では流通しない状況にあった⁽¹⁸⁰⁾。したがって、銀の移動は段階的になる。分節化された市場構造のなかで、大部分の取引が零細であったこともあり、銀不足の地域的拡大のスピードもゆるやかであり、狭い範囲の取引であれば、商店相互の帳簿の操作⁽¹⁸¹⁾や銭荘や商店による錢票の発行などの方法で、地域的合意に基づき、地域的流動性を確保できただろう⁽¹⁸²⁾。

しかし、開港後になると、貿易の停滞と貿易赤字の拡大にともない、東南沿海における銀の供給が急激に減少した。一方で、欧米船の開港場取引が拡大すると、取引規模は拡大し、急速に洋銀や銀錠が移動するようになる。新たに開かれた上海などに生糸や茶の買い付けのための銀は持ち込まれただろうが、全体的には輸出不振であり、1850年代には茶貿易が次第に広州から上海・福州に移行したから⁽¹⁸³⁾、アヘン貿易の拡大の中で、広東周辺における銀の流出が深刻化した。上層市場と下層市場の媒介のみならず、地域市場の媒介も洋銀に依存していた華南、とりわけ末端レベルまで依存していた広州近郊へのダメージは大きかったと考えられる。天地会の乱や土客械闘など、1850年代の珠江デルタの混乱は、これが背景にあった可能性は高い⁽¹⁸⁴⁾。一方、江南の場合は、末端までの銀利用は消滅して久しく、都市部において銀を多量に使用する一部の集団はともかく、大多数の集団は多様な方法で対応したであろうし、末端までの影響はそこまで大きくなかったと考えられる。銅銭が大量供給されるうえ、財政的な中心でもある北京の場合は、ほとんど影響はなかったであろう。19世紀半ばの銀流出にともなう社会混乱については、林満紅が全国的な動向を述べているが⁽¹⁸⁵⁾、各地における貨幣の流通を踏まえてより詳細な分析が必要となろう。

2 寄付者の分布

本論でみてきたように、都市、鎮、農村を問わず小額寄付者の裾野が広がる一方で、中間層ともいべき寄付者層は薄い。一方で、都市を中心として高額寄付者がみられる。大口の寄付者には商人も含まれるが、商人の高額寄付は商品価格への上乗せによるものが多く、高額寄付は官僚や地域エリートといった士大夫らが目立つ。

より計量的にみるために、寄付額の分布のジニ係数と寄付額の上位5%の寄付額が全体の寄付額に占める割合を、これまで取り上げてきた碑刻を中心に、集団による寄付などを除外して整理したのが表14である。比較的高い数値が出ている碑刻をA群とすると、広州の「重修南海五仙觀碑（E-35）」⁽¹⁸⁶⁾（図11参照）や泉州の「重修永寧城隍廟碑記（D-26）」⁽¹⁸⁷⁾（図8参照）はジニ係数、上位5%とも極めて高い数値となる。それに次ぐのが蘇州の「全晋会館衆商捐鰲碑（A-6）」⁽¹⁸⁸⁾（図1参照）と上海の「浙紹公所捐置義地姓氏碑（B-10）」⁽¹⁸⁹⁾

表 14 寄付額からみる格差

群	碑 文	建碑時期	ジニ 係数	対象 件数	上位5% 件数	対象 寄付額	上位5% 寄付額	上位5% 割合	平均	分散	標準偏差
A	重修南海五仙觀碑 (E-35)	嘉慶17 (1812) 年	0.898	257	13	5,930 元	2,720 元	45.9%	23.07 元	2967.64	54.48
	重修永寧城隍廟碑記 (D-26)	道光23 (1843) 年	0.814	330	17	11,535 元	6,659 元	57.7%	33.53 元	8971.25	94.60
	全晋会馆衆商捐蓋碑 (A-6)	乾隆42 (1777) 年	0.768	58	3	2,171.4 両	902.2 両	41.5%	36.80 両	5656.79	75.21
	浙紹公所所捐置義地姓氏碑 (B-10)	道光11 (1831) 年	0.614	156	8	834 元	375 元	45.0%	5.42 元	155.42	12.47
	重修三山会馆勸助姓名碑 (A-12)	道光10 (1830) 年	0.609	119	6	2,599 元	950 元	36.6%	21.84 元	1340.92	36.62
	重修江西会馆樂輪芳名碑 (A-9)	嘉慶元 (1796) 年	0.585	102	5	1,370.95 両	500 両	36.5%	13.71 両	541.63	23.27
B	潮惠会馆衆商捐金碑 (B-26)	同治5 (1866) 年	0.665	70	4	73,631 両	21,684 両	29.5%	1,051.87 両	2190629.00	1480.08
	重修花商公所捐款収支碑 (A-39)	光緒19 (1893) 年	0.483	119	6	398 元	110 元	27.6%	3.40 元	26.26	5.12
	興修泉漳会馆碑 (B-13)	道光12 (1832) 年	0.521	99	5	963 元	224 元	23.3%	9.73 元	114.94	10.72
	重修仙翁廟碑記 (C-23)	嘉慶24 (1820) 年	0.539	82	4	2,982 両	500 両	16.8%	36.37 両	1526.96	39.08
C	重修龍山寺碑記 (D-22)	道光5 (1825) 年	0.599	111	6	504 元	202 元	40.1%	4.54 元	112.81	10.62
	大清光緒二年重修天后廟碑 (E-57)	光緒2 (1876) 年	0.537	3,349	167	4,977.1 元	1,980 元	39.8%	1.49 元	12.47	3.53
	重建城隍廟東西序碑記 (D-32)	同治7 (1868) 年	0.512	608	30	3,099 元	1,055 元	34.0%	5.10 元	133.52	11.56
D	重修參元古廟碑誌 (E-22)	乾隆50 (1785) 年	0.299	514	26	240.54 両	49.68 両	20.7%	0.47 両	0.21	0.46
	武帝古廟無題碑 (E-39)	道光3 (1823) 年	0.285	350	18	271 元	54 元	19.9%	0.77 元	0.41	0.64
	重修仁威祖廟碑記 (E-54)	同治6 (1867) 年	0.418	1,166	58	4865.5 元	1,048 元	21.5%	4.17 元	20.75	4.56

出典：本文註参照

(図4参照)である。以上の4通は「重修永寧城隍廟碑記」を除けば、いずれも都市部の碑刻で、官僚や地域エリート、一部の大規模商人による寄付が多いうえに、裾野が広がり、幅広い階層を捕捉したことによって格差をとらえ、ジニ係数が高くなっている。前二者については、廟への寄付であることも寄付者の裾野の広がりに影響しているだろう。

これに次ぐ蘇州の「重修三山會館勸助姓名碑 (A-12)」⁽¹⁹⁰⁾ (図3参照)と同じく蘇州の「重修江西會館樂輸芳名碑 (A-9)」⁽¹⁹¹⁾ (図2参照)がある。これらは小額の寄付者が少ないことでジニ係数はやや低いものの、上位5%への偏りは大きい。もっとも、上海の「潮惠會館衆商捐金碑 (B-26)」(図6参照)⁽¹⁹²⁾のように特定の特権を得た商人の寄付を中心とし、寄付者の裾野が広がらないと、ジニ係数は高いが、上位5%はそれほど高い数値にはならず、以下のB群に近い存在となる。

都市部でやや低い数値が出てくるB群としては、蘇州の「重修花商公所捐款收支碑 (A-39)」があるが⁽¹⁹³⁾、これは大半の商人が同額を寄付していることによる。上海の「興修泉漳會館碑 (B-13)」⁽¹⁹⁴⁾ (図5参照)は、寄付件数が少なく、船舶ごとの寄付が多数を占め、比較的同質の寄付者であることが原因だろう。蘇州の公所では同額を寄付するケースも多く、その場合は格差をみてとることはできない。北京の「重修仙翁廟碑記 (C-23)」⁽¹⁹⁵⁾ (図7参照)も、先述のように山西商人の団体で、比較的均質の集団の事例とみることができる。分散の数値もそれを裏付ける。

C群としては、鎮レベルが相当する。泉州の安海にある「重修龍山寺碑記 (D-22)」の上位5%は高い数値となっているが、先述したように貿易商の周益興が106元を寄付しているのが大きい⁽¹⁹⁶⁾。広州の仏山東郊にある「大清光緒二年重修天后廟碑 (E-57)」(図13参照)の元建ての寄付のジニ係数・上位5%が著しく高くないのは鎮レベルの廟宇ゆえに、有力官僚の寄付が少ないことによるのだろう。なお、両建ての寄付も4,977.6両に達するが、1件あたりの寄付額は元建てと大きく違いがないため、両建てを入れても大きな違いはないと思われる⁽¹⁹⁷⁾。泉州の石獅にある「重建城隍廟東西序碑記 (D-32)」⁽¹⁹⁸⁾も、ジニ係数・上位5%とも、ほぼ同様の数値を示す。このようにC群はA群と比較すると格差が比較的少ないものの、B群と比較して多様な階層の寄付がみられ、格差の捕捉ができています。

これと比較してジニ係数が低いD群は農村部の碑刻が中心となる。広州郊外にある「重修參元古廟碑誌 (E-22)」⁽¹⁹⁹⁾と「武帝古廟無題碑 (E-39)」の元建ての寄付者⁽²⁰⁰⁾ (図10参照)はジニ係数、上位5%とも低い数値となっている。これは高額寄付者層が農村に少ないことが原因であろう。また、銀の細片による寄付者が圧倒的多数を占めていることによって、かなりの低所得者層まで捕捉していると考えられ、農村の実態を反映しているとみてよい。農村部で件数の多い同治6(1867)年建碑の「重修仁威祖廟碑記 (E-54)」の元建て

の寄付の場合はやや高い数値となる。この碑には紳士を中心として両建ての寄付70件があり総額は3,017.25両になり、一人あたりの寄付金額が43.1両と大きく、また寄付額も元建てに近い額であるため、これらを繰り入れると、ジニ係数・上位5%は大幅に高くなると考えられる⁽²⁰¹⁾。農村部においても士大夫層を捕捉できるかどうかで大きく数値が左右されることになる。

このように、寄付集団には碑ごとに大きな差があるものの、全体としては大都市・鎮において格差は大きく広がり、農村では農民間の格差は少ないことが分かる。時期的な変化をみれば、格差は開港前においても相当広がっていたことがうかがえる。

むろん、寄付することがない膨大な貧しい人々が存在するために、実際の格差は碑刻から得られた数値を、遙かに上回る可能性が大きい。本論で取り上げた寄付者数と都市の人口を比較すれば、都市部の寄付者数は相対的に少なく、寄付金額も相対的に大きいため、A群で把握できていない部分は大きいから、大都市部における格差はA群が把握している以上に大きかったことが予想される。C群の泉州の事例も、銀貨で寄付することが前提となっており、事実上の寄付の最低額があるために、収入の少ない人々が排除されている。またD群の農村部についても本論で取り上げた広州周辺は中国で最も豊かな地域であったうえに、江南と異なり税負担も軽い地域であったから、地域での低所得者を一定程度捕捉しているが、中国全体での低所得者とはいえない可能性が高い。また、寄付対象が複数になる可能性の高い官僚や商人とは異なり、農民の多くの寄付対象が一ヶ所に限定される可能性が高いことにも注意する必要がある。

以上の点を考慮しつつ、寄付と収入に一定程度の関係があるとみなして、本論で取り上げてきた寄付額の分布の図をつなげるような形で中国全体の収入分布のモデルを示し、それとA～D群を重ねると、図15のようになるだろう。碑刻によって10～100両の間で金額は様々であるが、全体的に中間層にあたる部分の膨らみがみられない。したがって、全体としては収入の格差が大きい、中間層が薄く、裾野が非常に広がった形になると思われる。中国では宋代以降、中国では鎮やそれ以下のレベルの町が増大し、中心地の裾野が広がっていたことはすでに指摘されているが⁽²⁰²⁾、そうした裾野の広がりや収入の分布は一定程度リンクしていたと考えてよい。また、先述したように土地所有のありかたも、零細化が進み、傾向を示しているから、中国全体が同じような状況になっていたといえるだろう。

寄付者の格差の拡大原因は、商人というよりも、官僚をはじめとする上層の士大夫の存在である。先述のように目立った寄付を官僚が行うことで偏りができる可能性はある。

一方で、官僚は多様な集団に対する多方面での寄付を強いられていた。官僚の寄付額が商

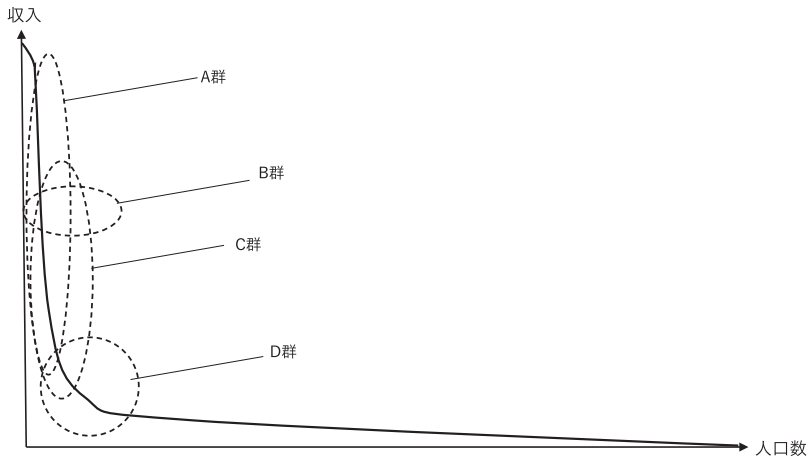


図15 収入の分布と寄付者の範囲

人などと比較して過度に多額になるということもいえないだろう。本論の寄付額も官僚の寄付額が大多数の人々の百倍から数百倍になる事例は珍しくないが、19世紀後半の官僚の収入も知県レベルならば非正規収入だけで3万両と推計され⁽²⁰³⁾、中国の平均の収入の数倍ないしそれ以上であるから、異常な数値ではない。したがって、必ずしも官僚・士大夫だけの寄付額が多く見えてしまうバイアスが強くかかるわけではない。

張仲礼は1880年代の士大夫の人口を150万人、家族を含めて750万人、収入は約6億7,523万両と推計し、これは27億8,127万両の国民総生産の28%に達し、中央政府の歳入の8,000万両を上回るとみなした⁽²⁰⁴⁾。信頼に足る統計がない以上、正確な計量分析は不可能であろうが、富の多くが士大夫に集中していたのは間違いない。彼らの収入の相当部分が商業部門からであったから⁽²⁰⁵⁾、士大夫の多くは商業と関係が深い、立場としては官僚・士大夫層とみることができる。もちろん、様々な近代化事業による官僚の収入源が増えていた1880年代と開港前の状況は異なるだろうが、表14が示すように、全体的な傾向は開港を是年で変化していないとみたほうが適切だろう。ただし、表8・9・10・11・12が示したように、官僚たちの収入のあり方も官職の序列そのものではなく、個々の官職の条件によって大きく異なっていた。したがって、張仲礼のように各地の知県の非正規の収入を比較して推計する方法は有効と思われるが⁽²⁰⁶⁾、同じ知県のポストでも張の挙げた事例よりも収入に大きな差が生じていた可能性は高い。

周知のように科挙の激しい競争や相続の際の資産分割があって士大夫達への資本集積は長期間持続するものではない。蘇州の図1や広州の図11、あるいは図15が示すように、一部の商人や官僚による高収入層はみられるが、中間層は薄く、裾野が広がっている。短

期間で財産を集積し、数代を経る間に零細に分割されるというイメージよりも⁽²⁰⁷⁾、急速に上昇し、急速に没落するというイメージの方が近いであろう。清代後期は著しい格差社会であったが、上層にいたとしても安心できない、「不安な格差社会」であった。

お わ り に

本論は、碑刻から得られたデータをもとに、地域的な貨幣使用や集団内の貨幣使用のあり方には大きな違いがあることを改めて確認した。特に広州周辺にみられるように、下層市場まで銀を使用していたかどうか、開港直後における銀の流出による衝撃の地域的な違いをもたらした可能性が高い。

また、寄付額の分布から収入分布を推定すると、中間層が非常に薄く、高所得者ですら一気に没落する危険と隣り合わせである「不安な格差社会」であったことが示された。こうした危険性が高いことは、正規の官僚のポストが非常に少なかったことと関係していると思われる。

かかる状況下で官僚の地位を得た上層の士大夫達が自らの財産を維持し続けようとするれば、子弟の教育によって科挙の合格者を出し続けることと、人間関係の網の目によるセーフティネット構築のため、交際に励み、血縁ネットワークを拡大することが重要になる。士大夫らが都市に居住するのは、都市が経済的利益のほかに、社交に良好な環境を提供したためとされるが⁽²⁰⁸⁾、これも長い目で見れば経済的な安定を図ったともいえる。政府によって財源とみなされてしまう商人たちの不安定性はより深刻であり、彼らも子弟教育や捐納に資産を費やしたが、これらは結果として士大夫の収入となり、彼等が成功すれば商人は士大夫となった。将来が保証されないなかで、上層の官僚・士大夫や商人らの奢侈的な消費活動が活発になったことは十分予想される。結果として莫大な交際費・生活費・住居費・教育費が都市で消費され、多様な寄付活動に私財が投入される。しかしながら、官僚同士の莫大な金額の贈答に典型的にみられるように⁽²⁰⁹⁾、多額の金が一定の階層で循環しており、全体的な底上げにはほど遠い状況であり、先述した蘇州の陶煦の見方は正しかったと思われ、蘇州という格差が顕著な都市であるからこそ生まれた議論ともいえよう。士大夫層でも一定の地位に達しない限り、出費も多く、富の安定的な蓄積は難しいから、安定した中間層が厚みをもって存在する状況にはない。都市の内部を銀が循環し、下層市場では銅銭が使用される貨幣流通のあり方も、こうした収入と富の分配、そして実際に何に金銭が使用されていたのかという点から考えていく必要もあるだろう。また、農村と都市の格差が大きい状況では、農村における土地所有を検討することは、拡大しつつある裾野

部分を把握することにはなるが、それは全体像ではない。

近年の中国経済史研究は、前近代中国における経済の自由な側面を強調してきた。確かに、経済的な営みに対する制約は少なかった。しかし、経済活動で得られた富を保証するような公的な制度もなかった。中央・地方政府の財源不足により、商人たちが非公式な負担を強いられていたことはよく知られている。「純粹」な商人よりも官僚をはじめとする士大夫に富が集中し、究極の格差が生まれていたことは、経済的営為で得られた富の流れた先を如実に示している。中国の政治・社会そして経済を支配し、史料を残したのは格差社会の頂部にいた士大夫たちであったから、こうした現実をふまえたうえで議論すべき事は多い。

開港後の変動を考えると、日本では18世紀以降に定期市が衰退したのに対して、華北では20世紀前半まで定期市が増大していることが指摘されている⁽²¹⁰⁾。開港場への富の蓄積と裾野の拡大という両極端な動きはさらに地域間の格差を拡大したであろう。とはいえ、近代の変化は格差拡大を招いただけでもない。

例えば、19世紀半ばの太平天国戦争の財政難を契機として、釐金の導入による徴税機構への関与が可能になり、捐納の拡大によって地位向上の可能性が広がったことは、商人たちにとってより合理的であったし、格差の縮小に役立った側面もあったかもしれない⁽²¹¹⁾。

開港後には租界において、士大夫・官僚中心の世界とは異なる世界が誕生した。士大夫以外でも富を安定的に蓄積できる空間が中国に初めて誕生した。租界には富が集中し、地域的な格差は拡大したであろうが、富へのアクセスという点では機会がより均等になったであろうし、財産権の保障によって不安も軽減されただろう⁽²¹²⁾。

本論は、取り上げた都市や地域についても網羅的な検討はできていないし、捕捉できていない集団も多い。各地域などについてデータを補填する必要があるし、入力精度を高め、データ処理のありかたもさらに洗練させていく必要がある。また、本論は碑刻のデータを中心に扱ったが、むしろ同時代の記述史料との組み合わせが必要である。また、寄付対象として、今回取り上げなかった都市の寺廟や、善堂などの重要性も無視できない⁽²¹³⁾。これらを含めたデータの充実と本論の仮説検証は今後の課題となる。

本論で述べてきたような中国の格差社会のあり方が、中国固有のものであったのか、それとも他の多くの地域に共通するものであったのかについても、検証が必要である。他地域の格差のあり方と比較することによって、「中国モデル」を相対的に位置づけていくことも、新たな課題としたい。

附表 A 蘇州の同郷・同業団体の碑刻

番号	碑文名	所在	建碑		寄付		出典	件数				
			年号	西暦	年号	西暦		銀元	英洋	銀両	銅銭	折銭
A-1	嶺南会馆広業堂碑記	蘇州山塘橋西嶺南会馆	雍正7年	1729			B			225		
A-2	錢江会馆各欄殿莊捐輸盤費碑	蘇州桃花塢大街錢江会馆			乾隆23 ～41年	1758～ 1776	B			26		
A-3	修建徽郡会馆捐款人姓名及建館公議合同碑	蘇州鎮撫司前16号徽郡会馆	乾隆38年10月	1773			A					65
A-4	山西会馆錢行衆商捐款人姓名碑	蘇州山塘半塘橋全晋会馆	乾隆41年	1776			A					74
A-5	全晋会馆忠墊捐輸碑記	蘇州山塘半塘橋全晋会馆	乾隆42年	1777			B			15		26
A-6	全晋会馆衆商捐盤碑	蘇州山塘半塘橋全晋会馆	乾隆42年	1777			B			61		
A-7	翼宿神祠碑記	蘇州鎮撫司前16号梨園公所	乾隆48年11月	1783			A	1		50	67	243
A-8	公府内班捐助梨園公所添置器物款項數目碑	蘇州鎮撫司前16号梨園公所	乾隆56年9月	1791			A	41				
A-9	重修江西会馆衆輪芳名碑	蘇州留園江西会馆	嘉慶元年	1796			B	3		112	17	
A-10	重建大王宝閣碑記	蘇州閶門外潭子里10号高宝会馆	嘉慶21年3月	1816			A			34		
A-11	燭業創建東越会馆額末記	蘇州閶門外三樂湾東越会馆	道光8年	1828			B	9		35		
A-12	重修三山会馆勸助姓名碑	蘇州万年橋三山会馆	道光10年	1830			B	119				
A-13	徵亭会馆捐銀總數並公座糧稅碑	吳江鼎盛澤鎮	道光12年	1832			B				10	
A-14	重修花商公所捐款收支碑	蘇州虎丘塘街下塘花商公所	道光12年秋	1832			A	65				1
A-15	重修金華会馆碑	蘇州南濠大街金華会馆	道光16年	1836			B					
A-16	漆作業創建性善公所夥友捐助姓名碑	蘇州班竹巷性善公所	道光17年	1837			B	1			512	
A-17	性善公所捐助碑	蘇州碑刻博物館	道光17年	1837			C	82			24	
A-18	小木公所公議常規並捐戶姓名碑	蘇州盤龍巷小木公所	道光24年	1844			B	19			48	
A-19	蘇州盤龍巷長生公会捐款公用碑	蘇州碑刻博物館	道光24年	1844			C				2	
A-20	漆作業捐資重修性善公所碑	蘇州班竹巷性善公所	道光25年	1845			B	7			13	
A-21	老郎神廟修理工程捐款收支碑	蘇州鎮撫司前16号梨園公所	道光29年正月	1849			A	2			2	
A-22	漆作業捐助修理性善公所碑	蘇州班竹巷性善公所	咸豐元年	1851			B	7			153	
A-23	蘇州木商捐資重建大興会馆碑	蘇州委門外大興会馆	同治4年	1865			B	51				
A-24	重修蘇城楓橋驛道碑記	蘇州博物館	同治6年	1867			B				13	
A-25	銀樓業捐資創建安懷公所碑	蘇州紫蘭巷安懷公所	同治7年	1868			B	118				
A-26	銀樓業各舖戶捐助安懷公所題名碑	蘇州紫蘭巷安懷公所	同治9年	1870			B	91				
A-27	重建小木公所同業捐款數目碑記	蘇州盤龍巷9号小木公所	同治9年10月	1870			A	137			17	
A-28	湖南会馆修建表忠祠捐款收支清冊碑	蘇州通和坊20号湖南会馆	同治9年12月	1871			A	28		31	1	
A-29	重建浙南公所碑記	蘇州閶門外南濠大街浙南公所	同治11年	1872			B				44	
A-30	性善公所修葺捐助費	蘇州碑刻博物館	光緒3年	1877			C	162				
A-31	重建雲章公所各莊捐款碑	蘇州塔倪巷雲章公所	光緒6年2月	1880			B	91			106	
A-32	重修老郎廟捐資碑記	蘇州鎮撫司前16号梨園公所	光緒7年6月	1881			A	58			3	
A-33	蘇州新建西広会館記	蘇州侍其巷36号西広会館	光緒8年仲秋	1882			A	52	3		1	
A-34	刺繡業創立錦文公所緣起碑	蘇州閶門内下塘街錦文公所	光緒10年	1884			B	15			62	
A-35	性善公所修葺捐助費	蘇州碑刻博物館	光緒12年	1886			C	29			166	
A-36	重修允金公所記	蘇州隆興橋33号允金公所	光緒15年仲秋	1889			A	58			52	
A-37	明瓦業重建公所捐戶姓名碑	蘇州東海島一弄明瓦公所	光緒29年	1903	光緒16	1890	B	39				
A-38	蘇州刺頭業重修江鎮光公所碑	蘇州碑刻博物館	光緒17年	1891			C	85			52	
A-39	重修花商公所捐款收支碑	蘇州虎丘塘街下塘花商公所	光緒19年6月	1893			A	117				
A-40	錦文公所碑記	蘇州閶門内下塘街142号錦文公所	光緒18年12月	1893			A	52		1	22	
A-41	蘇城燭店助款借款及抽取油資數目碑	蘇州博物館	光緒21年	1895			B	21		12	1	
A-42	麵業公所捐款碑	蘇州碑刻博物館	光緒24年	1898			C	260				
A-43	武安会馆捐款人姓名碑	蘇州天庫前武安会馆	光緒26年正月	1900			A					
A-44	梓義公所議定水木作工價章程並捐戶姓名碑	蘇州洙西巷梓義公所	光緒29年	1903			B	35			546	
A-45	蘇州麵館業議定各店捐輸碑	蘇州碑刻博物館	光緒30年	1904			C	1			87	
A-46	永康糖食公所捐款收支碑	蘇州施相公弄17号永康糖食公所	光緒32年5月	1906			A	32				
A-47	汀州会馆重修捐助与工程徵信錄碑	蘇州碑刻博物館	宣統元年	1909			C	178				
A-48	重修水壩公所碑記	蘇州碑刻博物館	宣統3年8月	1911			C	109			2	
A-49	王業義塚捐助名單碑	蘇州碑刻博物館	n	n			C	102				
A-50	醬坊業建立公所捐款數目費	蘇州顧家巷15号醬業公所	n	n			A			26		
合計								2277	3	603	2022	409
平均値								63	3	48.3846	80.88	81.8

出典：A『江蘇省明清以來碑刻資料選集』、B『明清蘇州工商業碑刻集』、C『明清以來蘇州社会史碑刻集』

寄付する人と使う貨幣

金額									碑文の 欠落	備考（碑刻記載の寄付総額）
銀元（元）		英洋	銀両（両）		銅銭（文）		折銭（両）			
総額	每件		総額	每件	総額	每件	総額	每件		
			707.7	3.15						
			11022.25	423.93						
							315.3	4.850769231	有	七折銭総計71件。
							37.2	0.502702703		
			6126.36	408.42			281	10.80769231	有	
			3967	65.03					有	
2.0	2.00		904.39	18.09	706,672	10,547.3	1239.56	5.101069959		
142.0	3.46									
18.0	6.00		7422.95	66.28	287,500	16,911.8				
			246	7.24						
178.0	19.78		1310	37.43						
2,599.0	21.84								有	
					17,463,798					銅銭建て総額17,463,300文。1件は各県からの寄付の合計であるために平均値から除外。
374.5	5.76						1.4			
			1399.95						有	寄付額は4県の寄付額の総計。
1.0	1.00				183,500	358.4				
135.5	1.65				28,935	1,205.6				銀元建て総額133元、銅銭建て総額28,885文。
28.0	1.47				33,300	693.8				
					15,000	7,500.0				
12.0	1.71				27,400	2,107.7				
775.0	387.50				143,771	71,885.5				
7.0	1.00				81,470	532.5				
548.0	10.75									
					2,513,638	193,356.8				
208.0	1.76									
217.0	2.38									
201.0	1.47				12,500	735.3				銀元建て総額197元、銅銭建て総額19,300文。
1,460.0	52.14		9700	312.90	500,000	500,000.0				
					308,000	7,000.0				
163.0	1.01									銀元建て総額162元。
2,315.9	25.45				476,473	4,495.0				
117.5	2.03				3,190	1,063.3				
8,563.4	164.68	200	100	100.00						
131.0	8.73				334,650	5,397.6				
44.0	1.52				34,000	204.8				碑刻では銅銭建て寄付者総数は170戸。
409.0	7.05				26,000	500.0				
67.0	1.72									
216.5	2.55									
398.0	3.40									
847.0	16.29		19.3	19.30	960,700	43,668.2				
475.0	22.62		1014.57	84.55	2,138	2,138.0				
111.4	0.43									
			590							
30.5	0.87				55,000	100.7				銅銭建て寄付者総数は546名。
3.0	3.00				毎月12030					
295.0	9.22									
10,246.0	57.56									3件332元は利息収入。
265.0	2.43				3,000	1,500.0			有	
1,117.0	10.95									銀元建て総額1,137元。
			542	20.85						公所成立の同治12年3月以降。
32,721.2			44530.47		24,200,635		1874.46			
908.9	23.98		3004.831333	120.55	1,052,202	39,631.9	374.892	5.31555855		

附表 B 上海の同郷・同業団体の碑刻

番号	碑文名	所在	建碑		寄付期間		件数				
			年号	西曆	年号	西曆	銀元		銀兩	銅錢	折錢
							銀元	英洋			
B-1	重修万安橋亭子記碑	青浦県金澤鎮	康熙16年3月	1677							
B-2	重修邑廟記碑	南市区城隍廟	康熙36年	1697					194	152	
B-3	善信樂輸鼓亭工食碑	南市区城隍廟	雍正10年7月	1732					22		
B-4	宝山区為張永昌等樂輸義渡告示碑	高橋鎮草高路草庵	乾隆24年2月	1759					26		
B-5	重建百發橋新葺惜字庵樂捐飯僧田合記碑	青浦県金澤鎮	乾隆26年6月	1761					73		
B-6	湖心亭議列規条碑	南市区城隍廟旧址湖心亭内	乾隆49年8月	1784					18	5	
B-7	重建小九華記碑	南市区	嘉慶3年孟秋	1798						13	
B-8	上海縣為浙紹各店公捐中秋会告示碑	南市区城隍廟	嘉慶12年11月22日	1807					3	34	
B-9	石作同業先後重修公輪子廟樂輸碑	南市区硝革弄魯班殿旧址	道光3年	1823			1				
B-10	浙紹公所捐置義地姓氏碑	南市区斜橋浙紹永錫堂旧址	道光11年正月	1831			168			12	32
B-11	当湖書院經費碑	嘉定	道光11年	1831			29			96	
B-12	紅衣二班快手重修改造班房碑	南市区城隍廟	道光13年9月	1833						48	
B-13	興修泉漳会馆碑	南市区咸瓜街泉漳会馆旧址	道光12年12月	1833			99				
B-14	浙紹永錫堂樂輸碑	南市区斜橋浙紹永錫堂旧址	道光17年仲夏	1837						29	
B-15	重建上海縣城隍神廟戲台碑	南市区城隍廟	道光17年4月	1837			29			11	
B-16	重修永錫堂助捐姓氏碑	南市区斜橋浙紹永錫堂旧址	道光23年仲夏	1843						14	16
B-17	石作同業先後重修公輪子廟樂輸碑	南市区硝革弄魯班殿旧址	同治9年8月	1870	道光23年	1843	4				
B-18	烏泥涇廟重塑黃婆像碑	上海縣黃母祠	道光25年仲春	1845					6	16	
B-19	建造龍亭眾姓捐銀碑	南市区硝革弄魯班殿旧址	道光26年3月	1846			39				
B-20	永錫堂眾姓捐助姓氏碑	南市区斜橋浙紹永錫堂旧址	道光27年中秋	1847						24	
B-21	修理軒轅殿大殿捐錢人姓氏碑	南市区硝革弄軒轅殿旧址	道光26年12月	1847						33	
B-22	重建三聖閣捐款碑	南市区城隍廟	道光28年正月	1848			48		0	51	6
B-23	豫章会馆竣工功碑	南市区董家渡紗遜橋江西会馆旧址	咸豐2年	1852							
B-24	石作同業先後重修公輪子廟樂輸碑	南市区硝革弄魯班殿旧址	同治9年8月	1870	咸豐6年	1856				12	
B-25	重建泉漳会馆捐款碑	南市区咸瓜街泉漳会馆旧址	咸豐7年3月	1857			23		61		
B-26	潮惠会馆眾商捐金碑	中山南路479号	同治5年	1866			70				
B-27	油麻業同業抽釐建造公所碑	南市区老太平街油麻公所旧址	同治7年9月	1868			42				
B-28	石作同業先後重修公輪子廟樂輸碑	南市区硝革弄魯班殿旧址	同治9年8月	1870			26				
B-29	浙紹永錫堂建正室捐款姓氏碑	南市区斜橋浙紹永錫堂旧址	同治13年仲冬	1874				499			
B-30	重建軒轅殿後進房屋捐款人姓氏碑	南市区硝革弄軒轅殿旧址	同治13年5月	1874			355			44	
B-31	油麻業經抽售客盤金匯清捻數碑	南市区老太平街油麻公所旧址	光緒2年12月	1877						19	
B-32	航業公所緣起及盤捐收支碑	南市区蔡陽街航業公所旧址	光緒3年	1877				8	18	8	
B-33	平江公所購地助款人題名碑	上海市新開路1289号	光緒7年	1881			1		13		
B-34	重建靜安寺記碑	上海靜安寺	光緒9年10月	1883			123		61		
B-35	修建振華堂公所助銀号名碑	上海市合肥路振華堂旧址	光緒10年12月	1885			65				
B-36	万寿宮碑	上海縣統志	光緒15年	1889			n				
B-37	重修商船会馆碑	南市区	光緒18年11月仲冬	1893				35	12	7	
B-38	平江公所購地助款人題名碑	上海市新開路1289号	光緒33年	1907	光緒19～21年	1893～95	112		55		
B-39	重修魯班廟收支碑	南市区硝革弄魯班殿旧址	光緒21年7月	1895			56				
B-40	平江公所購地助款人題名碑	上海市新開路1289号	光緒33年	1907	光緒21～22年	1895～96	335		9		
B-41	布業同業重建得月樓綺藻堂助銀行号碑	南市区	光緒22年5月	1896					61		
B-42	水木工業公所緣起碑	南市区硝革弄魯班殿旧址	光緒23年	1897			9				
B-43	平江公所購地助款人題名碑	上海市新開路1289号	光緒33年	1907	光緒23年	1897	1		1		
B-44	平江公所購地助款人題名碑	上海市新開路1289号	光緒33年	1907	光緒25年	1899	15		20		
B-45	平江公所購地助款人題名碑	上海市新開路1289号	光緒33年	1907	光緒26年	1900	2		2		
B-46	平江公所購地助款人題名碑	上海市新開路1289号	光緒33年	1907	光緒29年	1903	1				
B-47	肉業誠仁堂助款入四明会馆碑	南市区四明公所旧址	光緒31年6月	1905							
B-48	水木工業公所緣起碑	南市区硝革弄魯班殿旧址	光緒32年	1906			32				
B-49	重建滬南錢業公所碑		光緒32年8月	1906			34				
B-50	平江公所購地助款人題名碑	上海市新開路1289号	光緒33年	1907	光緒32～33年		2		35		
B-51	竹業同新会助款入四明公所碑	南市区四明公所旧址	光緒34年3月	1908							
B-52	銅鉄機器業永生会存款四明公所及捐款姓名碑	南市区四明公所旧址	光緒34年4月	1908			315				
B-53	四明長生同仁会条規及捐助花名碑	南市区四明公所旧址	宣統元年4月	1909			142				
B-54	重修軒轅殿助捐各戶碑	南市区硝革弄軒轅殿旧址	宣統元年8月	1909			29	2			
B-55	内河小輪業永安会入四明公所碑	南市区四明公所旧址	宣統2年	1910			90	2			
B-56	水木工業公所緣起碑	南市区硝革弄魯班殿旧址	宣統3年	1911					4		
B-57	重修桐油學麻業公所收支碑	南市区老太平街油麻公所旧址	宣統3年	1911			14				
B-58	上海城廂内外商号樂輸碑	南市区硝革弄軒轅殿旧址	n	455							
B-59	南北顯繡新衣鋪修殿捐項花名碑	南市区硝革弄軒轅殿旧址	n	154							
合計							2,920	546	694	628	54
平均							86	109	33	33	18

出典：『上海碑刻資料選輯』

寄付する人と使う貨幣

金額										碑文の 欠落	備考（碑刻記載の寄付総額）
銀元				銀両（両）		銅銭（文）		折銭（両）			
銀元（元）		英洋（元）									
総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件		
				14.30						有	
				290.40	1.50	100,482.00	661.07				
				40.98	1.86						
				62.50	2.40						
				400.40	5.48					有	
				3430.00	190.56	356,100.00	71,220.00				
						2,482,397.00	190,953.62				1件は銀元を銅銭に交換。
				59.10	19.70	161,600.00	4,752.94				
	0.00					220,000.00					
2,829.00	16.84					2,035,000.00	169,583.33	611.00	19.09		このほか洋銀建て600両が1件。
1,249.00	43.07					6,209,850.00	64,685.94				
						55,030.00	1,146.46				
963.00	9.73										このほか不動産収入から700元。
						582,500.00	20,086.21				
1,155.80	39.86					3,320,000.00	301,818.18				
						241,000.00	17,214.29	249.00	15.56		
						144,000.00					銅銭建て総額145,000文。
				51.30	8.55	62,350.00	3,896.88				
162.00	4.15										
						590,000.00	24,583.33				
						93,000.00	2,818.18				
449.00	9.35					3,484,400.00	68,321.57	228.00	38.00	有	
17,457.00											寄付者数は不明。寄付・釐金・房租の総額。
						207,500.00	17,291.67				
204.00	8.87			6965.00	114.18						
	0.00			73631.00							会館創設の同治5年以降。銀両建て総額73,661両。
	0.00					5,746,540.00					
304.00	11.69										
639.00		639.00	1.28								
357.50	1.01					14,000.00	318.18				銀元建て総額はその他を含め376.46元。銅銭建て寄付者は明細なし。
						6,295,346.00	331,334.00				
		985.00		760.00	42.22	16,776.00	2,097.00				銅銭建て総額は17,156文。
100.00	100.00			14000.00	1076.92						
2,574.00	20.93			2500.50	40.99						
	0.00			2310.00							
29,439.36											
		3,136.31	89.61	1060.83	88.40	173,350.00	24,764.29				銀元建て総額3183.57元。
7,650.00	68.30			8787.50	159.77						
632.89	11.30									有	
2,945.20	8.79			1890.00	210.00						
				6275.00	102.87						
2,746.41	305.16										
100.00	100.00			200.00	200.00						
1,190.00	79.33			1525.00	76.25						
90.00	45.00			250.00	125.00						
200.00	200.00										
		1,000.00									寄付者数不明。
	0.00			27813.40							
3,000.00	88.24										
500.00	250.00			6100.00	174.29						
		1,000.00									寄付者数不明。
2,118.50	6.73										
1,876.50	13.21										銀元建て総計1,878元。
328.00	11.31	165.60	82.80								
575.00	6.39	2,000.00	1,000.00								
				1000.00	250.00						
	0.00			3639.39							
332.50	0.73										銀元建て総計336.2元。
406.00	2.64										
82,573.66		8,925.91		163,057		32,591,221.00		1,088.00			
2,752.46	54.17	1,275.13	293.42	6,522.26	144.55	1,481,419.14	69,344.59	362.67	24.22		

附表 C 北京の同郷・同業団体

番号	碑文名	所在	建碑時期		寄付時期		出典	件数			
				西暦				銀元	銀両	銅銭 (文)	銅銭 (吊)
C-1	創建德城会馆題名碑記	北京外城・正陽門外王皮胡同東頭路北	康熙56年12月	1718			A		72		
C-2	創建晋翼会馆碑序	通県教子胡同8号染坊公所	乾隆4年5月	1739			B		99		
C-3	重修臨襄会馆碑 (乾隆)	北京外城・正陽門外東珠子口中間路南	乾隆8年8月	1743			A		362	3	
C-4	重修河東会馆碑記 碑陰	北京外城・広安門大街中間路南	乾隆25年6月	1760			A		174		
C-5	重修河東煙行会馆碑	北京外城・広安門大街中間路南	乾隆26年7月	1761			A		463		
C-6	重修河東煙行会馆碑 碑陰	北京外城・広安門大街中間路南	乾隆26年7月	1761			A		469		
C-7	重修臨汾東館記	北京外城・正陽門外打磨廠120号臨汾鄉祠	乾隆32年7月	1767			B		36		
C-8	河東煙行会馆 建立單棚碑序 碑陰	北京外城・広安門大街中間路南	乾隆35年5月	1770			A		548		
C-9	河東煙行会馆碑 碑陰	北京外城・広安門大街中間路南	乾隆44年6月	1779			B		505		
C-10	重修火德星君廟碑記 碑陰	北京外城・宣武門外北蘆草園 (顔料会馆)	乾隆47年9月	1782			A		73		
C-11	德城会馆土地題名記	北京外城・正陽門外王皮胡同東頭路北	乾隆53年5月	1788			A		85		
C-12	新置孟縣德儀行六字号公局碑記	北京外城・宣武門外椿樹上二条17号孟県会馆	嘉慶2年10月	1797			B		6		
C-13	河東会馆重修碑記 碑陰	北京外城・広安門大街中間路南	嘉慶7年6月	1802			A		410		
C-14	重修臨襄会馆碑 (嘉慶)	北京外城・正陽門外東珠子口中間路南	嘉慶8年11月	1803			A		566	62	3
C-15	當業会馆碑 碑陰	北京外城・正陽門外、西柳樹井	嘉慶8年9月	1803			A		12		
C-16	藥王廟重修寢宮正殿單棚戲台碑記 碑陰	北京外城・崇文門外東曉市、南薬王廟	嘉慶11年8月	1806			A		288		
C-17	洪化寺義塚碑記 碑陰	北京外城・広安門大街中間路南	嘉慶14年11月	1809			A		78		185
C-18	重修仙城会馆碑記	北京外城・正陽門外王皮胡同東頭路北	嘉慶14年7月	1809			A		95		
C-19	新建仙師公輪祠碑記	北京外城・正陽門外、三里河路北 公輪子祠	嘉慶18年5月	1813			A		16		
C-20	襄陵会馆碑記	北京外城・和平門外虎坊橋五道廟二四号襄陵南館	嘉慶18年正月	1813			B			50	
C-21	飲泉会馆 捐輸姓氏	北京外城・宣武門外大街、飲泉会馆	嘉慶19年	1814			A		2		
C-22	重修河東会馆碑記 碑陰	北京外城・広安門大街中間路南	嘉慶21年12月	1817			A			261	3
C-23	重修仙翁廟碑記 碑陰	北京外城・正陽門外北蘆草園 (顔料会馆)	嘉慶24年夏	1820			B		85		
C-24	公建桐油行碑記 碑陰	北京外城・宣武門外北蘆草園 (顔料会馆)	道光9年4月	1829			B		48		
C-25	新建靛行会馆碑記 碑陰	北京外城・正陽門外、西半壁街南	道光15年4月	1835			A				31
C-26	新建布行公所碑記	通県教子坊胡同7号布行公所	道光17年6月	1837			B			16	
C-27	重修顔料会馆碑記 碑陰	北京外城・宣武門外北蘆草園 (顔料会馆)	道光18年2月	1838			B	2	60		
C-28	新建仙師公輪祠碑記 碑陰	北京外城・正陽門外、三里河路北 公輪子祠	道光4年7月	1844			A		1		8
C-29	精忠廟魯班殿碑 碑陰	北京外城・正陽門外・精忠廟街、精忠廟	道光28年8月	1848			A				43
C-30	馬神廟馬祖殿碑	北京外城・崇文門外、臥仏寺西南	道光28年6月	1848			A			1	21
C-31	重修財神廟碑記	北京外城・崇文門外東曉市	道光29年3月	1849			A				8
C-32	重修臨襄会馆碑 (咸豐)	北京外城・正陽門外東珠子口中間路南	咸豐7年9月	1857			A			141	8
C-33	重修德城会馆碑銘	北京外城・正陽門外王皮胡同東頭路北	同治元年1月	1862			A		33		
C-34	馬神廟馬祖殿碑 (同治)	北京外城・崇文門外、臥仏寺西南	同治元年6月	1862			A				26
C-35	重修財神廟碑記 (同治)	北京外城・崇文門外東曉市	光緒3年	1877	同治8年	1869	A		14		
C-36	精忠廟魯班殿 油面行衆会首弟子芳名、碑陰、油面行衆弟子芳名	北京外城・正陽門外・精忠廟街、精忠廟	同治8年8月	1869			A		235		
C-37	重修臨襄会馆碑 (同治)	北京外城・正陽門外東珠子口中間路南	同治12年6月	1873			A		221	25	
C-38	精忠廟孫祖宝殿光緒二年匾額	北京外城・正陽門外・精忠廟街、精忠廟	光緒2年	1876			A				n
C-39	重修仙師公輪祠碑記 碑陰	北京外城・正陽門外、三里河路北 公輪子祠	光緒6年8月	1880			A		23		
C-40	老羊皮会馆碑	北京外城・正陽門外・大保吉巷	光緒11年3月	1885			A		15		
C-41	皮行会馆 光緒十三年匾額	北京外城・正陽門外・大保吉巷	光緒11年3月	1885			A		108		
C-42	臨襄会馆施銀碑	北京外城・正陽門外東珠子口中間路南	光緒14年9月	1888			A		222		
C-43	重修臨襄会馆碑 (光緒)	北京外城・正陽門外東珠子口中間路南	光緒14年10月	1888			A		91		
C-44	重修玉行長春会馆之碑記	北京外城・南新華街路東・小沙上園南半	光緒20年11月	1894			A		278		
C-45	重修成衣行会馆碑	北京外城・正陽門外東珠子口中間路南 (曉市大街)	光緒31年11月	1905			A				
C-46	文昌会馆碑 碑陰	北京外城・南新華街路東・小沙上園南半	光緒34年7月	1908			A			60	
C-47	京師商務總會公廨落成記	北京外城・正陽門外、西珠市口南	宣統元年10月	1909			A		31		
C-48	臨襄会馆捐銀碑殘缺	北京外城・正陽門外東珠子口中間路南	n	n			A		149		
總計								2	5,973	619	336
平均								2.0	165.9	68.8	37.0

出典：A『北京工商ギルド資料集』、B『明清以来北京工商会馆碑刻選編』

寄付する人と使う貨幣

金額								碑文の 欠落	備考（碑刻記載の寄付総額）
銀元		銀両（両）		銅銭（文）		銅銭（吊）			
総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件		
		2,822.06	39.20					有	銀両建て寄付者総数は179人
		523.40	5.29						
		783.00	2.16	1,500	500				
		1,042.84	5.99						寄付者のうち148名は寄付総額のみ判明。
		543.20	1.17						同一碑文であるが、片面の寄付額が総額のみ正確に分かるために分割。
		688.59	1.47						
		907.53	25.21						
		1,250.43	2.28						
		847.05	1.68						
		276.60	3.79					有	寄付者の明細なし。
		462.00	5.44						
		2,312.80	385.47						
		979.46	2.39						銀両建て総計969.9両。
		675.50	1.19	97,700	1,576	60.00	20.00	有	銅銭の内、京銭建てが45件。
		3,296.00	274.67						銀両建て総額は11,018両。
		916.00	3.18					有	
		163.32	2.09			247.80	1.34		銅銭建ては吊文表記混在。総計252吊
		553.00	5.82						
		6,200.00	387.50						
				820,000	16,400				寄付者の明細不明。
		20.00	10.00						金額不明の銀両建て寄付者119名
				1,320,531	5,060	34.66	11.55		
		3,472.00	40.85						
		1,422.00	29.63						
						983.00	31.71		総計998吊。
				1,000,000	62,500				
80	40	1,800.00	30.00						
		200.00	200.00			1,700.00	212.50		
						215.00	5.00		
				10,000	10,000	787.50	37.50		糖餅行。
						3,400.00	425.00		
				1,416,000	10,043	120.00	15.00	有	
		1,540.00	46.67						
						1,099.00	42.27		糖餅行。
		2,407.00	171.93						
		162.80						有	金額不明多数。
		371.00	1.68	781,000	31,240			有	
						n			寄付者は308人
		1,958.92	85.17						
		508.06	33.87						
		56.00	0.52						
		625.00	2.82						
		818.00	8.99						
		4,765.00	17.14						
		682.10				5,337.10			74名による寄付。内訳不明。
				1,575,000	26,250				
		7,670.00	247.42						京足銀建て6,770両、松江銀建て900両。
		42.00	0.28						
80		53,762.66		7,021,731		13,984.06			
80	40	1,453.04	59.51	780,192	18,174	1,271.28	80.19		

附表 D 泉州の寺廟

番号	碑文名	所在	建碑時期		寄付時期		件数					銀兩	銅錢		
			年号	西曆	年号	西曆	銀元								
							元	大元	元・大元	中元	総数				
D-1	重修傳濟庵記	晉江東石	弘治17年	1504								30	2		
D-2	重興傳濟庵碑記	晉江東石	嘉靖14年	1535								11	3		
D-3	水心亭碑記	晉江安海 亭外牆	万曆28年11月	1600								5			
D-4	安海濟雲殿額刻	晉江安海	万曆33年	1605								11			
D-5	重建第一山青帝宮記	晉江泉志	万曆36年	1608								4			
D-6	濟雲殿額刻	晉江安海	崇禎4年	1631								4			
D-7	重修南海廟碑記	晉江池店	乾隆12年4月	1747			15		15	3	18	298	9		
D-8	重修西資岩記	晉江金井	乾隆21年3月	1756			20		20	2	22	4			
D-9	重修壽海施氏宗祠記	晉江衛口	乾隆21年夏	1756				60	60		60				
D-10	碩庵公小宗祠碑記	晉江陳埭	乾隆28年	1763	乾隆27年	1762						n			
D-11	重建貞烈節孝祠記	泉州城西	乾隆31年12月	1767				n							
D-12	重修泉郡文廟碑記	晉江泉志	乾隆34年	1760								n			
D-13	增修武廟碑記	泉州城內	乾隆37年正月	1772				7	7		7	22			
D-14	重修岱山石仏寺碑記	晉江東石	乾隆40年11月	1775				113	113	10	123				
D-15	重修通淮開帝廟碑記	泉州塗門街	乾隆42年	1777				230	230	21	251		10		
D-16	新建璞石山義塚碑記	晉江深滬	乾隆48年	1783					121	121		121			
D-17	重修開元寺前進及香積口廊記	泉州城內	嘉慶20年2月	1815			47		47		47		2		
D-18	重修雲龍禪寺碑記	嘉慶21年	1816				n	26	26	11	37		55		
D-19	重建富美宮題捐碑	泉州南門	道光元年	1820					313	313	31	344		8	
D-20	重修錫福堂碑	晉江羅山	道光4年	1824			1	119	120		120				
D-21	重修壽海施氏大宗祠記	晉江衛口	道光5年7月	1825					70	70		70			
D-22	重修龍山寺碑記	晉江安海	道光5年6月	1825					111	111		111			
D-23	重興天上聖母廟碑記	晉江東石	道光6年10月	1826				77		77		77	1		
D-24	龍山寺重興碑記	晉江安海	道光18年	1838				7	10	17		17			
D-25	重修南天樓題捐碑	晉江東石	道光18年8月	1838				12	5	17	4	21			
D-26	重修永寧城隍廟碑記	晉江永寧	道光23年12月	1844				11	331	342	8	350			
D-27	重修嘉心廟碑記	晉江東石	道光28年10月	1848					121	6	127	57	184		183
D-28	陳氏宗祠碑記	晉江陳埭	咸豐4年8月	1854										9	
D-29	重新泉郡大寺後文莊公祠序	n	咸豐7年12月	1858				4		4		4			
D-30	重修壽海施氏大宗祠記	晉江衛口	同治2年10月	1863				83		83		83			
D-31	檀林移溪並起福林堂記	晉江英林	同治5年11月	1866				15		15		15			
D-32	重建城隍廟東西序碑記	晉江石獅	同治7年7月	1868				587	21	608		608			
D-33	重修南天寺碑記	晉江東石	同治7年11月	1868				111	285	396		396			
D-34	勸捐洪氏大宗祠序	泉州城東	同治7年	1868				74		74		74			
D-35	水陸寺碑記	泉州城內	同治9年12月	1871				37		37		37			
D-36	重修福慧亭碑記	晉江池店	同治12年6月	1873				108	5	113		113			
D-37	熊太守祠重修碑記	晉江龍巖	光緒元年9月	1875				9		9		9			
D-38	重修天后廟碑	晉江東石	光緒2年7月	1876				9	13	22		22	2		
D-39	重修西資岩題捐碑 (呂宋)	晉江金井	光緒3年	1877				133	128	261		261			
D-40	重修西資岩題捐碑 (小呂宋)	晉江金井	光緒3年	1877				3	205	208		208			
D-41	龍山寺重興碑記 (光緒)	晉江安海	光緒5年	1879				39	13	52		52		1	
D-42	重修城隍宮記	晉江福全	光緒5年	1879				168		168		168		101	
D-43	重興後殿題捐碑	晉江石獅	光緒7年	1881				41	27	68	6	74			
D-44	新建高義廟記	晉江金井	光緒8年	1882				82		82		82			
D-45	靈源寺重修碑記	晉江安海	光緒10年春	1884				115		115		115			
D-46	重修汾江宗祠碑記	晉江陳埭	光緒10年11月	1884						0			16		
D-47	重修西資岩徵信碑	晉江金井	光緒13年10月	1887	光緒11年	1885		70		70		70			
D-48	重修西資岩徵信碑	晉江金井	光緒13年10月	1887	光緒13年	1887		49		49	4	53	2		
D-49	重修忠烈公祖宅碑記	晉江東石	光緒15年10月	1889				61		61		61			
D-50	重修七寶堂碑	晉江永和	光緒15年秋	1889				24		24		24			
D-51	重興極樂堂記	晉江東石	光緒17年3月	1891				94	4	98		98			
D-52	重修蔡道憲祖宅題捐碑	晉江東石	光緒18年5月	1892				4	47	51		51		2	
D-53	重修臨水夫人廟碑記	晉江金井	光緒21年9月	1895				93		93	9	102		13	
D-54	霞里古直公一派宗祠重修碑記	晉江青陽	光緒23年12月	1898				7		7		7			
D-55	重修錫福堂碑 (光緒二十四年)	晉江羅山	光緒24年10月	1898				103	10	113		113			
D-56	南天寺題捐碑	晉江東石	宣統2年	1910				116		116		116			
D-57	重興圓通庵題捐碑	晉江石獅	宣統3年10月	1911				67	3	70		70			
合計							2,617	2,283	4,900	166	5,066	410	398		
平均							70.73	90.48	109.77	11.00	110.13	31.54	30.62		

出典：『福建宗教碑銘彙編』泉州府分冊

寄付する人と使う貨幣

金額										銀両 (両)		銅銭 (文)		銅銭 (緡)	碑文の欠落	備考 (碑刻記載の寄付総額)
元		大元		元・大元		中元		総額								
総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件			
										15.2	0.51	n			有	
										36	3.27	3,000	1,000.00		有	銀両建て寄付総数は12件。
										105.7	21.14					寄付者は明細なし。
										40	3.64					寄付額は「百余」などの表記で正確な額が不明で270両以上。
										270	67.50					
										12	3.00				有	
25.00	1.67			25.00	1.67	3	1	26.5	1.47	738.9	2.48	9,000	1,000.00		有	総額の銀両換算額836両。
61.00	3.05			61.00	3.05	6	3	64.0	2.91	2.5	0.63					
		505	8.42	505.00	8.42			505.0	8.42							寄付総額805大元
															有	銀両建て3,000余両、内訳不明。
		982		981.50				981.5								寄付件数、内訳不明。
										560						寄付件数、内訳不明。
		66	9.43	66.00	9.43			66.0	9.43	391.2544	17.78					
		369	3.27	369.00	3.27	43	4.3	390.5	3.17						有	
		946	4.11	946.00	4.11	21	1	956.5	3.81			1,730	173.00			総額の元換算975大元、21中元。登録していない寄付者多数が銅銭建てで寄付。
								830.0	6.86						有	寄付者総数は229件以上。1元以下不明瞭。
		830	6.86	830.00	6.86			830.0	6.86							
483.50	10.29			483.50	10.29			483.5	10.29			9,375	4,687.50			
59.50		56	2.15	115.50	4.44	11	1	121.0	3.27			11,200	203.64		有	銅銭建て寄付総数は60件。
		813	2.60	812.50	2.60	31	1	828.0	2.41			24,766	3,095.75			1元半・2元半は大元1.5元・2.5元とみなす。中元は全て仏銀。大元のうち303件が仏銀、1件が彩銀。大元のうち14件が11～19元のため11元として計算。
1.00	1.00	254	2.13	255.00	2.13			255.0	2.13							寄付額総額は400余元。
		373	5.33	373.00	5.33			373.0	5.33							
		504	4.54	504.00	4.54			504.0	4.54							
909.50	11.81			909.50	11.81			909.5	11.81	1	1.00				有	
798.00	114.00	1,122	112.20	1,920.00	112.94			1,920.0	112.94							
28.00	2.33	126	25.20	154.00	9.06	4	1	156.0	7.43							
165.00	15.00	14,922	45.08	15,087.00	44.11	8	1	15,091.0	43.12							銀元について銀両建て表記併記。銀建て総額は10405.65両
318.70	2.63	116	19.33	434.70	3.42	57	1	463.2	2.52			33,080	180.77			銅銭建て寄付総数は183件。
														1325		
661.00	165.25			661.00	165.25			661.0	165.25							銀元建て寄付総額は1039.195元。
1,432.00	17.25			1,432.00	17.25			1,432.0	17.25							銀元建て寄付総額は1432元
1,385.05	92.34			1,385.05	92.34			1,385.1	92.34							洋銭 (仏銀)
2,529.00	4.31	570	27.14	3,099.00	5.10			3,099.0	5.10							
3,162.00	28.49	1,025	3.60	4,187.00	10.57			4,187.0	10.57							
9,768.00	132.00			9,768.00	132.00			9,768.0	132.00							
586.00	15.84			586.00	15.84			586.0	15.84							銀元総額は588両。銀元について銀両建て併記。庫平額立てて390.91両
153.00	1.42	31	6.20	184.00	1.63			184.0	1.63			68,900				銀元は折銭で192千。
350.00	38.89			350.00	38.89			350.0	38.89							
219.50	24.39	628	48.31	847.50	38.52			847.5	38.52	12	6.00					
493.97	3.71	371	2.90	864.97	3.31			865.0	3.31							銀元について銀両建て併記。
7.74	2.58	1,419	6.92	1,426.74	6.86			1,426.7	6.86							洋銭 (七二銀)、総額の庫平両換算額1023.66両。
6,857.00	175.82	460	35.38	7,317.00	140.71			7,317.0	140.71			80,000	80,000.00			
699.50	4.16			699.50	4.16			699.5	4.16			82,315	815.00		有	
117.00	2.85	176	6.52	293.00	4.31	6	1	296.0	4.00							
4,447.00	54.23			4,447.00	54.23			4,447.0	54.23						有	寄付者総数は95件以上。
977.00	8.50			977.00	8.50			977.0	8.50							
										444.54	27.78					
174.00	2.49			174.00	2.49			174.0	2.49						有	銀元建て総額は174元。
105.00	2.14			105.00	2.14			105.0	1.98	0.69	0.35				有	銀元寄付総数は54件。
1,195.70	19.60			1,195.70	19.60			1,195.7	19.60						有	銀元寄付総数は62件。ほか816L。
186.00	7.75			186.00	7.75			186.0	7.75						有	銀元寄付総数は41件
532.00	5.66	189	47.25	721.00	7.36			721.0	7.36							
95.00	23.75	528	11.23	623.00	12.22			623.0	12.22			14,000	7,000.00			
209.50	2.25			209.50	2.25	9	1	214.0	2.10			6,500	500.00			銀元は一部銀両建て併記。
1,181.60	168.80			1,181.60	168.80			1,181.6	168.80							銀元建て総額は1230.98元。房毎に共同で寄付。
383.10	3.72	10	1.00	393.10	3.48			393.1	3.48							
157.00	1.35			157.00	1.35			157.0	1.35						有	
1,472.00	21.97	480	160.00	1,952.00	27.89			1,952.0	27.89						有	
42,384.86		27,870		70,254.86		199		70,354.4		2,629.78		343,866		1,325		
1,115.39	32.25	1,050.00	23.20	1,494.78	27.01	18.09	1.48	1,496.90	26.87	187.84	11.93	28,655.50	3,750.00	1,325.00		

附表 E 広州の道教廟宇

番号	碑文名	所在（広州市）	建碑		寄付時期	件数						
			年号	西暦		銀元					銀両	銅銭
						元	大元	元・大元	中元	総数		
E-1	鍾村聖堂廟碑記	番禺區鍾村鎮鍾四村十字街口康公廟内	崇禎元年正月	1628							20	
E-2	官涌通郷伍顯関帝禾華等神廟堂碑記	番禺區石碁鎮官涌村武陵街12号官涌古廟内	崇禎13年	1640							191	
E-3	鼎建玄帝廟碑記	蘿崗區東區街筆村玄帝廟内	南明隆武元年	1645							297	
E-4	重修北帝祖廟碑記	荔湾区西洋塔郷仁威廟太歳殿内	順治18年	1661							544	
E-5	重修安期巖碑記	広東碑刻集	康熙5年6月	1666							46	
E-6	官涌通郷伍顯関帝禾華等神廟堂碑記	番禺區石碁鎮官涌村武陵街13号官涌古廟内	康熙39年春	1700							364	
E-7	鼎建仁威祖廟天板宮題名碑文	荔湾区西洋塔郷仁威廟太歳殿内	康熙52年9月	1713							438	
E-8	重建玄帝古廟碑記	越秀区中山一路楊箕村泰興直街60号玉虚宮内	康熙60年秋	1721							340	
E-9	武帝金像碑記	番禺區沙湾武帝古廟内	雍正12年冬	1734							414	
E-10	重建廟宇碑記（塘頭北帝古廟）	蘿崗區塘頭村均安坊北帝古廟内	乾隆元年	1736							150	
E-11	重修三清古廟碑記	白云区江高鎮南崗村三清古廟	乾隆4年	1739							428	
E-12	重建北帝廟碑記（黄埔村）	海珠区柳塘大街黄埔村北帝廟内	乾隆11年冬	1746							913	
E-13	重修仁威祖廟碑記	荔湾区西洋塔郷仁威廟太歳殿内	乾隆13年春	1748							969	
E-14	重建玄帝廟碑（筆村玄帝廟）	蘿崗區東區街筆村玄帝廟内	乾隆15年春	1750							153	
E-15	重修郷約亭題名碑記	番禺區石碁鎮官涌村武陵街12号官涌古廟内	乾隆17年冬	1752							788	
E-16	玉虚宮重修碑記（楊箕村玉虚宮）	越秀区中山一路楊箕村泰興直街61号玉虚宮内	乾隆19年冬	1754							472	
E-17	重修本廟碑記（小洲村玉虚宮）	海珠区新滘鎮小洲村玉虚宮内	乾隆23年春	1758							409	
E-18	重修北帝廟碑記	蘿崗區塘頭村均安坊北帝古廟内	乾隆39年	1774		3	14	17	21	38	195	
E-19	重修三清古廟碑記	白云区江高鎮南崗村三清古廟	乾隆45年	1780							329	
E-20	武帝廟重修碑記	番禺區沙湾武帝古廟内	乾隆47年秋	1782		42	25	67	2	69	812	25
E-21	重修玄帝廟碑記	蘿崗區東區街筆村玄帝廟内	乾隆48年冬	1783			15	15		15	129	
E-22	重修參元古廟碑誌	天河区広園路三元里村北	乾隆50年	1785			119	119	223	342	178	
E-23	重修仁威古廟碑記	荔湾区西洋塔郷仁威廟内	乾隆50年11月	1785							117	
E-24	重修北帝古廟碑（塘口村）	荔湾区魚珠街茅崗社区塘口大街十五巷北帝古廟内	乾隆55年	1790							178	
E-25	重建上帝祖廟碑記	蘿崗區蘿崗鎮元貝村玉虚宮内	乾隆56年秋	1791							178	
E-26	御市街石碑記	番禺區沙湾武帝古廟内	乾隆56年秋	1791							60	
E-27	重修北帝古廟碑記（滄頭村）	黄浦区荔聯街滄聯社区滄頭孟田街北帝古廟内	乾隆60年	1795		4	72	76	13	89	269	
E-28	重修古廟碑記	番禺區新造鎮曾邊行政村白賢堂自然村涌边大街1号北帝神廟内	嘉慶3年仲秋	1798		18		18	34	52	123	
E-29	起建靈蟠廟各信碑	番禺区石樓鎮靈蟠古廟内	嘉慶3年秋	1798		51	52	103	28	131	387	
E-30	重修北帝廟碑記	越秀区中山一路楊箕村泰興直街62号玉虚宮内	嘉慶4年	1799		25	23	48	38	86	319	
E-31	重修兩廟碑記	越秀区中山一路楊箕村泰興直街63号玉虚宮内	嘉慶10年11月	1805			22	22	79	101	211	
E-32	重建華光廟碑記	番禺区小谷園練溪村華光古廟内	嘉慶10年冬	1805		3	164	167	249	416	577	
E-33	重修北帝古廟碑（塘口村）	荔湾区魚珠街茅崗社区塘口大街十五巷北帝古廟内	嘉慶11年	1806		16		16	21	37	84	
E-34	題捐創建本廟東序記	蘿崗區塘頭村均安坊北帝古廟内	嘉慶12年	1807			13	13	20	33	186	
E-35	重修南海五仙觀碑	越秀区惠福西路五仙觀内	嘉慶17年3月	1812		227		227	30	257	1	
E-36	重修南安古廟碑記	荔湾区東漖鎮西朗南安村南安古廟内	嘉慶17年冬	1812			9	9		9	86	
E-37	重建元貝郷上帝爺廟碑記	蘿崗區蘿崗鎮元貝村玉虚宮内	嘉慶18年夏	1813			10	10	24	34	11	
E-38	重修三元古廟碑記	天河区広園路三元里村北	道光2年	1822		1	334	335	277	612	11	
E-39	武帝古廟無題碑	番禺區沙湾武帝古廟内	道光3年秋	1823		2	107	109	242	351	302	
E-40	重修北帝古廟碑記（塘口村）	荔湾区魚珠街茅崗社区塘口大街十五巷北帝古廟内	道光12年	1832			79	79	59	138	141	

寄付する人と使う貨幣

金額														碑文の 欠落	備考 (碑刻記載の寄付総額)
銀元										銀両(両)		銅銭(文)			
元		大元		元・大元		中元		総額							
総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件		
										5.950	0.30				
										45.618	0.24				
										71.050	0.24			有	銀両建て総計327件。
										391.350	0.72				他縁首の寄付各2両。
										139.800	3.04				
										106.291	0.29			有	
										197.790	0.45				
										145.180	0.43			有	判別不能1件。銀両建て 総計345件。
										98.630	0.24			有	
										65.520	0.44				
										219.000	0.51				銀両建てで一部金額不明、 ただし1両未満7件、 1銭未満2件。
										268.295	0.29				
										1,178.900	1.22			有	
										25.700	0.17			有	銀両建て総計155件。
										361.483	0.46				
										238.490	0.51			有	銀両建て総計485件、総 額は248.17両。
										221.630	0.54				
6	2.00	20	1.43	26.00	1.53	21	1	36.50	0.96	40.780	0.21				
										112.930	0.34				
105.5	2.51	82	3.28	187.50	2.80	2	1	188.50	2.73	358.894	0.44	2500	100		
		25	1.67	25.00	1.67			25.00	1.67	17.230	0.13				銀元建て総計37件。
		191	1.60	190.50	1.60	223	1	302.00	0.88	58.220	0.33				
										1,992.120	17.03				銀両建て総計137件。一 部1両未満の金額不明部 分。
										181.580	1.02				
										194.770	1.09				
										105.040	1.75				
12	3.00	121	1.68	133.00	1.75	13	1	139.50	1.57	195.720	0.73			有	銀両建て総計271件。
31.2	1.73			31.20	1.73	34	1	48.20	0.93	23.170	0.19				
52	1.02	111	2.13	162.50	1.58	28	1	176.50	1.35	131.100	0.34				
30	1.20	30	1.30	60.00	1.25	38	1	79.00	0.92	79.420	0.25			有	銀両建て総計321件。
		22	1.00	22.00	1.00	79	1	61.50	0.61	36.470	0.17				
4.5	1.50	387	2.36	391.00	2.34	249	1	515.50	1.24	126.450	0.22				
21	1.31			21.00	1.31	21	1	31.50	0.85	16.810	0.20				
		14	1.08	14.00	1.08	20	1	24.00	0.73	28.070	0.15				
5915.4	26.06			5,915.40	26.06	30	1	5,923.00	23.05	0.400	0.40				銀元建て総計259件。
		31	3.39	30.50	3.39			30.50	3.39	15.890	0.18				
		18	1.80	18.00	1.80	24	1	30.00	0.88	8.210	0.75				大元2件(1元)は重量7 銭と併記。
1.5	1.50	979	2.93	980.00	2.93	277	1	1,118.50	1.83	1,473.000	133.91			有	判別不能183件。
3	1.50	157	1.47	160.00	1.47	242	1	281.00	0.80	135.440	0.45			有	
		227	2.87	227.00	2.87	59	1	256.50	1.86	78.600	0.56				

附表 E (続き)

番号	碑文名	所在 (広州市)	建碑		寄付時期	件数							
			年号	西暦		年号	銀元					銀両	銅銭
							元	大元	元・大元	中元	総数		
E-41	重修三清堂碑記	白雲区江高鎮南崗村三清古廟	道光14年	1834			88	88	111	199	45		
E-42	重修康公廟宇碑記	番禺区詵敦村康公主帥廟内	道光15年秋	1835			38	38	27	65	260		
E-43	靈蟠廟重修碑記	番禺区石樓鎮靈蟠古廟内	道光19年11月27日	1840		3	111	114	71	185	285		
E-44	重建玉虚宮碑記	越秀区中山一路楊箕村泰興直街64号玉虚宮内	道光23年冬	1843		134	1	135	116	251	143		
E-45	重建玉虚宮添建文武殿碑記	蘿岗区蘿崗鎮元貝村玉虚宮内	道光27年秋	1847			22	22	19	41	80		
E-46	重修華帝廟碑記	番禺区小谷園練溪村華光古廟内	道光27年冬	1847		11	101	112	94	206	359		
E-47	北帝廟重修碑	海珠区柳塘大街黃埔村北帝廟内	道光29年10月	1849		12	200	212	139	351	172		
E-48	始祀張王爺碑記	海珠区柳塘大街黃埔村北帝廟内	道光30年	1850		26	5	31	27	58	55		
E-49	重修北帝古廟碑記	蘿岗区塘頭村均安坊北帝古廟内	咸豐6年	1856			20	20	23	43	162		
E-50	復建三元古廟碑誌	天河区広園路三元里村北	咸豐11年	1861			187	187	136	323	226		
E-51	重建南安古廟碑記	荔湾区東漖鎮西朗南安村南安古廟内	咸豐11年4月	1861		1	7	8	13	21	104		
E-52	改建天后文武二廟碑記	番禺区石樓鎮勝洲村天后宮内	同治4年	1865			23	23	21	44	130		
E-53	重修玉虚宮碑記	海珠区柳塘大街黃埔村北帝廟内	同治4年夏	1866			75	75	117	192	266		
E-54	重修仁威祖廟碑記	荔湾区西洋塘鄉仁威廟内	同治6年10月	1867			1,210	1,210		1,210	70		
E-55	重修北帝古廟碑記 (塘口村)	荔湾区魚珠街茅崗社区塘口大街十五巷北帝古廟内	同治7年	1868		1	110	111	88	199	123		
E-56	重修五仙 (親碑記)	越秀区惠福西路五仙觀内	同治11年	1872			96	96	1	97	39		
E-57	大清光緒二年重修天后廟碑	仏山堡欄下舖欄欄 (仏山祖廟碑廊)	光緒2年	1876	光緒4年	1,197	538	1,735	1,615	3,350	220		
E-58	己卯重修武廟碑記	番禺区沙湾武帝古廟内	光緒5年冬	1879		3	166	169	35	204	30		
E-59	重修玄帝殿觀音殿碑記	蘿岗区東区街華村玄帝廟内	光緒9年秋	1883			99	99	130	229	178		
E-60	重修天后文武廟碑記	番禺区石樓鎮勝洲村文武廟内	光緒10年	1884		8	17	25	13	38	20		
E-61	重建玉虚宮碑	海珠区柳塘大街黃埔村北帝廟内	光緒17年冬	1891		763	28	791	682	1,473	134		
E-62	重修仏山塔坡古廟碑記	仏山祖廟碑廊	光緒16年12月	1891		50	47	97	55	152	107		
E-63	塘口北帝廟重修碑記	荔湾区魚珠街茅崗社区塘口大街十五巷北帝古廟内	光緒24年	1898			153	153	111	264	70		
E-64	重修玉虚宮碑記	越秀区中山一路楊箕村泰興直街65号玉虚宮内	光緒27年秋	1901		13	265	278	142	420	103		
E-65	倡建横沙呂帝廟碑記上碑	白雲区石井鎮横沙村呂帝廟内	光緒27年11月	1901			740	740		740			
E-66	重修園郷各古廟碑記	番禺区詵敦村康公主帥廟内	光緒29年冬	1903		84	272	356	106	462			
E-67	重建文帝廟碑記	白雲区太和鎮園夏村園夏路南側文帝廟内	光緒30年冬	1904		153	324	477	318	795			
E-68	倡建横沙呂帝廟碑記下碑	白雲区石井鎮横沙村呂帝廟内	光緒30年冬	1904		135		135		135			
E-69	倡建鍾村墟場砌石碑記	番禺区鍾村鎮鍾四村十字街口康公廟内	光緒34年冬	1908		7	345	352	5	357			
E-70	重修医靈古廟碑記	白雲区嘉禾街鶴辺村鶴南自然村医靈廟内	宣統元年秋	1909		3	86	89	136	225	7		
E-71	重修天后宮碑記	番禺区小谷園練溪村天后宮内	宣統2年	1910		67	27	94	21	115			
合計						3,063	6,459	9,522	5,732	15,254	15,208	25	
平均						102.1	143.5	194.3	130.3	311.3	237.6	25.0	

出典：『広州府道教廟宇碑刻集釈』

寄付する人と使う貨幣

金額														碑文の 欠落	備考 (碑刻記載の寄付総額)
銀元										銀両（両）		銅銭（文）			
元		大元		元・大元		中元		総額							
総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件	総額	每件		
		674	7.66	674.00	7.66	111	1	729.50	3.67	10.800	0.24			有	銀元建て総計313件、銀両建て総計512件。
		56	1.47	56.00	1.47	27	1	69.50	1.07	101.050	0.39				
6	2.00	162	1.45	167.50	1.47	71	1	203.00	1.10	155.480	0.55				
326	2.43	4	4.00	330.00	2.44	116	1	388.00	1.55	52.790	0.37				
		75	3.41	75.00	3.41	19	1	84.50	2.06	26.332	0.33				
38.5	3.50	198	1.96	236.50	2.11	94	1	283.50	1.38	71.050	0.20			有	銀両建て総計363件。
58	4.83	469	2.34	526.50	2.48	139	1	596.00	1.70	34.790	0.20				
103	3.96	14	2.80	117.00	3.77	27	1	130.50	2.25	9.900	0.18				
		51	2.55	51.00	2.55	23	1	62.50	1.45	31.320	0.19				
		1,023	5.47	1,023.00	5.47	136	1	1,091.00	3.38	51.180	0.23				
1.5	1.50	10	1.43	11.50	1.44	13	1	18.00	0.86	18.100	0.17				
		53	2.30	53.00	2.30	21	1	63.50	1.44	28.330	0.22				
		116	1.54	115.50	1.54	117	1	174.00	0.91	47.980	0.18				
		7,275	6.01	7,274.50	6.01			7,274.50	6.01	3,017.250	43.10				大元として入力
14	14.00	258	2.35	272.00	2.45	88	1	316.00	1.59	26.400	0.21				
		365	3.80	365.00	3.80	1	1	365.50	3.77	3,548.820	91.00			有	銀元建て総計98件、銀両建て総計41件。
2063.6	1.72	2,107	3.92	4,170.10	2.40	1615	1	4,977.60	1.49	271.270	1.23			有	銀元建て総計3430件、銀両建て総計396件。
4	1.33	565	3.40	569.00	3.37	35	1	586.50	2.88	853.400	28.45			有	
		160	1.62	160.00	1.62	130	1	225.00	0.98	40.000	0.22				
11.5	1.44	23	1.35	34.50	1.38	13	1	41.00	1.08	5.340	0.27				
2300	3.01	43	1.54	2,343.00	2.96	682	1	2,684.00	1.82	30.564	0.23			有	銀両建て総計155件。
147.5	2.95	64	1.36	211.50	2.18	55	1	239.00	1.57	87.830	0.82				
		327	2.14	327.00	2.14	111	1	382.50	1.45	18.216	0.26				
74.9	5.76	581	2.19	655.40	2.36	142	1	726.40	1.73	19.260	0.19			有	判別不能6件。銀元建て総計462件。
		7,043	9.52	7,042.70	9.52			7,042.70	9.52					有	1.5元未満の部分は詳細不明。大元として入力。
16.9	0.20	1,373	5.05	1,389.90	3.90	106	1	1,442.90	3.12					有	大元建て総計345件。
424.66	2.78	972	3.00	1,396.16	2.93	318	1	1,555.16	1.96						銀元建て総計802件。
431	3.19			431.00	3.19			431.00	3.19						
10.5	1.50	1,029	2.98	1,039.50	2.95	5	1	1,042.00	2.92						
7	2.33	292	3.40	299.00	3.36	136	1	367.00	1.63	6.100	0.87				
14.5	0.22	103	3.81	117.50	1.25	21	1	128.00	1.11						
12,235		27,894		40,128.86		5,732		42,994.86		17,754.543		2500			
407.839	3.40	620	3	819	3	130.2727	1	877.45	2.38	277.408	5.33	2500	100		

註

- (1) Man-Houng, Lin. *China Upside Down: Currency, Society, and Ideologies, 1808–1856*, Cambridge, Mass.: Harvard University Asia Center, 2006.
- (2) アレハンドラ・イリゴイン「道光年間の中国におけるトロイの木馬——そして太平天国反乱期の銀とアヘンの流れに関する解釈」豊岡康史・大橋厚子編『銀の流通と中国・東南アジア』山川出版社、2019年。
- (3) Richard Von Glahn, *Fountain of Fortune: Money and Monetary Policy in China 1000–1700*, Berkeley, Calif.: University of California Press, 1996. これに対して岸本美緒は以下の文献で反論している。「明末清初の市場構造——モデルと実態」古田和子編『中国の市場秩序——17世紀から20世紀前半を中心に』慶應義塾大学出版会、2013年、68–82頁。
- (4) リチャード・フォン・グラン「十九世紀中国における貨幣需要と銀供給」豊岡・大橋編前掲書。
- (5) 岸本美緒「十九世紀前半における外国銀と中国国内経済」豊岡・大橋編前掲書、113–149頁。地域的な詳細については、同「清代中期中国的貨幣使用情況——以東南諸省為中心」陳慈玉主編『承先啓後——王業鍵院士紀念論文集』（萬卷樓圖書股份有限公司、2016年）を参照、清代の貨幣流通の地域的な変容について、以下の各論で福建省や北京については李紅梅が研究し、その成果の一部を岸本が引用している。李紅梅「清代における福建省の貨幣使用実態——土地売券類を中心として」『松山大学論集』18-3、2006年、同「清代における貨幣流通の地域格差——乾隆～嘉慶期を中心として」『松山大学論集』24-4-2、2012年。中国全体に関しては、張寧による概括的研究もあるが、各地域についての計量的な分析はない。張寧『15–19世紀中国貨幣流通変革研究』中国社会科学出版社、2018年。
- (6) 岸本の市場論については、以下を参照。岸本美緒『清代中国の物価と経済変動』研文出版、1997年、206–207頁、同前掲「明末清初の市場構造——モデルと実態」、58–63頁。
- (7) 黒田明伸『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学出版会、1994年、62–91頁。
- (8) 黒田明伸『貨幣システムの世界史——〈非対称性〉をよむ』岩波書店、2003年、204–209頁。
- (9) Akinobu Kuroda, *A Global History of Money*, Abingdon and New York: Routledge, 2020, pp. 28–30.
- (10) 岸本前掲「十九世紀前半における外国銀と中国国内経済」、148頁。
- (11) 柏祐賢『柏祐賢著作集 第3巻 経済秩序個性論（I）——中国経済の研究』京都産業大学出版会、1985年、282–283頁。
- (12) 趙岡は北宋初年の土地分配におけるジニ係数は0.75と高い数値であったとする。趙岡・陳鍾毅『中国土地制度史』聯経出版、1982年、195–242。趙岡を含む土地稀少化の議論を整理したものには青木敦「中国経済史研究に見る土地希少化論の伝統」大島真理夫編著『土地希少化と勤勉革命の比較史——経済史上の近世』（ミネルヴァ書房、2009年）がある。
- (13) 足立啓二『明清中国の経済構造』汲古書院、533–540、546–547、559–565頁。
- (14) 士大夫と庶民の間の格差・差別については下記を参照。岡本隆司『腐敗と格差の中国史』NHK出版、2019年。
- (15) 巫仁恕『優游坊廂——明清江南城市の休閒消費与空間変遷』中央研究院近代史研究所、2013年。
- (16) 岸本前掲書、453–454頁。

- (17) Chung-li Chang, *The Income of the Chinese Gentry*, Seattle: University of Washington Press, 1962, pp. 326–327.
- (18) 根岸信『中国のギルド』日本評論新社、1953年、181頁。
- (19) 増井経夫「会館公所」（原著1965年）『中国の銀と商人』研文出版、1986年、155頁。
- (20) Chung-li, Chang, *The Chinese Gentry: Studies on Their Role in Nineteenth-Century Chinese Society*, Seattle and London: University of Washington Press, 1955, p. 111.
- (21) 後述する「重建富美宮題捐碑（D-19）」にみられるように、兌換についてはそれをできる限り回避しようと試みる場合もあった。
- (22) このほか、郊外の人口20～34万人を加えると、北京の人口は清末には100万人を上回る。韓光輝『北京歴史人口地理』北京大学出版社、1996年、120–129頁。
- (23) 清代蘇州の最盛期の人口について、曹樹基は40～50万人の規模とみなしている。曹樹基『中国人口史 第5巻 清時期』復旦大学出版社、2001年、750頁。一方、李伯重は100万人と推計している。李伯重「工業發展与城市变化——明中葉至清中葉の蘇州（中）」『清史研究』2002年第1期、2002年、63頁。
- (24) 陳正書『上海通市 第4巻 晚清經濟』上海人民出版社、1999年、199頁。
- (25) 1905年の公共租界人口は約46万人、フランス租界は約10万人、1906年の華界の人口は約67万人とされ、この時点で上海の人口は約120万人であったと考えられる。上海通志編纂委員会編『上海通志』上海人民出版社・上海社会科学院出版社、2005年、665頁。
- (26) アヘン戦争前の蘇州の会館のうち、士大夫が創設あるいは士大夫にサービスする会館は1館もなかった。王衛平『明清時期江南城市史研究——以蘇州為中心』人民出版社、1999年、185頁。
- (27) 李華編『明清以来北京工商會館碑刻選編』文物出版社、1980年、20頁。むろん、士大夫が設立した会館も商業的な経営を行っており、商業的要素がなかったわけではない。劉風雲「清代北京会館的政治属性与士商交融」『中国人民大学学報』2005年2期、2005年、126–127頁。
- (28) スペイン銀貨の中国への流入については以下を参照。百瀬弘「明代の銀産と外国銀に就いて」（原著1935年）『明清社会經濟史研究』研文出版、1980年、44–65頁。
- (29) 明清時代の中国への銀流入の全体像については岸本前掲書、176–192頁を参照。
- (30) 陳春声「清代広東的銀元流通」『中国錢幣』1985年1期、1985年、50頁。
- (31) 曹樹基前掲書、186、193頁。
- (32) 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選集』生活・読書・新知三聯書店、1959年、1頁。
- (33) 蘇州歴史博物館・江蘇師範大学歴史系・南京大学明清史研究室『明清蘇州工商業碑刻集』江蘇人民出版社、1頁。
- (34) 王国平・唐力行『明清以来蘇州社会史碑刻集』蘇州大学出版社、1998年は、『明清蘇州工商業碑刻集』および江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選集』（生活・読書・新知三聯書店、1959年）に含まれていない500例の碑刻を収録している。
- (35) 上海博物館図書資料室『上海碑刻資料選輯』上海人民出版社、1980年、1–2頁。
- (36) 佐伯有一・田仲一成・浜下武志・中山美緒・上田信編註『仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集（一～六）』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、1975～1983年。
- (37) 李華編前掲『明清以来北京工商會館碑刻選編』。

- (38) 第1・2回の調査は今堀誠二、第3回の調査は奥野信太郎とともに行われた、資料収集のほか、第1・2回の調査では古老への聞き取りも行われた。仁井田陞『中国の社会とギルド』岩波書店、1951年、9頁。第1・2回の調査方法については、今堀誠二「北京のギルドの調査——仁井田陞博士輯『北京工商ギルド資料輯』によせて」同『中国封建社会の構成』勁草書房、1991年、299-309頁。なお、21世紀初頭には、前川亨らによって北京の会館に対する再調査が行われている。前川亨「北京市内旧工商ギルド会館調査報告初編（上・下）——『仁井田陞博士輯 北京工商ギルド資料集』所載会館の再調査」『東洋文化研究所紀要』152・153、2007・2008年。
- (39) 佐伯ほか編註『北京工商ギルド資料集（一）』、11-12頁。
- (40) 1962年に整理を終えて北京出版社に原稿が送られ、1964年7月には校正刷りが出てきたが、その後、印刷が停止し、文革後の1980年に文物出版社から出版された。李華編前掲書、1頁。
- (41) 両者の重複は21館になる。今堀前掲論文、285-299頁。
- (42) 北京に関しては李金龍・孫興亜主編『北京会館資料集成』全3巻（学苑出版社、2007年）が網羅的な資料集であり、現況についても詳細を示すが、収録されている碑刻は『明清以来北京工商会館碑刻選編』からの引用である。
- (43) 鄭振滿・丁荷生（Kenneth Dean）編『福建宗教碑銘彙編』泉州府分冊、全3冊、福建人民出版社、2003年。
- (44) 『福建宗教碑銘彙編』泉州府分冊、上冊、1頁。
- (45) 黎志添・李静編著『広州府道教廟宇碑刻集釈』全2冊、三聯書店（香港）有限公司、2013年。
- (46) 広州に関しては譚棣華・曹騰騑・冼劍民編『広東碑刻集』（広東高等教育出版社、2001年）もあるが、広東省全体を対象にし、各地域の碑刻数が限定され、寄付者の省略もみられるため、本論では利用しなかった。広州の仏教寺院については李仲偉・林子雄・崔志民『広州寺庵碑銘集』（広東人民出版社、2008年）も寄付者の省略が多いために、利用しなかった。
- (47) 『広州府道教廟宇碑刻集釈』上冊、1-3頁。
- (48) 『上海碑刻資料選輯』372頁。
- (49) 『北京工商ギルド資料集（五）』948-950頁。
- (50) 北京における秤量としては、京公砵平のほか、京平・市平・庫平があった。宮下忠雄『近代中国銀両制度の研究——中国幣制の特殊研究』有明書房、1952年、178-180頁。
- (51) 台湾においては1ドル銀貨が大銭、4ペソ銀貨が中銭と呼ばれていた。百瀬弘「清代に於ける西班牙弗の流通」（原著1936年）百瀬前掲書、96頁。
- (52) 後述する泉州の「重建富美宮題捐碑（D-19）」には「仏銀」の記載がみられる。
- (53) 七折銭の場合は銅銭700文で1両とみなされた。七折銭慣行については岸本前掲書、327-349頁参照。
- (54) 太平天国時期の財政難に対応するため、咸豊3年より銀票・銭票・大銭・鉄銭が各地で発行されたが、いずれも信用を失い、失敗に終わった。湯象龍「咸豊朝の貨幣」『中国近代経済史研究集刊』2巻1期、1933年、12-26頁。
- (55) 呂作燮「明清時期蘇州的会館和公所」『中国社会経済史研究』1984年第2期、1984年、13頁。

- (56) 王衛平前掲書、242頁。
- (57) 岸本前掲「十九世紀前半における外国銀と中国国内経済」、127-128頁。
- (58) 呂作燮前掲論文、18頁。
- (59) 『江蘇省明清以来碑刻資料選集』 282-294頁。
- (60) 『江蘇省明清以来碑刻資料選集』 372-374頁。
- (61) 『江蘇省明清以来碑刻資料選集』 377-378頁。
- (62) 岸本前掲書、341頁、『明清蘇州工商業碑刻集』 334-335頁。
- (63) 岸本前掲書、340-341頁、『明清蘇州工商業碑刻集』 136-137頁。
- (64) 『明清蘇州工商業碑刻集』 142-146頁。
- (65) 『明清蘇州工商業碑刻集』 146-152頁。
- (66) 『江蘇省明清以来碑刻資料選集』 110-112頁。
- (67) 『明清蘇州工商業碑刻集』 362-363頁。
- (68) 『江蘇省明清以来碑刻資料選集』 305頁。
- (69) 黒田前掲『中華帝国の構造と世界経済』 89-90頁。
- (70) 七折銭慣行は19世紀末まで続いたことが指摘されている。岸本前掲書。341頁。
- (71) 范金民「明清時期運河重鎮蘇州城的地域商幫」『人文論叢』2018年2期、2018年、180頁。
- (72) 『明清蘇州工商業碑刻集』 20-21頁。
- (73) 呂作燮前掲論文、12頁。
- (74) 「今者捐釐有碑矣、樂輸有碑矣、而首事諸君子之庇墊、自丙戌至丙申十余年間、其苦心籌画以濟乎捐輸之乏者、不可不揭其功以記之。」『明清蘇州工商業碑刻集』 333頁。
- (75) 『明清蘇州工商業碑刻集』 333-337頁。
- (76) 王衛平前掲書、199-200頁。
- (77) 呂作燮前掲論文、12頁。
- (78) 范金民前掲論文、165頁。
- (79) 官僚で寄付額が判明しない兵部主事陳諱の寄付額は30元～40元と思われる。『明清蘇州工商業碑刻集』 352頁。
- (80) 鄭藻如は李鴻章の下で洋務事業に携わり、建碑の時期に出使美国欽差大臣としてアメリカに赴任していた。鄭藻如の前任が、寄付者の冒頭にある陳蘭彬である。僑務をめぐる鄭藻如の活動については園田節子『南北アメリカ華民と近代中国——19世紀トランスナショナル・マイグレーション』東京大学出版会、2009年、169-190、247-253頁。
- (81) 1876年12月、出使欽差大臣である郭嵩燾は広東出身の豪商で名望家である胡璇澤にシンガポールで会い、翌年、胡を駐シンガポール領事に選んだ。1878年3月に駐シンガポール領事館が開設され、胡璇澤は初代領事となったが、1880年3月に死去している。賈熟村「中国首任駐外領事胡璇澤」『嶺南文史』2000年1期、2000年、22-24頁、箱田恵子『外交官の誕生——近代中国の対外態勢の変容と在外公館』名古屋大学出版会、2012年、61頁。
- (82) 候補知県の温宗彦は1879年に広東試用道張鴻祿とともに輪船招商局から派遣され、バンコクで資金を募集、翌1880年にはシンガポールで資金を募集し、華人商人から6万5,200両を集めたとされる。戴鞍鋼「華僑華人与上海城市精神」『文匯報』2013年10月28日。その際に、両広会館についての寄付もあわせて募ったのであろう。
- (83) 『江蘇省明清以来碑刻資料選集』 347-350頁。
- (84) 湘軍系統の会館は南京のほか、安徽の安慶・蕪湖、江西の南昌・湖口・景德鎮、江蘇の

- 儀徴、福建の福州、陝西の西安で再建・創建された。袁徳宜等編『湖南会館史料九種』岳麓書社、2012年、26-31頁。
- (85) 彭玉麟は曾國藩の下で湘軍の水師を編制し、これを率いて太平天国軍と戦った。成暁軍『曾國藩的幕僚們』東方出版中心、2000年、58-86頁。
- (86) 『江蘇省明清以來碑刻資料選集』394-404頁。
- (87) 例えば彭玉麟は1862～1866年に兵部右侍郎としての養廉銀は年間2万両であったが、ほとんどを軍需に費やしたといわれる。成暁軍前掲書、99頁。
- (88) 袁徳宜前掲書、26-30頁。
- (89) 陳正書前掲書、202-203頁。
- (90) 樊衛國『民国上海同業公会与企業外部環境研究』上海世紀出版集團、2014年、24-36頁。
- (91) 倪玉平は、嘉慶・道光時期の関稅收入を分析し、関稅收入の減少から道光不況を論斷することはできないとしている。倪玉平『清朝嘉道関稅研究』北京師範大學出版社、2010年、162-170頁。ただし、関稅は定額であるため、貿易額に大幅な減少がみられないことが証明されたのみである。貿易額が増加した場合、それに対応して定額が引き上げられるには時間を要するため、実際の貿易額を反映しているわけではない。
- (92) 1820年頃に上海は1年に3千数百隻の沙船が出入りする港になっていた。松浦章『清代上海沙船航運業史の研究』関西大學出版部、2004年、57-60頁。
- (93) 岸本前掲、「十九世紀前半における外国銀と中国国内經濟」、127-128頁。
- (94) 宮下前掲書、220-227頁。
- (95) 『上海碑刻資料選輯』210、507頁。
- (96) 『上海碑刻資料選輯』235、507頁。
- (97) 泉漳會館に関しては、福建・広東人が中心となって引き起こした上海小刀會の反亂後における會館再建のための寄付を記載した咸豐7（1857）年の「重建泉漳會館捐款碑（1857年）」においても、船舶関係者が多いが、寄付は銀兩建てが増えていく。『上海碑刻資料選輯』239-244頁。
- (98) 『上海碑刻資料選輯』28-32頁。
- (99) 『上海碑刻資料選輯』491-494頁。
- (100) 『上海碑刻資料選輯』211-214頁、岸本前掲書、341頁。
- (101) 『上海碑刻資料選輯』218頁。
- (102) 『上海碑刻資料選輯』32頁、岸本前掲書、341頁。
- (103) 『上海碑刻資料選輯』32頁。
- (104) 『上海碑刻資料選輯』208-209頁。
- (105) 『上海碑刻資料選輯』492-494頁。
- (106) 『上海碑刻資料選輯』23-28頁。
- (107) 『上海碑刻資料選輯』34頁。
- (108) 「十年、寇至、又遭毀、因倭芙蓉新弛禁、称洋藥、我潮此業驟起。同治五年、郭日長部郎倡儀、合我潮糖・菸・洋藥各按貨抽釐、卜吉於十六鋪之逢迤南、經之營之。」『上海碑刻資料選輯』325頁。
- (109) 拙著『海の近代中国——福建人の活動とイギリス・清朝』名古屋大學出版會、2013年、42、58頁。
- (110) 郭緒印『老上海的同鄉團體』文匯出版社、2003年、120頁。開港後のアヘン貿易について

- は杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房、1996年、58-62頁を参照。
- (111) 本野英一『伝統中国商業秩序の崩壊——不平等条約体制と「英語を話す中国人」』名古屋大学出版会、2004年、101頁。
- (112) 汕頭の会館はその所在地に関わらず、商人以外の入会を認めていなかったとされる。根岸前掲書、145頁。
- (113) 『上海碑刻資料選輯』32頁。
- (114) 『上海碑刻資料選輯』49頁。
- (115) 『上海碑刻資料選輯』211頁。
- (116) 『上海碑刻資料選輯』387頁。招商局に関連して同じ「平江公所購地助款人題名碑(B-40)」(1895～1896年)で招商局煤棧(石炭貯蔵庫)が20元を寄付している。同390頁。
- (117) 『上海碑刻資料選輯』2頁。
- (118) 岩井茂樹『中国近世財政史の研究』京都大学学術出版会、2004年、118-150頁。
- (119) 胡春煥・白鶴群『北京的会館』中国経済出版社、1994年、4頁。
- (120) 胡春煥・白鶴群前掲書、28-38頁。
- (121) 胡春煥・白鶴群前掲書、38-39頁。
- (122) 佐伯ほか編註『北京工商ギルド資料集(一)』、257-258頁。
- (123) 李前掲「清代における福建省の貨幣使用実態」、146頁。
- (124) 李前掲「清代における福建省の貨幣使用実態」165頁。
- (125) 『明清以来北京工商会館碑刻選編』9-10頁。
- (126) 加藤繁『支那経済史考証 下巻』東洋文庫、1952年、564頁、李華編前掲書、2頁。
- (127) 張徳昌『清季一個京官的生活』香港中文大学、1970年、66、72-81、頁。
- (128) 道光21(1841)年の曾国藩の京官生活は銅錢建て、銀両建てで支払われており、洋銀建てではない。張宏傑『給曾国藩算賬——一個清代高官的收支(京官時期)』中華書局、2015年、39-116頁。
- (129) 孟県会館はここを含めて北京に3館あり、ほかは崇文門外の紫竹林、宣武門外石頭胡同に不動産があったとされる。胡春煥・白鶴群前掲書、198頁。
- (130) 「乃集同人共議、每售穉犢一匹、恭除香資銀壹錢。迄今凡九閱春秋、日集月累、合計得貳千參百余金。…」『明清以来北京工商会館碑刻選編』89-90頁。
- (131) 『明清以来北京工商会館碑刻選編』5-7頁。
- (132) 黃鑾暉『山西票号史 修訂本』山西経済出版社、2002年、46-55頁。
- (133) 増井経夫は北京の会館の事例をふまえ、会館の設立が小さな県や邑であると商人の力が強く、大きな府や省であると官の力が強くなることを指摘している。増井前掲「会館公所」156頁。
- (134) 京官は物価の高い北京での高い住居費や生活費の他に多額の交際費を必要とした。同治元(1862)年～光緒15(1889)年におよぶ京官時代の李慈銘の支出では宴会・娯楽・応酬などの費用は多い年では支出の半分を上回った。張徳昌前掲書、52-57、66頁。京官時代の曾国藩の道光21年の出費のうち、日常の生活費が29%、住居費が16%を占めたのに対して交際費は21%にのぼった。張宏傑前掲書、49-96頁。
- (135) 東南アジア華人関係ではフィリピンを中心とした寄付が目立つ。金井の西資岩寺は光緒3(1877)年建碑と推定されるフィリピンおよび広東からの寄付を記した「重修西資岩題捐碑(D-39)」とマニラからの寄付を記した「重修西資岩題捐碑(D-40)」がある。「重修西資

- 岩題捐碑 (D-40)」に記載された寄付は207件、1427.75元に及ぶが、これは住持の僧証馨がフィリピンに赴いて寄付を募った成果であった『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、425-427頁。西資岩寺は光緒11(1885)年に僧証馨が三度目のフィリピン訪問により、寄附金を集め、その成果は「重修西資岩徵信碑 (D-48)」に刻まれている。『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、439-442頁。このほか「龍山寺重興碑記 (D-41)」では「呂宋衆信士」が2,700元を寄付しているほか。福全の光緒5(1879)年の「重修城隍宮記 (D-42)」にもフィリピン華人による88件、合計98元の寄付がみられる。『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、431-432頁。フィリピン以外では「靈源寺重修碑記 (D-45)」には「泗水吳厝公捐」が200元と、ジャワ島のスラバヤからの寄付事例があるほか、東南アジア女性との混血「番仔扶西」が6元を寄付している『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、436頁。
- (136) 1905年以降についての推計であるが、福建への華僑送金は年間2,000万ドルに達していたとされている。鄭林寛『福建華僑匯款』福建省政府秘書処統計室、1940年、39頁。もっとも、1905年当時の華僑送金は外国銀行を利用して為替送金で行われており、現銀の持ち込みの割合は大幅に低下している。
- (137) 道光『廈門志』巻4「風俗記」。百瀬前掲書、101頁。
- (138) 広東において銀の秤量表記がなされていることが福建との違いであるという点については岸本前掲「清代中期中国的貨幣使用情況」217-218頁に指摘されている。
- (139) 廈門における徴税を回避する目的もあり、開港後もジャンク貿易によって泉州と台湾は深く結びついていた。拙著『海の近代中国』、300-304頁。
- (140) 16世紀中葉には、密貿易の中心であった福建南部の漳州で銅銭が大量に私鑄されており、その私鑄銭は江南や西日本、ジャワなどに流出して受領された。黒田前掲『中華帝国の構造と世界経済』、125-127頁、同『貨幣システムの世界史』、119-134頁。
- (141) 岸本前掲「十九世紀前半における外国銀と中国国内経済」、116-118頁。
- (142) 『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、417頁。
- (143) 『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、359-366頁。
- (144) 『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、423頁。
- (145) 岸本前掲「十九世紀前半における外国銀と中国国内経済」、117頁。
- (146) 『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、318頁。
- (147) 『福建宗教碑銘彙編泉州府分冊』上、327-332頁。
- (148) 『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、318頁。
- (149) 『福建宗教碑銘彙編泉州府分冊』上、324-332頁。
- (150) 『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、341頁。
- (151) 粘良図「清代泉州東石港航運業考析——以族譜資料為中心」『海交史研究』2005年2期、2005年、86-89頁。寄附金については、以下のようにある。「…費白銀壹千壹佰壹拾捌員、所捐貲、周益典十之八九、衆人分其一二、皆無難色。」『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、346頁。
- (152) 陳支平『民間文書与明清東南族商研究』中華書局、2009年、77-83頁。
- (153) 『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、428頁。
- (154) 『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、359-366頁。
- (155) 『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』上、292-293頁。
- (156) 『広州府道教廟宇碑刻集釈』上、4-9頁。魏校の淫祀破壊令については井上徹『華と夷の

- 間＝明代儒教化と宗族』研文出版、2019年、139-156頁を参照。
- (157) 百瀬前掲「清代に於ける西班牙弗の流通」102-108頁。
- (158) 百瀬前掲「明代の銀産と外国銀に就いて」、63頁。
- (159) 百瀬前掲「清代に於ける西班牙弗の流通」、102-103頁。
- (160) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、714-723頁。
- (161) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、515-516頁。
- (162) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、660、687頁。
- (163) 明清時代の仏山鎮の経済発展については以下を参照。羅一星『明清仏山経済発展与社会変遷』広東人民出版社、1994年。
- (164) 仏山堡柵下鋪藕欄にある天后廟は崇禎元（1628）年建立で、乾隆15年・乾隆42年・嘉慶5年とこの光緒2年の重修である。当該碑刻は現在は仏山祖廟の碑廊にある。『広州府道教廟宇碑刻集積』上、115頁。
- (165) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、117-174頁。
- (166) 黒田前掲『中華帝国の構造と世界経済』37頁。
- (167) 岸本前掲『清代中国の物価と経済変動』355、359頁。
- (168) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、681-687頁。
- (169) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、202頁。
- (170) 伍秉鑑の資産については、ハンターの著作において、1834年に伍が自らの資産が2,600万ドルと推定したとされることが根拠になっている。W. C. Hunter, *The 'Fan Kwae' at Canton: Before Treaty Days 1825-1844*, London: Kegan Paul, Trench, & co., 1882, p. 48. この記述をモースが引用、さらに梁嘉彬がモースから引用したことによって広まった。Morse, *The Chronicles of the East India Company Trading to China*, vol. 4, Oxford: Clarendon Press, 1926, p. 348. 梁嘉彬『廣東十三行考』商務印書館、1937年、広東人民出版社、1999年（再販）、285頁。
- (171) 建碑の1812年に盧観恒が死去し、その後を子の盧文錦が継いでいる。梁嘉彬前掲書、293-296頁。
- (172) 梁嘉彬前掲書、296頁。粵海関の徴税システムの仲での総商制度導入については、岡本隆司『近代中国と海関』（名古屋大学出版会、1999年）99-100頁を参照。
- (173) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、219-230頁。
- (174) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、237頁。
- (175) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、276-283頁。
- (176) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、242-243頁。
- (177) 『広州府道教廟宇碑刻集積』上、544頁。
- (178) 乾隆19（1754）年の「玉虚宮重修碑記（E-16）」で「花女秦亜兼」・「花女姚亜玉」はそれぞれ1銭を、嘉慶4（1799）年の「重修北帝廟碑記（E-30）」で「花女李亜清」は1銭1分、嘉慶10（1805）年の「重修華光廟碑記（E-32）」では「霍賜弟花女」は2銭を寄付している。さらに「花女梁亜什」は道光12（1832）年の「重修北帝廟碑記（E-40）」・同治7（1868）年「重修北帝廟碑記（E-55）」と2度にわたり1中元を寄付している。道光12年に梁亜什は他に紗帳を3組寄付している。その後も光緒9（1883）年の「重修玄帝殿観音殿碑記（E-59）」では「信女花女」は1中元を、光緒17（1891）年の「重建玉虚宮碑（E-61）」では「花女馮浣洳」は1元寄付したとある。『広州府道教廟宇碑刻集積』上、403、412、496、530、564、571、829頁。

- (179) 上田裕之『清朝支配と貨幣政策——清代前期における制錢供給政策の展開』汲古書院、2009年、299-304頁。乾隆期における銅錢をめぐる政策については黨武彦『清代經濟政策史の研究』（汲古書院、2011年）第1部を参照。
- (180) 上海などの主要都市において銀錠の品位を鑑定して、重量を検定してこれを保証する専門業者の公估局が成立したのは19世紀半ば以降であった。宮下前掲書、70-76頁。
- (181) Kuroda, *op. cit.*, p. 29.
- (182) 黒田前掲『貨幣システムの世界史』、47-53頁。
- (183) 1850年代の広州の貿易形態の変化については、以下を参照。岡本隆司前掲書、162-170頁。
- (184) 天地会の乱が勃発する前年の1853年に広州は1848年以来の不景気の中で最悪の金融危機であったとされている。Frederic Wakeman Jr., *Strangers at the Gate: Social Disorder in South China, 1839-1861*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1966, p. 136. 土客械闘はこの天地会の乱で、政府の呼びかけに応じて客勇が編制されたことを契機に激化したとされ、両者は連動していた。劉平『被遺忘の戦争——咸豊同治年間広東土客大械闘研究』商務印書館、2003年、68-83頁。
- (185) Lin, *op. cit.*, pp. 115-143.
- (186) 『広州府道教廟宇碑刻集釈』219-230頁。
- (187) 先述のように本碑刻においては、「金長順商船対乍浦公鳩」が3,387元を寄付しているが、これは個人の寄付ではないうえ、大きくデータを左右するために対象から外した。『福建宗教碑銘彙編泉州府分冊』上、359-366頁。
- (188) 「聯義会衆商件数」などの集団による寄付額が大きい、それらは対象から外して計算した。『明清蘇州工商業碑刻集』335-337頁。
- (189) 計算の際には「浙紹炭業」をはじめとする商人や集団による寄付14件を対象から外した。『上海碑刻資料選輯』211-215頁。
- (190) 『明清蘇州工商業碑刻集』352-354頁。
- (191) 計算の際には、「麻貨衆商」といった商人による集団寄付12件を除外した。『明清蘇州工商業碑刻集』345-349頁。
- (192) 『上海碑刻資料選輯』326-330頁。
- (193) 『江蘇省明清以来碑刻資料選集』420-422頁。
- (194) 『上海碑刻資料選輯』235-238頁。
- (195) 計算の際には漢口、江西呉城、天津で集められたそれぞれ300両、130両、60両の寄附金は対象から外した。『北京工商会館碑刻選編』7頁。
- (196) 『福建宗教碑銘彙編泉州府分冊』上、338-339頁。
- (197) 『広州府道教廟宇碑刻集釈』117-174頁。
- (198) 『福建宗教碑銘彙編泉州府分冊』上、396-401頁。
- (199) 計算の際には1元 = 0.72両、1中元 = 0.36両で換算した「聚龍会衆信」などの集団による寄付を除外した。『広州府道教廟宇碑刻集釈』13-19頁。
- (200) 計算の際には「本廟遼東会」による10元の寄付を除外した。『広州府道教廟宇碑刻集釈』681-687頁。
- (201) 城南祖廟が300元、城南天后宮が250元を寄付するなど廟や集団の寄付が高額寄付件数の大半を占めているため、計算の際には、そうした事例を除外した。『広州府道教廟宇碑刻集

積』284-312頁。

- (202) Gilbert Rozman, *Urban Networks in Ch'ing China and Tokugawa Japan*, Princeton, New Jersey; Princeton University Press, 1973, pp. 278-284.
- (203) Chang, *The Income of the Chinese Gentry*, pp. 29-32.
- (204) Chang, *The Income of the Chinese Gentry*, pp. 326-327.
- (205) 張仲礼は6億7,523万両のうち、1億2,360万両は商業・金融部門からの収入とし、それは商業・金融部門の38%を占めるとしている。Chang, *The Income of the Chinese Gentry*, pp. 149-198, 327.
- (206) 張仲礼は知県の収入をベースに知府や総督・巡撫の収入を推計している。Chang, *The Income of the Chinese Gentry*, pp. 29-42. この点は、より精緻な推計が必要となろう。
- (207) 柏祐賢前掲書、283頁。
- (208) 巫仁恕前掲書、352-356頁。
- (209) 例えば張集馨は道光15年に陝西督糧道として赴任する際に京官に配った別敬が1万7,000両、翌年に四川按察使に昇進した際には1万5,000両を京官に別敬として配っている。岩井前掲書、52頁。
- (210) 黒田前掲『貨幣システムの世界史』211-212頁。ただし、江南では定期市が衰退するなど中国内でも大きな地域差がみられたことには注意が必要である。
- (211) 清代の捐納制度については以下を参照。伍躍『中国の捐納制度と社会』京都大学学術出版会、2011年。捐納監生の金額は銀100両前後であり、科挙の会試のために北京に赴くのに数百両かかったことと比べればハードルは高くなかった。同、444頁。
- (212) 租界で財産保護を図る中国人の活動については本野英一『伝統中国商業秩序の崩壊——不平等条約体制と「英語を話す中国人」』（名古屋大学出版会、2004年）を参照。
- (213) 善会・善堂の運営経費については以下に詳しい。夫馬進『中国善会善堂史研究』同朋舎出版、1997年。